1981

貿易
陶磁研究 NO.1

日本貿易陶磁研究会

1981

TRADE CERAMICS STUDIES

NO.1

JAPAN SOCIETY FOR THE STUDY OF ORIENTAL TRADE CERAMICS

貿易陶磁研究

NO. 1 1981年8月

目　次

TRADE CERAMICS STUDIES

NO.1 **August 1981**

Contents

貿易陶磁研究　第１号
1981年８月30日 発行
編集・発行　日本貿易陶磁研究会
代表　三　上　次　男
〒247 神奈川県鎌倉市山の内1275
事務局　九州歴史資料館
（亀井明徳）
〒818-01　福岡県筑紫郡太宰府町
ＴＥＬ 09292 (3) 0404
印　　刷　正光印刷株式会社
〒810 福岡市中央区赤坂１－２－21
ＴＥＬ (092) 741―3266～9

陶磁器貿易の研究とその意義

三　上　次　男

古代・中世における東アジアの歴史は、すぐれて先進的な中国を軸として主だった展開を見せたといえる。周辺の諸国は多かれ少なかれ中国文化の刺戟を自国の文化を育てる糧(カテ)とし、発展をつづけたのである。中国と周辺諸国とを結びつける紐帯にはさまざまのものがあったが、そのうち実質的に重要なのは交易であり、古来中国からはさまざまの高級な文物・商品が周辺諸国にもたらされ、周辺諸国もまた中国に物資をはこび、それを通じて文化の流伝や交流がうまれた。

古代いらい中国から周辺諸国に運ばれた物資の大宗は、いうまでもなく絹綿や絹織物であったが、9～10世紀のころからは、絹に加えて新らたに陶磁器が貿易商品として登場した。性質のすぐれた中国陶磁は、中国の周辺諸国や東南アジアの諸国ばかりでなく、遠く南アジアや西アジア、さらにはアフリカ東部の諸国からも求められたから、陶磁器貿易は時代ごとに盛んになり、夥しい数量の陶磁器が全アジアに運ばれたばかりでなく、それぞれの地域の陶磁器製作に大きな影響を与えた。陶磁器は中国とそれぞれの国の貿易関係や文化関係を知る上に必要欠くことのできない存在であったのである。

これらの陶磁器は絹布などとは異なり、腐敗等によって消滅することはない。外国にはこばれた中国の陶磁器は、考古学的に周到な調査を行えば、それぞれの遺跡にそのまま残っている――破片になっているとしても――。これによって輸入陶磁器の時代的・生産地的性質も明らかになれば、同時代に生産された中国陶磁のうちどのような種類のものが選択的に輸入されたか、あるいはその数量や遺跡の年代までも推定することができる。一方、またこれを通じて中国の陶磁器の産地別の生産状況や輸出の態様をも推測することができよう。要するに陶磁器輸出国の生産や貿易の実情や社会経済的背景を知りうるとともに、輸入国の地域別・時代別の社会経済状態や文化的情況、あるいは国内流通の問題を解く鍵となるのである。

このように古代いらいの中国の貿易陶磁は、単に陶磁器の種類や性質をよりよく知る資料となるばかりでなく、それぞれ関係する諸国の社会経済・文化、ときには政治と関連する重要な問題をふくんでいる。

そのため、近時、この問題に対する関心が世界各国とも急激におこり、アジア・アフリカ諸地域より発見される中国陶磁に関する研究が相ついで発表されるようになっ

た。また最近中国でも「外銷陶瓷研究会」が福建省の泉州にもうけられ、全国的規模で研究がすすめられている。

わが日本は中国と近く、古代いらい文化の上でも社会経済の上でもこれと密接な関係を保ち、その刺戟を うけながら 社会を 発展させている。そのことを 示すかのように、古代末いらい大量の中国陶磁がわが国にもたらされた。現在、北は北海道から南は沖縄に至るまで、いたるところの同時代の遺跡から中国陶磁が発見されるのは、それを物語っている。これらは 現在わが国の 多数の 考古学者によって 調査されているが、この調査が充分な成果をあげるため中国陶磁に関する充分な知識が必要であり、また研究者たちが調査の結果をもちより、広い視野から出土状況・陶磁器の性質・遺跡と陶磁器とのかかわりあいなどを相互に比較検討し、それらの種類や年代の決定にあたらなければならない。

このような見地から、1979年4月、島根県松江の県立博物館に、この問題に関心をもつ研究者が集まり、研究集会をひらき、わが国の諸遺跡から出土する中国陶磁、とくに15～16世紀の中国陶磁について研究発表を行い、たがいに検討を加え、大いにうるところがあった。しかしながら極めて多くの問題をかかえるこの研究は、ただ1回の集会ではこと足りないのはもちろんである。こうしてわれわれは、この研究集会を続けることをきめ、対象とする地域も日本や東アジアの国々と限定せず、東アジアの他の国々や東南アジアの諸国にまで拡げ、相互に比較研究することによって、貿易陶磁に関する諸問題に、より明らかな解答を与えることを志した。同時に研究集会の組織化をはかり、日本貿易陶磁研究会を発足させることにしたのである。

この研究計画は幸いトヨタ財団の認めるところとなり、その援助のもとに1979～80年度において会員は日本の重要遺跡より出土する14～15世紀の貿易陶磁について集中的な研究を行った。そうしてまた会員外の研究者の協力をもえて80年9月、同志社大学において研究集会をひらき、稔り多い成果をえた。その際インドネシアからは国立博物館のアブリド（Abu Ridho）氏を、香港からは中文大学の屈志仁（James Watt）氏を招き、それぞれの地域の貿易陶磁研究の実状をたずね、情報の交換を行い、研究の提携を約した。本書はこの貿易陶磁研究会の第一回研究集会における研究成果をまとめた報告書である。この報告書が、今後の貿易陶磁の研究を押しすすめる上の一つの基盤ともなれば、われわれの喜びこれに過ぎるものはない。この報告書の刊行もまたトヨタ財団の援助によって可能となった。われわれは、われわれの研究事業に対する同財団の深い理解に対して、心よりあつく感謝の意を表するものである。

1981年 盛 夏

14・15 世紀の貿易陶磁

——とくに日本出土の中国陶磁——

亀　井　明　徳

Trade Ceramics of the 14th–the 15th centuries
——Particularly about Chinese Ceramics Excavated from Japan

Meitoku Kamei (Kyushu Historical Museum)

In the study of trade ceramics, particularly Chinese ones (which are found in Japan), a chronological way is generally accepted. The way is characterized by two things; one is that the method is based on accurate archaeological unearthing researches, the other is to date Chinese ceramics found in Japan, by presuming from their accompaniments such as other wares, sutra cases and pagodas which are of Japanese make. The way has made a great contribution to the chronological study of Chinese ceramics, and the pieces of the pre-Sung and the late Ming dynasties have been elucidated to a good extent. However, as for the latter half of the Yuan dynasty and the early and the middle Ming dynasty, or the 14th–the 15th centuries, there are many obscure points to be solved. This is because Chinese pieces dated as belonging to the periods are few.

To improve the present state of the research, J.S.S.O.T.C. members worked together at a chronological problem of those pieces in 1980. The results are as follows:

(1) Trade ceramics of the first half of the 14th century

The lower layer of the Kamakura Kōmyōji-ura site and the Dazaifu Site SX1200 (in which there is a wooden plate inscribed with '1331') are an important clue to the early 14th century. Pieces excavated from those sites and the ceramics found off the Sian coast, Korea, have thrown light upon the trade ceramics of the period. Fig. 1, one of the finds from the lower layer of the Kōmyōji-ura site, is typical of the early 14th century. As for the celadon 1–9, they are characterized by the shape of the lotus petals and the unglazed foot rim. Among the white porcelain 10–15, bowls and plates with unglazed mouth rim are most common. These celadon and white porcelain are supposed to date back to the second half of the 13th century or the first half of the 14th century.

(2) Trade ceramics of the second half of the 14th century to the 15th century

Pieces of the late 14th century are fewer than the other times in Japan, exclusive of the castles (gusuku) in Okinawa Pref. Among celadon finds, the celadon bowls with thunder pattern & lotus flower design and the celadon bowls with incised slender lotus flower design are typical of the period. Both are characterized by the way of glazing. They are glazed all over but the outer base: the foot rim and the core of the outer base are also glazed. Such a calcination way first appeared in the middle of the 14th century, never existed before the Yuan dynasty. Throughout the Ming dynasty it was widely used. As for the white porcelain, sauces which are categorized into Group B by Mr. Ono are most common. Bowls are few and they are illustrated by Fig. 3.

The Yuan type blue-and-white, not so many, are excavated from Katsuren-jō, Okinawa Pref., and other seven sites. The jarlet-shaped blue-and-white with plain design are found in great numbers in Southeast Asia, but not in Japan. At present there are many problems of the blue-and-white dated as belonging to the first half of the Ming dynasty. Mr. Ono presented the finds of Aramaki-honmura, Yamanashi Pref. and grouped them into Pre-1. blue-and-white. They are supposed to belong to the late 14th, the early and the middle 15th century. We will make efforts to add more pieces of the same kind to them.

1 はじめに

わが国における貿易陶磁研究、とくに日本出土の中国陶磁に関する研究は、最近の10年間において飛躍的に進展しつつある。かっての日本考古学においては輸入された陶磁器は考察の、あるいは採取の対象外にあったり、逆に辺境地からの出土品を驚きの遺物として捉えるに過ぎなかった。しかし現在は、こうした研究段階は過去のものとなった。したがって、ある地域から貿易陶磁が「出土」しているというだけの報告では研究資料として不十分であり、それがどのような遺構から、いかなる組成をもって検出されたのかが明確なことが出土品の必要条件である。貿易陶磁を資料として歴史的な内外の交易史にまで研究を止揚するために、編年的な位置づけが必須のことであり、そのためには内、外遺物との共伴関係の把握が求められる。こうした基礎的作業の上に内、外の交易史が構築されるのであり、交易史関係の論文に、あいまいな時期設定をもとにして書かれたものが、まま見られるのは憂慮される現象である。このように貿易陶磁研究は考古学の一分野として大きな位置を占めつつあるが、いくつかの研究上の弱点がみられる。ここでは次の２点をあげておきたい。

第一は、貿易陶磁器あるいは輸入陶磁器と言っても、現在この対象は中国陶磁に限られてい

ることであり、中国以外の輸入品である朝鮮半島の施釉陶磁の高麗、李朝、ベトナム、タイの陶磁については、ほとんど研究されていないことである。その原因は勿論これらの陶磁が中国製品に比較して著しく出土量が少いことにあるが、といってこれを等閑視あるいはそれに近い状態におくことは貿易陶磁研究としては不十分である。出土量が少いという因の他に、考古学研究者側に、これらの陶磁についての知識が欠けていることによって見落しをしていることがないであろうか。いづれの陶磁も中国陶磁の模倣から出発しているので識別の困難性はあるが、今後はこの方面への研究の触手が望まれる。東南アジアでは、中国、ベトナム、タイ陶磁が共伴し、研究もこの三者が並行して行われているのであり、全アジアという視点からみると、わが国の貿易陶磁研究も中国陶磁だけでは不十分なことは自明である。

第二には、中国輸入陶磁だけについてみても編年的研究の著しい跛行性がみられることである。わが国に輸入の開始される晩唐、五代、北宋についての編年的研究は、大宰府、平安京などの調査により資料が比較的限定されていることもあってある程度の掌握が可能となっている。つづく南宋については大宰府、鎌倉など全国的に出土量が多いこともあって、編年的研究は最も進み、逆にはたしてこれほど細分できるのであろうかという疑問も生じている。もっともこの編年も碗、皿などに限られ、瓶、壷などの大形品についてはまだ漠然としている。明代中期、とくに16世紀については、近年の山城、館などの調査が進み、とくに一乗谷朝倉氏館跡を中心としてタイプ分類が行われ、次第に研究の質的な拡がりがみられている。これらに対し、研究の遅れているのは、元から明前期、すなわち14～15世紀と明後期の16世紀末～17世紀前半期についてである。後者については55年度の課題としたいのでここでは触れず前者を問題としたい。この時期の研究の遅れの因として、逆に相対的に進んでいる時期をみると、いづれもいわゆる大規模発掘調査が行われているのに対し、14～15世紀についてはそれが少く、あるいは良好な遺跡に恵まれていないことが表面的にはあげられる。

2　14世紀前半の貿易陶磁

不明の部分の多い14～15世紀の日本出土の中国陶磁の様相をつかむために、比較的判明していることの前後の部分をまず分離し、問題の所在をより限定する作業を試みたい。

わが国の出土陶磁のうちで量的に最も多いのは13世紀であり、この時期を中心として位置づけられている陶磁のうち、12世紀まで遡るものと、14世紀前半まで降るものが次第に判明しつつある。そして14世紀中葉をひとつの境として、すなわち元末から明初において技術的な面と貿易政策上にひとつの画期があるように推測される。

14世紀前半期として現時点で質量とも標識となる遺跡は、鎌倉光明寺裏遺跡下層と、元徳2年(1331)銘木札と共伴する大宰府史跡SX1200であり、これに新安海底引揚品で補うと大約の

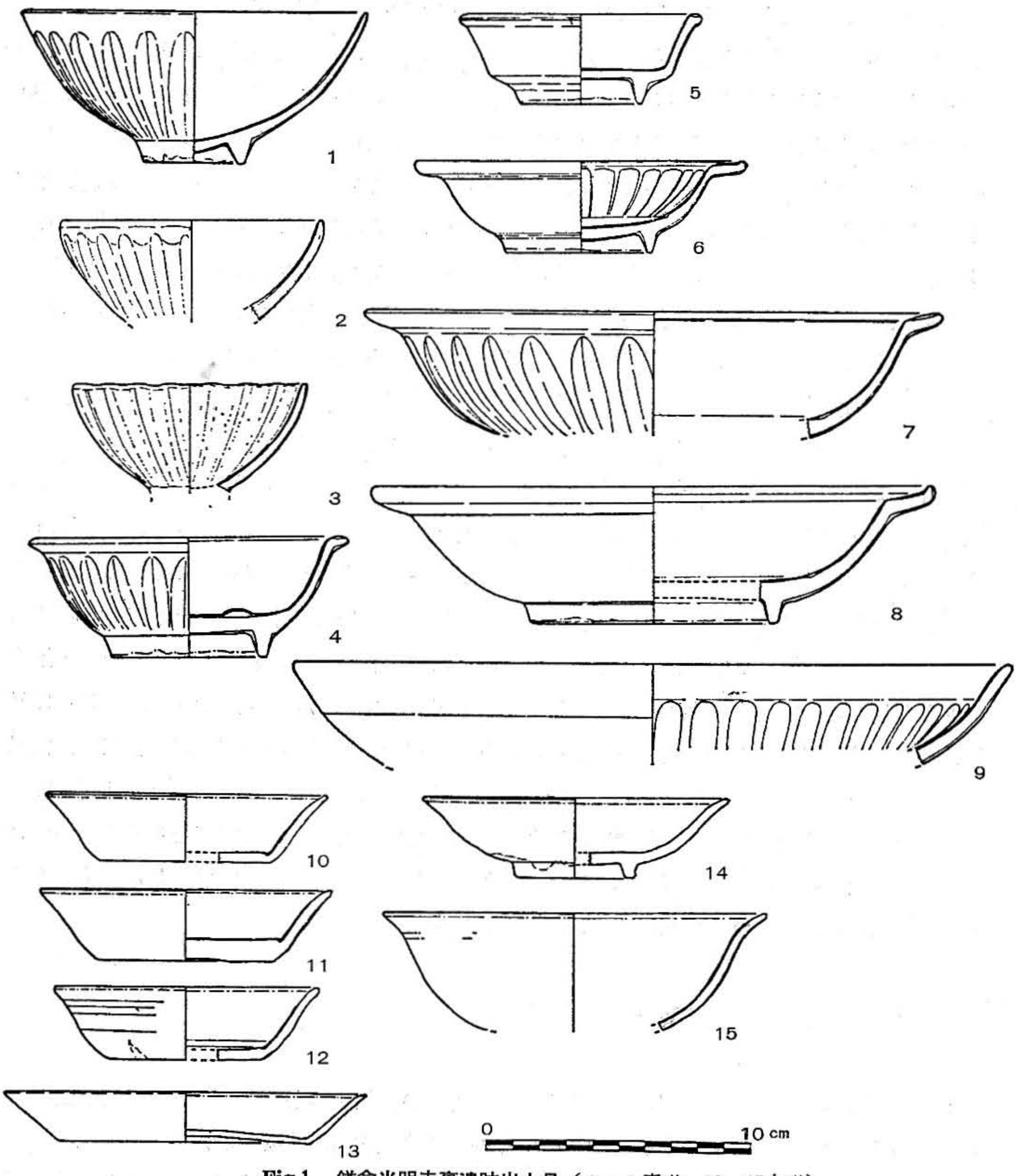


Fig 1　鎌倉光明寺裏遺跡出土品（1～9 青磁、10～15白磁）

ところが理解できる。そのうち普偏的に出土するものを光明寺裏遺跡で代表していくつかあげると（森田氏報告参照)、青磁では、蓮弁文碗 Fig 1―1、2、3、杯4、5、皿あるいは盤6～9である。蓮弁文の特徴は弁先が尖ることとなく丸い。施釉法は畳付を除き、高台内も含めた総釉である。この形の蓮弁は元の酒会壷や瓶の腰部にしばしばみられるものである。光明寺裏遺跡において、これと異り弁先が尖り、鎬の明らかで、高台を露胎にする碗がみられ、小野

正敏氏報告（山梨・新巻本村出土陶磁）では、これをＡ群として14世紀前半代と考えている。しかし、このＡ群の特徴をもつ碗は、むしろ13世紀中葉前後に最も多いものであり、痩身の蓮弁文碗に先行して出現するようである。

杯では、腰部を屈曲させて、直線的に体部をのばすもので、これも総釉である。または腰部が丸味をもち、口縁端部を直上に引き上げるものが大宰府 SX1200 から出土している。また外側面に整った蓮弁文をもち、内底に双魚貼付文をもつ杯もこの時期とみられる。青磁皿または盤では、内面に幅広の蓮弁状の凹みをもつタイプと外側面に碗でみられたと同様の形の蓮弁文をもつものがある。これらの皿類はいづれも畳付を除く総釉である点に大きな特色がある。明代に入ってもこの形は作られ、元との判別が難しい器種であるが、明代のものは、畳付から高台内にも施釉され、これを蛇目状にかき取る施釉法に特色があり、両者を判別するひとつのメルクマールになり、この技法の転換を14世紀中葉前後と考えている。

白磁では、多くの器種があるうちで、もっとも普偏的なものは、いわゆる口ハゲ皿である。法量に大小がみられ、光明寺裏でも多い。この皿は南宋〜元と従来かんがえられているが大宰府史跡の例からみると、13世紀中葉〜14世紀前半代に集中的にみられるようである。碗においても腰部が張り丸味をもった器形で、口縁部を口ハゲにするものがあり、これも皿と同じ頃の製品である。この他に梅瓶や高台付皿などもあるが、省略しておきたい。

以上にあげた青磁、白磁は14世紀前半に限定されるわけではなく、やはり13世紀中葉から14世紀前半と考えておきたい。青磁において、いわゆる同安窯系の櫛描文碗、皿や、龍泉窯系の内面に片切彫文をもつ碗などは、いづれも13世紀中葉以前とみられ、14世紀前半代では、すでに残存形態としてのみ存在する。そして13世紀中葉〜14世紀前半としてあげたものは、14世紀中葉をすぎると同じように古いものが伝世されている状態で残っていくと解釈でき、14世紀中葉、はからずも元から明への交替が、貿易陶磁器の形態の変遷と符合しているようである。

3　14世紀後半〜15世紀の貿易陶磁

上記のように14〜15世紀の出土中国陶磁のなかで、まず14世紀前半のものについては、分離できる見通しが立ってきた。もちろんここで掲げた陶磁は該当時期のなかで極めて小部分に過ぎないが、組み合せ上の標識遺物になることは確かである。こう考えると、研究の遅れている時期は、14世紀後半からの約150 年間にせばめられ、さらに15世紀後半のものは16世紀と重なり合う可能性が強く、16世紀についてはある程度抽出することが可能である。結局のところ不明の下限は14世紀中葉から15世紀中葉ごろまでの、おおよそ 100 年間と言えそうである。

すでに指摘したように、この 100 年間、すなわち明代前半期について、わが国で中国陶磁を出土する良好な遺跡は極めて少く、発掘調査によって得られる成果は限られ、資料の多くは断

片的なものとなっている。こうした状況で、指標となる遺跡をあげると、沖縄県勝連城、同御物城、和歌山県友ケ島沖引揚品および熊本県坂部山畑遺跡がある。これらを中心にしてこの時期の出土中国陶磁についての見通しをたてておきたい。

青磁については、小野報文中でA′とした蓮弁文碗で、弁形は扁平で鎬は不明瞭となり、弁間が離れているタイプがあげられ、勝連城や新安（No. 136）にみられる。この形の碗は前述の光明寺裏出土の蓮弁文碗の系譜につながるものであろう。しかしこれを14C後半期に限定するにはまだ資料不足である。碗ではこれに加えて、雷文帯蓮弁文と箆描き細蓮弁文があげられ、これについては拙稿「明代青磁碗の変遷」（鏡山猛古稀記念論文『古文化論攷』所収 1980）で詳細に論じた。この両者は、大約14世紀後半〜15世紀前半の間とみられる。細蓮弁文碗は元以来の蓮弁文の系譜上のものとみられるが、わが国での出土例は少く、次の線刻の細蓮弁文への推移を15世紀後半とみておきたい。雷文帯蓮弁文碗については、小野報文のなかで「青森県尻八館の例のように、雷文帯をもたないもの（B群）より後出と推定」され、B群から雷文帯への「漸移が14世紀末または15世紀初頭」としている。しかしこの見解には賛意しかねるもので、日本出土の雷文帯蓮弁文碗の祖形は元後半にはすでに現われ、その簡略形がわが国出土品にみられるものであり、小野氏の意見のように断絶があって15世紀初頭にあらわれるものではないであろう。このタイプは南宋以来の蓮弁文の便化の流れとは別の系統と理解しており、またこうした時期細分ができる程良好な資料はない。杯、皿については、口縁部の破片で14世紀前半と分別することはかなり難しく、底部の施釉においては、さきの碗をも含めて畳付にも釉がつけられることが指標となる。しかし熊本・坂野山畑出土の稜花皿（亀井報文参照）は、青磁陰刻牡丹文瓶とともに、応永17年（1410）刻銘塔基からの出土品であり、遅くも15世紀初頭には製作されたものであるが、この皿は畳付から高台内には施釉されていない古式の手法をもち、出土の期間が長く、16世紀代にもしばしばみられるもので、しかも形態を変化させていないようである。いづれにしてもこの稜花皿が15世紀初頭まで遡る紀年銘資料を獲得したことの意義は大きい。

白磁については、小野報文でB群とした小皿で、不透明釉が腰までかかり、高台を抉るものが標識となり、このタイプの出土遺跡は全国的に多い。鈴木報文の勝連城の項に指摘されているように、この皿を除くとこの時期の白磁の資料は少い。勝連城出土品中で、白磁碗で口縁を一度内弯してから開き、高台は露胎で、幅広く、あらい箆削りにつくり、内底に大きく草花文のスタンプがみられるものがある。これは、熊本菊池川河川敷（熊本県美『中国陶磁の美——熊本県出土中国陶磁』1979）や福岡・辻田遺跡Ⅰ区溝4出土品にみられる。しかしこの他には標識となる白磁を抽出することができない。すでに製作の始まっている青花に押されて、白磁が貿易陶磁としても生産が低下したと安直な推論も可能であるが、しかし、しばらくは出土資料を最大限追求する方向で努力をしていきたい。

さて青花であるが、わが国出土の元様式のものは、周知のように勝連城、首里城、今帰仁城、浦添城、読谷村古墓、一乗谷朝倉氏館、根来寺、米子市尾高城から発見されているが、沖縄例を除いては伝世の後、明中期に廃棄されたとみられ、かつ量的には非常に少く、輸入品として貿易陶磁に占める比重は本土においては低いと考えられる。また東南アジアに出土例のある簡略化された元青花の文様をもつ小壷などは今日までわが国では発見されていない。これらの元青花を除くと、14〜15世紀の青花を抽出することが従来できなかったが小野報文は朝倉編年の染付1から遡上して、15世紀末以降に属さない青花を析出する糸口を発見したことに大きな意義がある。山梨新巻本村、友ケ島海底引揚品などの中に存在する青花碗を pre 1と呼称し、実年代では洪武をも含めて15世紀初から15世紀後葉に位置づけようとしている。小数の出土例から帰納された特色は、端反りで高い高台をもち、文様は内面口縁に界線、四方襷文、雷文、見込みに「福」、「寿」、梅月文が描かれている。しかし並行するとみられる皿形品については析出するに至っていない。貿易品として明前期の様式の青花の出土は日本のみならず、世界的に少いようであるが、同時期の青磁の出土はあるので、我々がこの時期の青花を抽出する作業をつづけていかなければならない。出土品から追求する方向とともに、いわゆる「民間青花瓷器」とよばれて紹介されているなかから出土の可能性のあるものを摘出する作業も必要であろう。

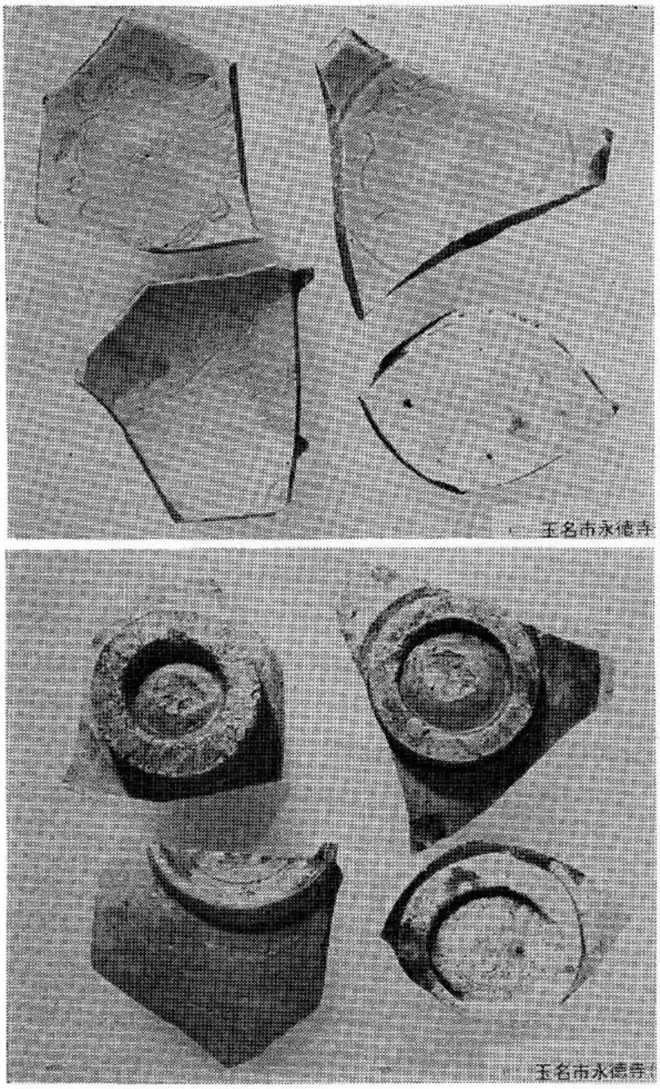


Fig 2　玉名市永徳寺出土品の白磁碗

以上素描してきたように14〜15世紀の出土中国陶磁に関して我々が獲得している知識は相対的に貧しいと言わざるを得ない。しかし1980年度の共同研究により、その曙光が現われはじめたように思われる。現時点で良好な資料を求めようとすると、すでに指摘してきたように沖縄

県の城（グシク）を中心とする遺跡が最もよいようである。ここを集中的に、かつ悉皆的に資料整理を行うことが当面の課題ではなかろうか。

沖縄出土の中国産輸入陶磁器

——勝連城を中心とするグスク出土の資料——

鈴　木　重　治

Chinese Cermamics Found in Okinawa

—— Mostly from 'gusuku' ——

Shigeharu Suzuki (Dōshisha University)

There are many 'gusuku's (castle) in Okinawa and a lot of trade ceramics are discovered there. Most of them are Chinese-made; some are Thai ceramics, Vietnamese or Kōryō ware. Among the materials that have ever been discovered pieces of the Yara gusuku are the oldest. Those from other parts are generally accepted to belong to the 14th, the 15th or the 16th century. In the Katsuren gusuku are found celadon, white porcelain and Yüan blue-and-white. The celadon of the Katsuren gusuku have three different types and they are divided into two periods, the 14th and the 15th centuries. The celadon of the latter period are fewer than the former, which fact agrees with a historical record of the Katsuren gusuku's downfall in 1458. Judging from their appearance and the historical records, it can be said that most of the pieces of the Katsuren gusuku belong to the late 14th century. (reference to PL.)

In the Omono gusuku trade ceramics are found in larger quantity than in the Katsuren gusuku. The Omono gusuku was originally a storage under goverenment control for foreign trade goods in Ryukyu (Okinawa). The ceramics of the Omono gusuku are rather new, compared with those of the Katsuren gusuku and they belong to the 15th or the 16th century.

From Grid28 of the Sashiki gusuku are excavated a pile of celadon which are supposedly of the late 14th century, the same period as the Katsuren gusuku.

The above results and some other surveys of the Yamada and the Gushikawa gusukus have brought about the chronological table of 'gusuku', combined with the estimated dates of ceramics and historical documents.

Ⅰ　沖縄県立博物館保管資料

1　ジョージ・ケーアコレクション

県立博物館には、離島を含めた沖縄各地採集の輸入陶磁器が保管されている。中でもジョージ・ケア氏のコレクションは、主として米軍による占領時代に採集されたものであり、八重山を中心に、158カ所に及ぶ地点から収集されている資料群である。これらは、青磁、白磁、青花など多量の資料を有しながらリストを含めて未発表である。整理分類後の公開に期待されるものがあるが散見した資料によると14世紀以後15～16世紀の資料が多い。

2　勝連城の出土資料

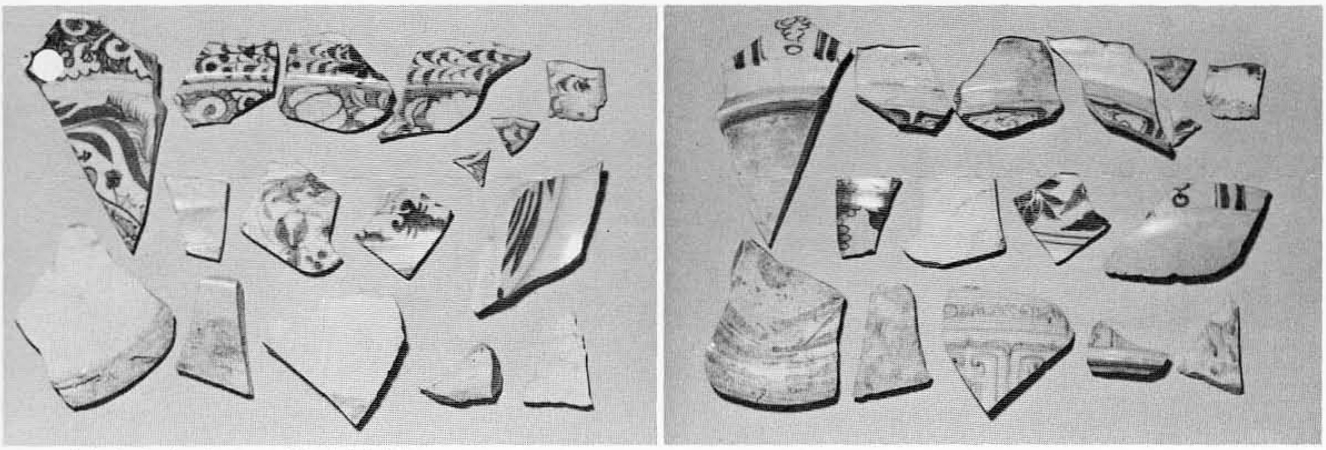
3次にわたって発掘調査された勝連城の資料は、若干の分散資料があるとはいえ、主要なものが県立博物館に保管されている。それらについては、発掘調査概報のほか元様式の染付についての論考が、三上次男氏(註1)、矢部良明氏(註2)らによって公表され、さらに展示会図録などに収録されていて広く知られている。

保管されている勝連城出土の一括資料には、陶磁器のほか骨製品、貝製品、石製品、ガラス製品、開元通宝・祥符元宝・大観通宝・景徳元宝・洪武通宝・宣徳通宝などの中国銭がある。圧倒的に多いのは、青磁碗を主体とする中国産の磁器片であり、器種別にみると、碗・皿・鉢・盤・香炉・壷などが認められるが、完形品に近い資料は碗の1点のみである。

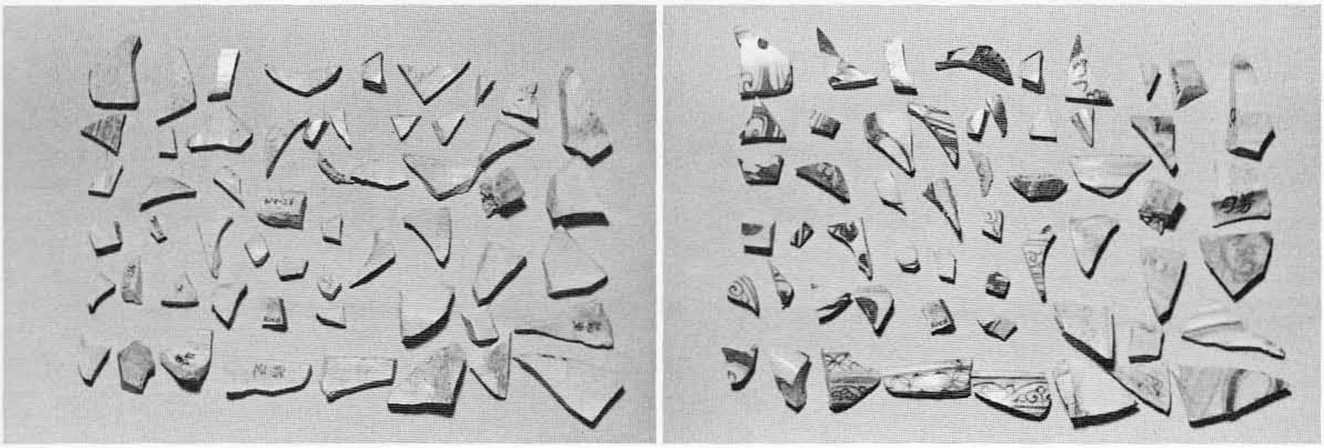
なおこれらの資料は、一括して保管されているが、出土地点、検出遺構などの記名がなされておらず、伴出資料を含めて遺構ごとの再検討が困難なことは惜しまれる。

碗は、黄緑色の釉調を呈するものが多いが、中に2次的な火を受けたことで、器面の色調に〝むら〟を示すものがある。碗は、形態・文様・施釉などの特徴から次の3類に大別することができる。

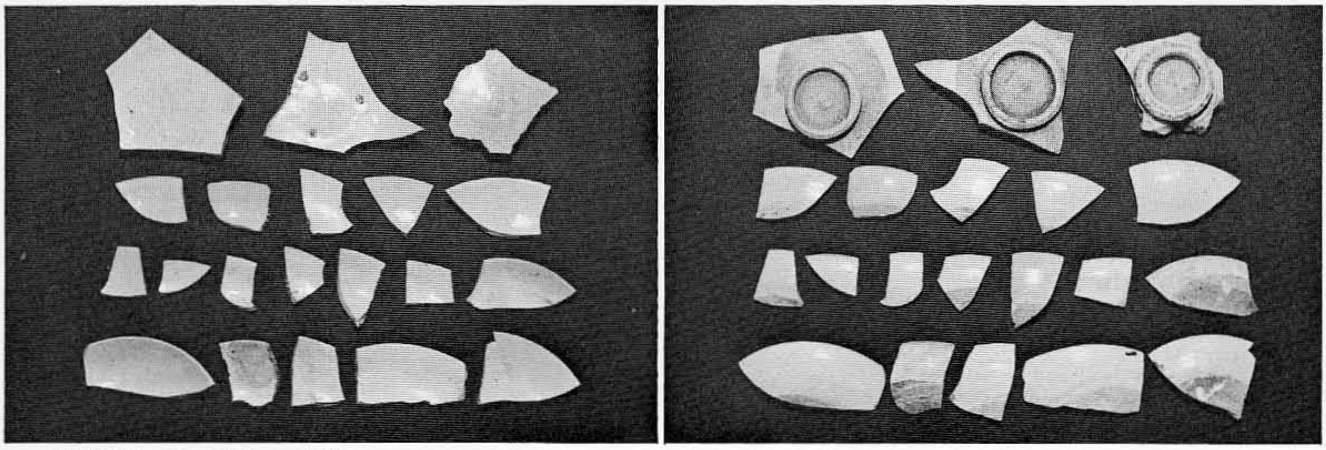
Ⅰ類は、体部にふくらみをもちながらたちあがり、口縁部に寄って端反り気味の口唇部を呈しつつ、端部を丸くおさめるもので、器の内外が無文のものⅠ－ａと、器の外面に無鎬蓮弁文を有するⅠ－ｂ、見込みに印花文をもつⅠ－ｃに細分することができる。共通して器壁は厚手造りのものが多く、外底面に露胎部を残すが、高台部の内外や畳付の施釉は体部と同様であって、蛇の目状に欠き落された露胎部の形状は、外底面中央寄りで乱れを呈するものが多く、この部分で赤橙色の色調を認めるものがある。なおⅠ－ａ、Ⅰ－ｂの高台は、外端部を削り出すことで丸味を持たせ、畳付の幅をせばめながらも施釉が丁寧であるのに対して、Ⅰ－ｃの中に



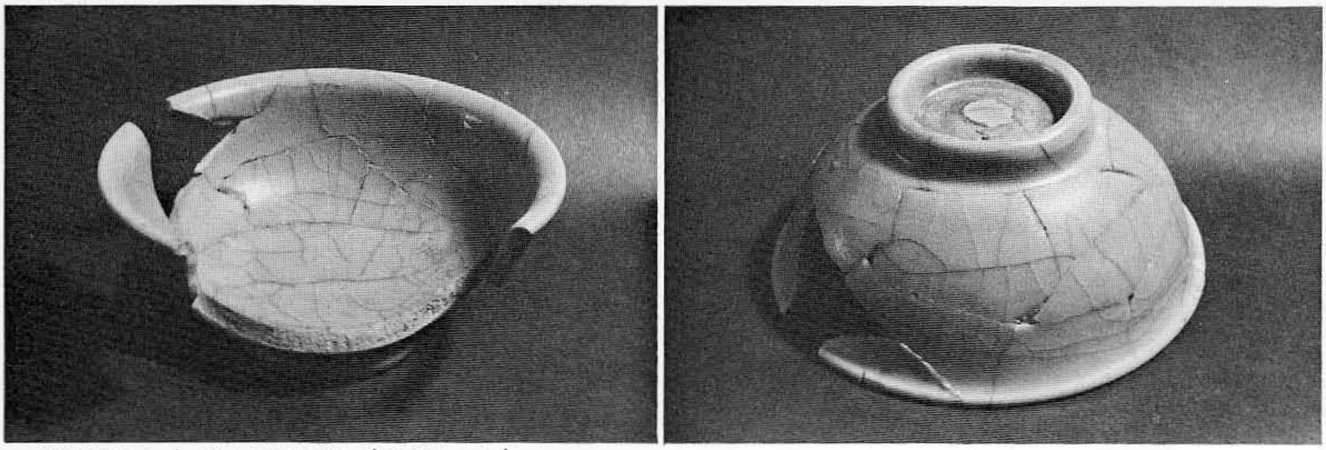
勝連城本丸出土元様式染付



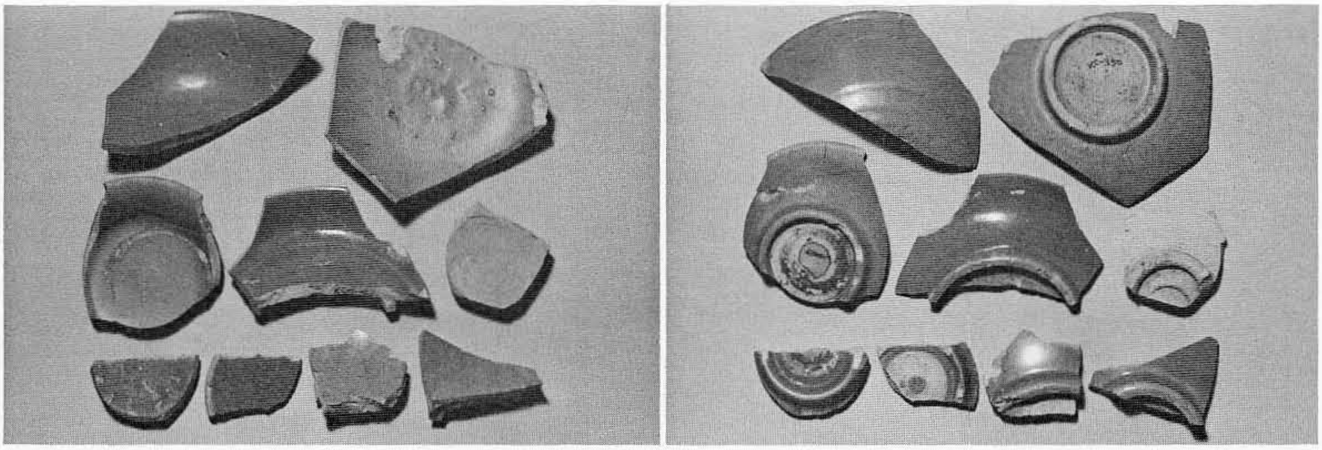
勝連城本丸出土元様式染付



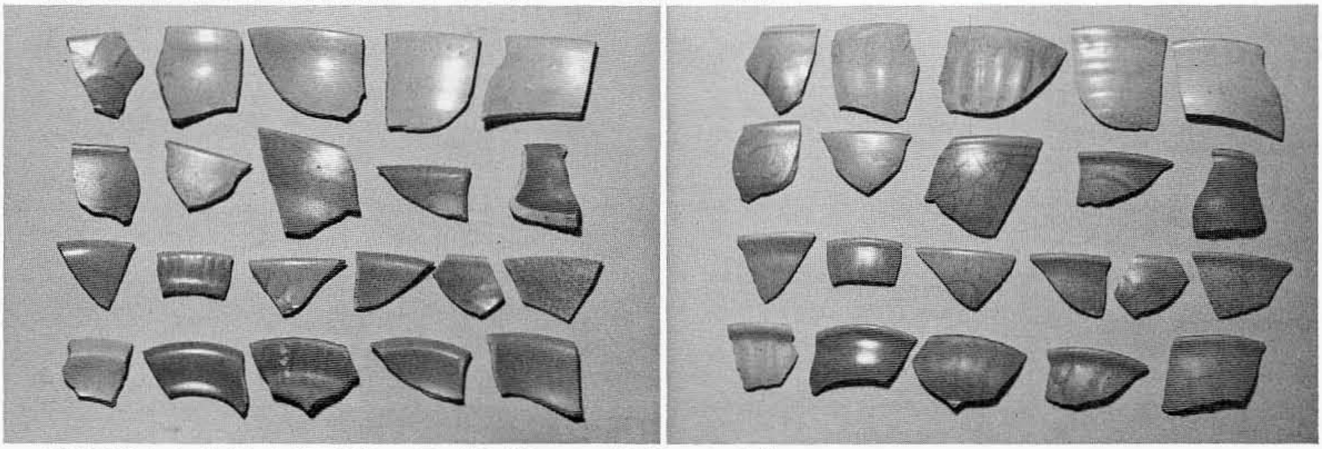
勝連城三の丸出土白磁



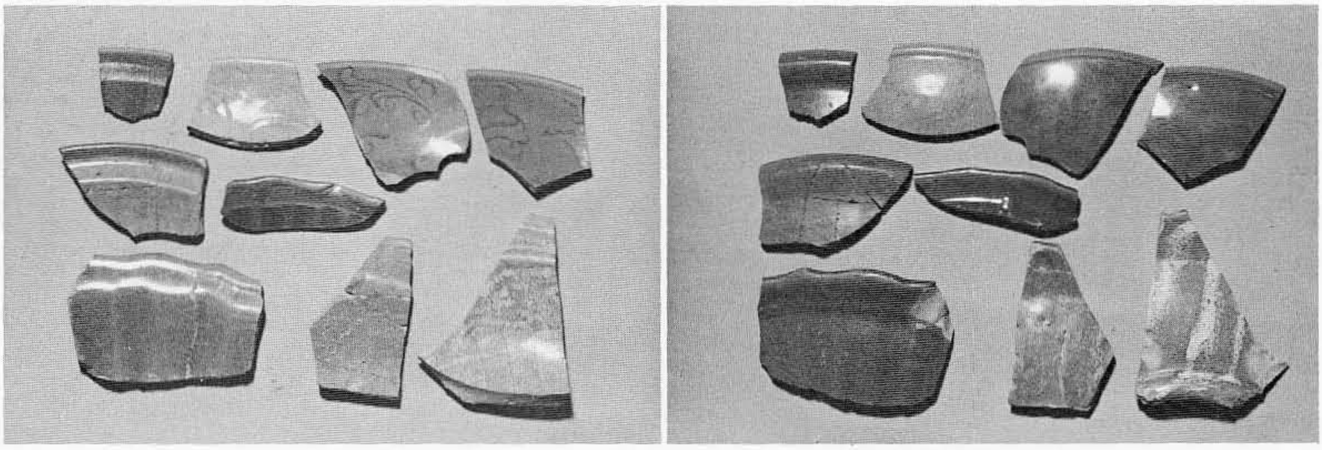
勝連城本丸出土青磁碗（Ｉ類―ｃ）



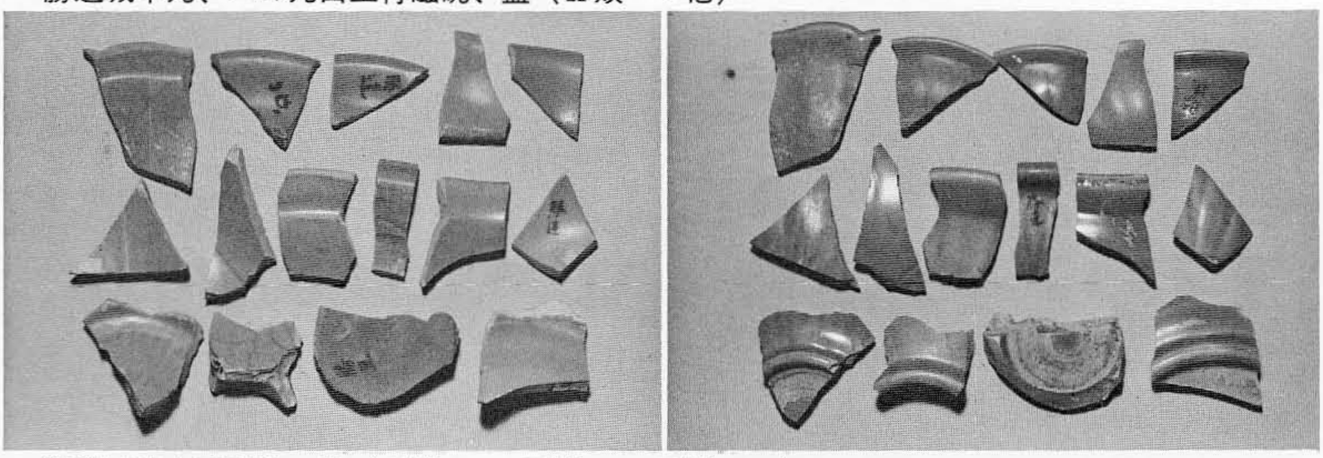
勝連城本丸他出土青磁碗、皿（Ｉ類－ａ、Ｉ類－ｃ他）



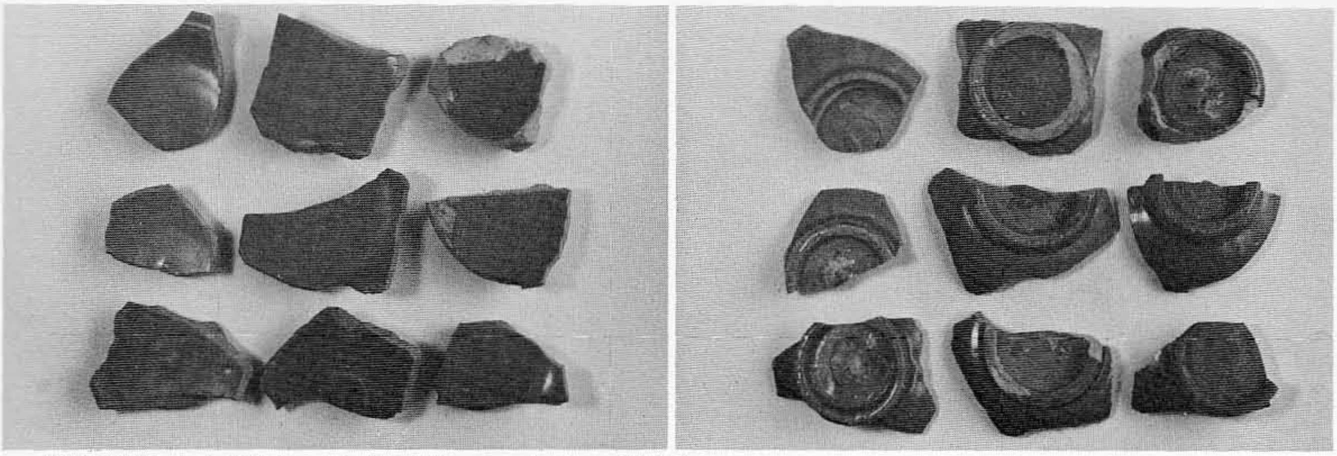
勝連城本丸他出土青磁碗、皿（Ｉ類－ａ、II類－ｂ他）



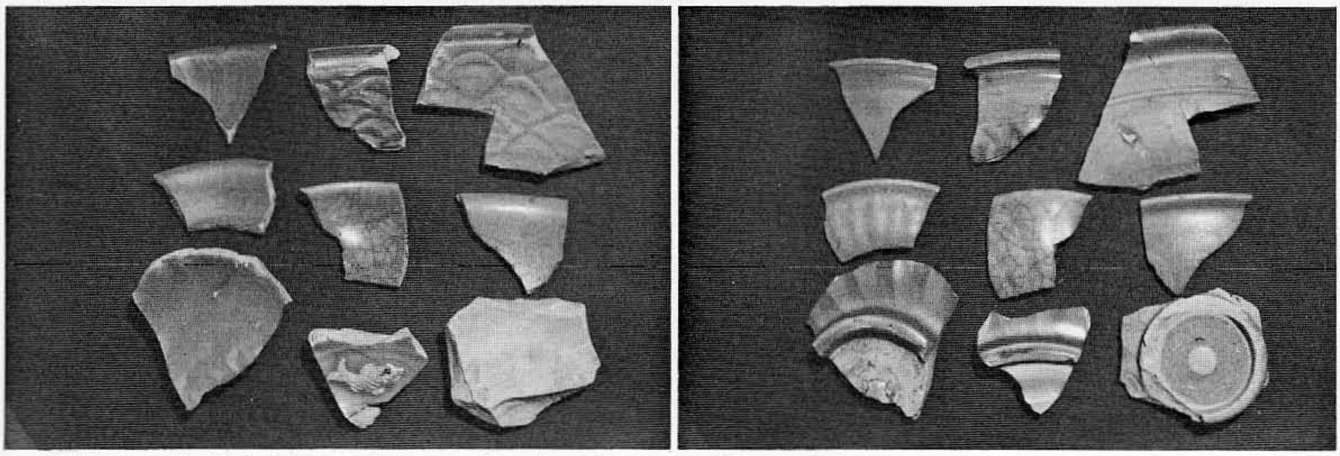
勝連城本丸、二の丸出土青磁碗、盤（II類－ｅ他）



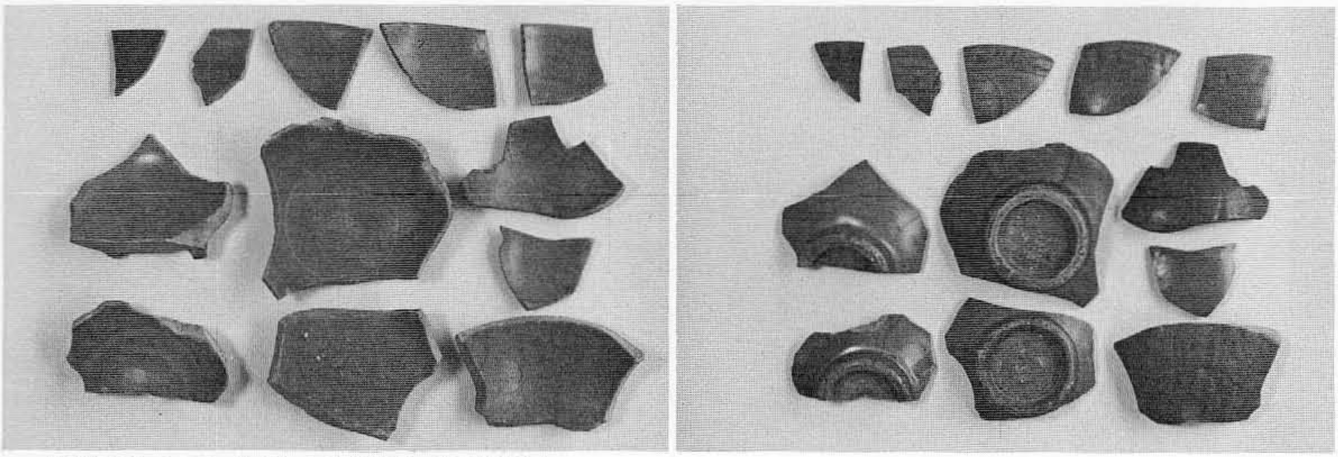
勝連城出土青磁碗、盤（Ｉ類－ｂ、II類－ｂ、II類－ｃ）



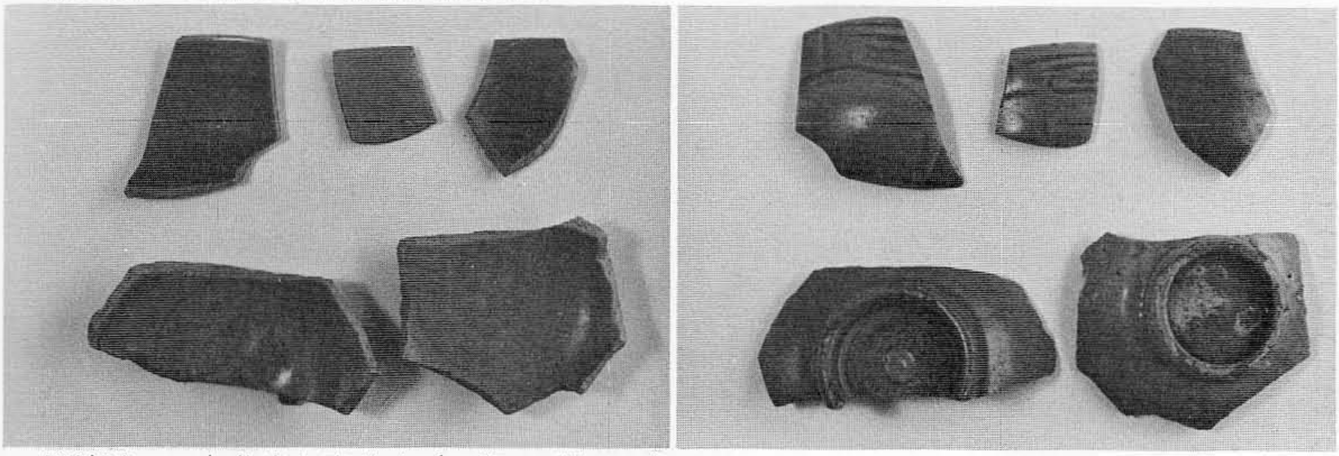
勝連城出土青磁碗、皿（Ⅰ類－ｂ、Ⅰ類－c′他）



勝連城本丸他出土青磁碗、皿、盤（Ⅰ類－ｂ、Ⅱ類－ｂ他）



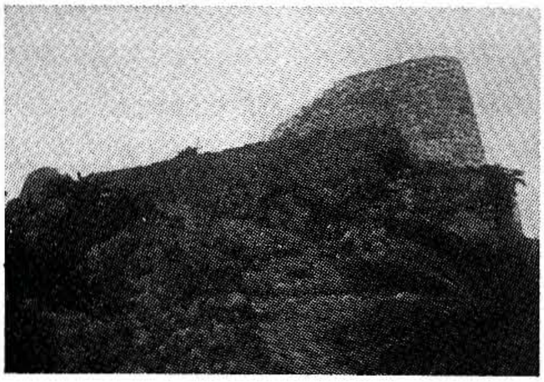
勝連城三の丸他出土青磁碗（Ⅲ類他）



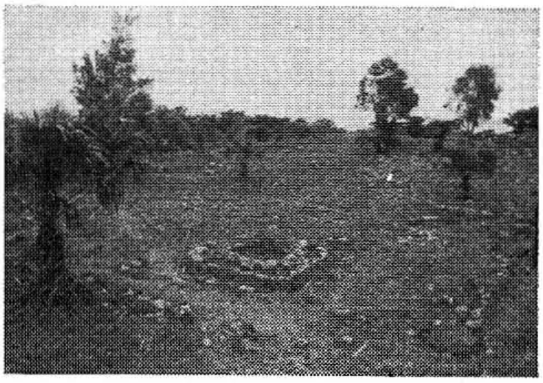
勝連城三の丸他出土青磁碗（Ⅲ類、Ⅰ類－ｃ）

は高台脇の施釉でとどめ畳付を含めて外底面のすべてを露胎とするものがある。又、印花文にもポジとネガの両者があるが、露胎部の変化とは対応しない。

Ⅱ類は、文様、釉調がⅠ類と共通しながら口縁部の形状に違いをみせる一群である。丸味をもって立ち上った体部と、そのまま内彎気味に口縁をおさめるもので、口唇部の外縁を若干のふくらみを持たせて外側につき出し、丸く整形する点で特徴的である。体部のゆるやかなカーブが口唇に寄って急に外側に丸く突き出す点で、玉縁に近い肥厚口縁を認める一群である。無文のものをⅡ－a、器の外面のみに無鎬蓮弁文をもつものをⅡ－b、内面に片切りの蓮弁文や草文を持ち、外面に幅広い無鎬蓮弁文を持つものをⅡ－c、内面に片切り草花文などを持ちながら外面を無文とするものをⅡ－eと細分することができる。



勝連城本丸



勝連城二の丸

Ⅲ類は、口縁部の外縁直下に一巡する雷文帯をもつ一群である。これらは、体部の外面に篦切りによる間の抜けた幅広い蓮弁を、雷文帯の直下に持つことが多いが、この蓮弁自体は、花弁の両側縁を篦切りによって描き出すのみで、尖端部を明瞭に残すものは少ない。一方、内面に草文を認める資料があるが、文様構成の全体をうかがうことのできるものはない。この内面施文は、外面の雷文帯自身の変化と対応することが考えられるが、その対応関係は、好資料の確認まで保留されるべきであろうから、Ⅲ類については、更に細分の可能性を認めつつ、現段階では雷文帯の一群という大枠で類別しておくにとどめる。なおこの一群の器形は、ふくらみを持った体部と、それにつづく内彎気味に直行する口縁部を持っていて、Ⅰ類及びⅡ類と違って、比較的に薄い器壁を形成している点で、大きな相異を認めることができる。

Ⅰ類、Ⅱ類に対応する盤や皿は、無鎬蓮弁文などから容易に確認されるが、Ⅲ類に対応する盤・皿の比定は困難である。これは雷文帯を持つ盤・皿の存在がみられないことによるが、将来の課題の一つになろう。なお、Ⅰ類、Ⅱ類の間では、その時期の近似性を示すのに対して、Ⅲ類の後続性は従来の組成による編年観によってもうなずけるものであろう。

白磁についてみると、青磁と比較して保管されている資料自体が極端に少いことがまず指摘される。碗、皿のみを認めたが、すべて白濁の釉が薄く施された一群である。碗については、

見込みにトチ目を残すものを含めて体部下半の露胎部は不整形で大きく、高台部に施釉されている例はない。高台は低く、内外の端部を粗く削り取ることで丸味を持たせる一群であり、高台脇のカンナがけも、放射状削り痕として明瞭に残されている。皿の中には、体部外面の露胎部が口縁近くまでみられるものがあり、つけがけによる施釉法をうかがわせている。これらの白磁は三の丸からの出土が多い。

染付については、器種の判定すら困難な小片が多いが、なかに獣耳壷、広口壷、鉢、盤などの器種を認めることができる。元様式の完形の作例を念頭にすれば、牡丹唐草文、蓮池文、魚藻文などの主文の一部を残す例や、ラマ式蓮弁文、蔓唐草文など、一見して元様式の典型的な文様パターンを認める一群があり、日本出土の中国陶磁片中の優品といえる。なお、一群の染付の胎土をみると、灰色の強いものがあり、コバルトの発色にも差を認めることができる。このことは、壷の底部にみられる面取りの差に対応することが考えられるが、多くの資料をまって検討する必要があろう。実見した一群の染付のほかにも出土資料が存在するとのことであり、将来の課題となる。いずれにしろ14世紀代の染付の一括資料としての資料価値は大きい。

勝連城出土資料のうち、陶磁器についての主要なものを以上のようにみると、14世紀代の一群と15世紀代に属する一群が存在することが認められる。青磁のⅢ類によって代表される一群が15世紀代の資料であるが、保管されている資料に関するかぎり、その量的な比率は少なく、この量的な傾向が、そのまま勝連城の盛衰を示すのであろうか。勝連城の址に立って、「おもろ」にみる按司阿麻和利への思い以上に、立地条件の良さに加えた中国貿易の拠点としての琉球のかつての繁栄や、14～15世紀にかけて存在した構築物の偉容を、本丸、二の丸に残されている遺構群から強烈な印象をもってうかがうことであった。1458年に亡んだという勝連城についての記録は、すでに触れた宣徳通宝などの中国銭を含めた年代観と合せて重視されてよいが、考古学的には、残されている未調査地点での発掘調査に期待するものが大きい。

3　御物城の出土資料

御物城は、もと海外貿易の物貨を収めた公倉で、尚金福時代の古地図に宝庫とあるものに相当するという。「李朝実録」に「江辺に城を築き、中に酒庫を置く、房内に大瓮を排列し、酒醪盈ち溢る、一二三年酒庫、其額を分書せり、又軍器庫を置き鉄甲槍剣弓矢、其中に充満せり」とあるのも、旧記に「御物城在那覇津中、昔有諸国船到来本国、又琉船亦到諸国、以便貿易、時創築北城、建公倉于其中、以貯貨物、而有御鎖側官、掌管其事.（中略）然而倉屋已廃、遺地猶存云々」とみえるのもこれだという。

県立博物館に保管されている御物城関係の出土資料は、中国産の陶磁器片に関するかぎり、量的には勝連城を上廻るものがある。青磁・白磁・黒釉・染付・褐釉陶などから成っている

が、器種については碗、皿、鉢、盤、香炉、壷などを認めるが、中でも碗、皿の占める割合は大きい。

青磁器についてみると、勝連城で試みた分類によるとⅠ－a、Ⅰ－b、Ⅰ－cともに存在しているが量的には少なく、Ⅱ類についてはⅡ－eを若干認めるのみである。Ⅰ類・Ⅱ類に比較して多量に出土しているのはⅢ類の雷文帯をもつ一群である。雷文帯を口縁直下の内外にもつものを、Ⅲ－a、外面にのみ雷文帯をもつものをⅢ－bとしても、雷文帯に加えて蓮弁文や牡丹文をもったり、もたなかったりする資料があるため、口縁に平行する上下2本の画線の中に整然とした雷文を連続させる一群、画線を含めて粗雑に雷文をくずしながら連続させる一群、画線をもたずに整然とした雷文をもつ一群、画線もなくくずれた雷文のみをもつ一群などに細分が可能であるが、それぞれについて完形品がないため、現段階では、先に示した大枠でとどめて置くのが妥当であろう。このⅢ類に加えて、箆描き蓮弁や線描き蓮弁によって代表される一群があり、Ⅳ類として分類することができる。御物城出土の碗類中で最も多量に出土しているのがこのⅣ類である。中国広東省恵陽窯産の青磁竹刀文碗を目安とする一群に相当する。これらの資料は、勝連城では1点の出土もなく、後で触れる染付の違いと共に御物城と勝連城の出土陶磁の差を端的に示しているものである。これはそのまま年代観に大きくかかわることになる。

Ⅳ類を施文法の違いによって生じる蓮弁細部の変化と、文様構成から分類すると、Ⅳ－aは、片切り彫りに近い箆切りによって施文され、蓮弁自体に高低差を生みだし、そのため表面を覆う釉調に濃淡がみられることで立体観を与えている一群である。蓮弁の尖端部が、山形にシャープに連続するものなど剣頭文をうかがわせるものすら確認されている。Ⅳ－bと分類されるものは、すべて線描きによる蓮弁文である。蓮弁自体は扁平で、中には弁の中央部や側辺部、更に尖端部に乱れを生じる程の粗雑な施文のみられるものも含まれている。

Ⅲ類、Ⅳ類に伴う青磁の皿は、段皿、稜花皿であり、段皿の中には、見込みに蛇の目状の露胎部を示すものや、高台脇に大きく釉切れを残すものがあるが、ともに体部から口縁にかけて大きく外反する端反りの形態をもつ点で特徴的である。

白磁には、碗、皿、鉢があるが、その中でも碗、皿の占める割合は大きい。ともに白濁の釉と黄味がかった軟質の胎土を認める点で共通しているが、光沢のある釉と、光沢のない釉の二種に分けることができる。高台脇に露胎部を残すのが通例であり、輪高台の端部を削り出すことで面取りのみられるものや、畳付を4カ所にわたって大きくえぐり出している資料も含まれている。なお小型の鉢も同様の高台をもっているが体部を八面取りに整形している資料が存在する。

黒釉には若干の天目碗がある。口縁部に寄って小さく外反する形態をもっているが、高台脇の水平位の削り出しや、高台外端部に面取り状に削り出す特徴を共有している。

染付の量は、青磁についで圧倒的に多い。器種は碗、皿によって占められて、玉取獅子、折枝花文、雲竜文、唐子などの主文に加えて蔓唐草、芭蕉文などを添えているものがある。15世紀から16世紀にわたる資料であり、形態上の特徴や文様構成によって細分の可能な一群である。

褐釉の資料は、壷、甕があるが、中にルソン壷の耳を残す資料が含まれている。多くの破片の中には黒味の強い釉調や赤味の強いものがあり、沖縄で焼成された一群の存在も検討されてよい。甕の口縁部に一条の隆起突帯を持つ点で特徴的な形態を示す資料など課題を残す資料である。砂粒を多く含むものや胎土の密な資料など産地を異にすることが考えられる。

以上の資料によれば、御物城については、15〜16世紀にかけての時期を考えさせる資料が主体を占めていて、総体的に勝連城に後続する一群であることは否定されない。特徴的な資料は、線描き蓮弁文の青磁碗と染付の一群であり、記録にみえる年代観を出土資料によって保証することができよう。

Ⅱ　読谷村立歴史民俗資料館保管資料

座喜味城に隣接する資料館には、座喜味城、山田城などから出土した資料を保管している。すでに調査報告の刊行されている座喜味城の資料は、青磁についてはⅠ類を除いて、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ類の資料があり、染付も御物城出土資料に類するものがある。山田城の資料は青磁でⅡ類・Ⅲ類を認めるもののⅠ類とⅣ類の資料はなく、染付は１点もみない。これらのことは、記録にみえる山田城から座喜味城への変遷をそのまま示しているものといえよう。(註３、４)

Ⅲ　沖縄国際大学保管資料

高宮広衛氏らによって調査されたグスクのうち、具志川市の具志川城址出土資料は注目されてよい。青磁の碗、盤、緑釉の花盆、褐釉の甕などがあるが、青磁碗は特徴的な資料である。口縁直下に雷文帯を内面にのみめぐらし、外面には唐草を縁帯状に施しながら体部に箆描き蓮弁をもつ資料である。さきに示したⅢ類とⅣ類の特徴を同時にもつものであり、これに類する資料は従来知られていないだけに貴重な資料となっている。体部の蓮弁から施文法の先後関係を考える上でも好資料といえよう。

Ⅳ　県文化課分室保管資料

屋良城出土資料は、鎬蓮弁の青磁碗や、肥厚した玉縁の白磁碗の組成が特徴的である。中に１点の高麗青磁があり、輸入陶磁の総体は、勝連城に先行する一群である。13世紀代に属する

佐敷城出土青磁碗計測表

資料No.	記　名	口　径	器　高	底　径	釉　調	印花の有　無
1	5	15.0	6.5	6.6	暗灰緑色	
2	6	17.0	7.7	6.1	灰褐色	
3	7	18.0	7.8	6.8	灰緑色	有
4	8	17.4	7.3	6.2	灰緑色	
5	9	16.1	7.5	5.6	灰緑色	
6	10	17.4復元	7.5	6.6	灰茶褐色	有
7	11	16.0	7.5	5.9	灰緑色	
8	12	15.8	7.5	5.8	灰緑色	
9	13	17.9	8.0	6.4復元	灰緑色	
10	17	17.4	7.4	6.6復元	灰緑色	
11	19	17.6	7.6	6.7	暗灰緑色	有
12	59	17.8	7.7	6.6復元	緑褐色	
13	61	16.5	8.3	5.5	黄緑色	
14	B	18.4	7.8	6.3	緑灰色	有
15	II ½	16.0復元	8.0	6.0	灰緑色	有
16	J27I	16.6復元	7.0	5.8	淡灰緑色	有
全資料の平均値		16.9	7.6	6.2	単位はcm	
印花文を持つ資料の平均値		17.1	7.6	6.2		

ものを主体としている。

佐敷城出土資料は、青磁、白磁、染付、褐釉から成り、G28グリッドの一括資料は好資料である。ここから出土した青磁碗は、I類とII類でIII類、IV類はない。

G28グリッドの青磁碗のうち、完形品及び完形に近い資料についてみると、共通して指摘される形態上の特徴は、口縁部を小さい玉縁状に肥厚させ、腰の張った形態を示す点であり、内底面に印花文をもつものと無文のものがあるが、計数表に示すように碗としては、やや大振りの一群である。おな無文の一群と印花文の一群を比較してみても、口径、器高、底径を通じて大差のないことがうかがえる。14世紀の後半の一括資料としては、まれにみる好資料であり、遺構単位の整理に期待される。

なお、染付の中に玉取り獅子や折枝花文の皿が含まれていて、後続する月城宮との関係を無視できない。

久米島宇江城からは、青磁と褐釉の資料がもたらされている。青磁は、I類とII類であり、III類、IV類はない。褐釉の中には火ぶくれのみられる資料や内面に叩きの痕跡をとどめているものがある。産地についての検討も課題であろう。

久米島具志川城の資料は、青磁、染付、褐釉がみられる。青磁はII類、III類であり、I類、IV類はみられない。染付は小片の1点のみであるが、御物城などで普遍的にみられる資料であ

る。

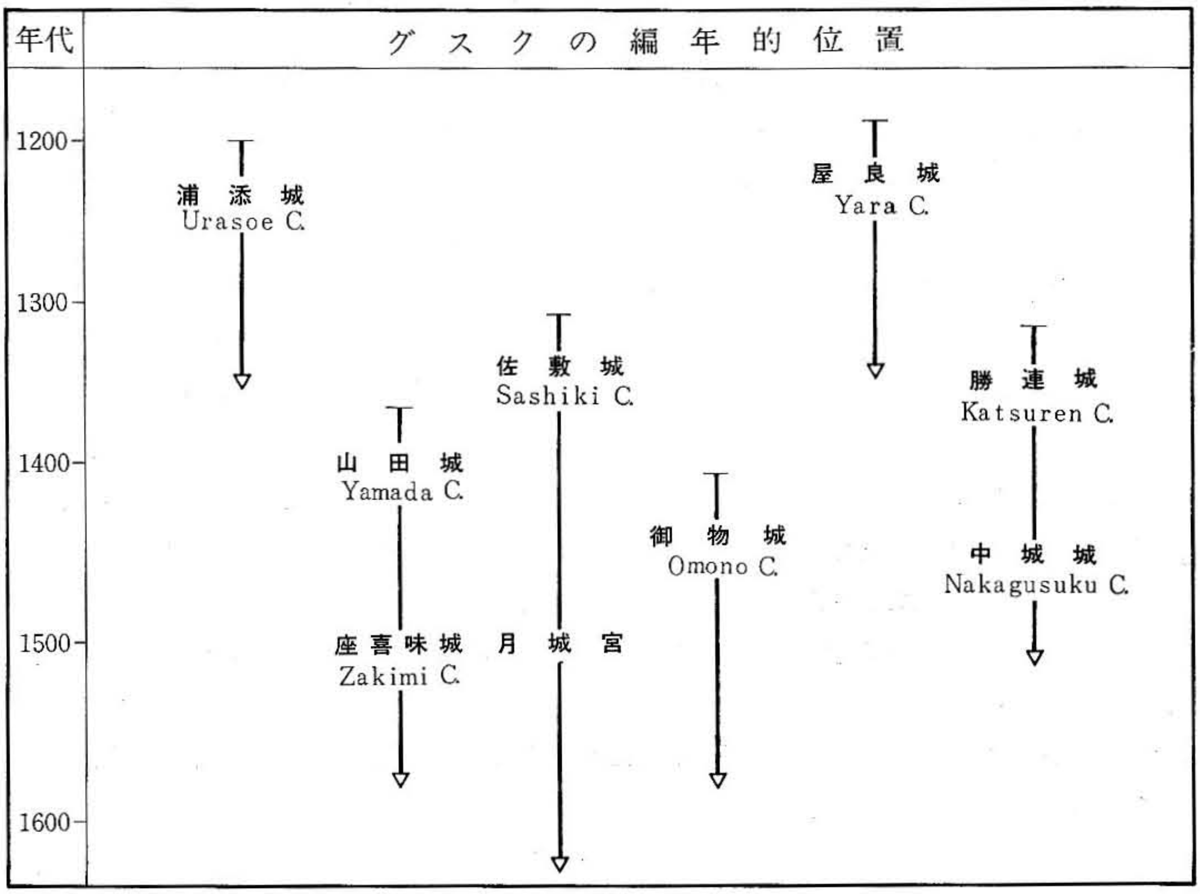
分室に保管されている資料は、近年の調査になるものが多く、好資料を多量に保管しているが、それらの報告がまたれるものである。

V　グスク資料による編年試案

もとより沖縄には多くのグスクがある。したがって数例の資料によって編年の組めるものでもない。文献によるグスクの変遷との対比も無視できないが、実見した資料によって若干の試みを持つこともあながち無意味なことでもなかろう。あえて編年を試みると、下記の表の通りとなる。

沖縄における主要グスクの編年試案

Model Table of Chronology of sevelal Gusuku (castle) in Okinama



C. =Castle

〔註〕

1．三上次男「沖縄勝連城出土の元染付とその歴史的性格」考古学雑誌 63―4　1978
2．矢部良明「日本出土の元様式青花磁器について」南島考古　4　1975
3．亀井明徳「山田城跡発見の中国陶磁について」座喜味城跡第3・4次遺構発掘調査 1978
4．亀井明徳「日本出土の明代青磁碗の変遷」鏡山猛先生古稀記念『古文化論攷』1980

熊本県城南町出土の青磁資料

亀　井　明　徳

Celadon Excavated from Jōnan-machi, Kumamoto Pref.

Meitoku Kamei (Kyushu Historical Museum)

The celadon pieces I cite here were excavated from under a five-storied pagoda with the carved letters '応永17年 (1410)'. They will, I maintain, make an important contribution to the chronological study of the celadon. the date early Ming dynasty has been ascribed to some Chinese ceramics, but it lacks precision.

A two-handled celadon vase with incised peony design (Fig. PL. 1) and three two-handled celadon vases with outcurving sides (Fig. PL. 2～4) are treated here. In 1966 they were excavated from under the five-storied pagoda during the construction in the south suburbs of Kumamoto city in Kyushu. As mentioned above, the date of '応永17年 (1410)' was carved on the remaining part of the pagoda. Accordingly it is clear that the celadon vase and plates belong to before 1410.

The vase 1. is light green-glazed except the foot rim. The foot rim is unglazed, red-brown. The mouth rim is missing, and the remaining part is 19.5cm. in height. On the body the peony and scroll design is carved, but it is now obscure. The lotus petals of the design has no ribs; the top of the petal is made round; an interval between petals is rather wide. Such characteristics of the petals are the merk-mal of the latter half of the 14th century. The ear, one missing, is fish-like and a ring is fixed to it.

Such is the case with the plates 2.3.4. The petalled mouth rim is unclear and three combed lines run around along the mouth rim. There are two significant features of glaze; one is the comparatively transparent glaze represented by the plate 2, the other is the dark olive glaze as shown in the plates 3. and 4. The outside of the foot rim is glazed, but the inside is unglazed, coarse and rough. Many plates of the same kind are found in Japan. Formerly they were ambiguously supposed to belong to the middle and the late Ming dynasty. It is now evident that most probably they were manufactured in the latter half of the 14th century, which is supported by the fact that these celadon vase and plates were already under the ground at the beginning of the 15th century. It is generally admitted, however, that the form of the plates was still maintained in the 15th century.

1　出土状況

ここに紹介する青磁４点は、偶然の機会に発見されたものであるが、応永17年（1410）の紀年銘を伴うものであり、この前後の時期の青磁の年代を決めるうえで重要な資料である。

出土の状況については、徳本明氏（城南町教育委員会）が実見している。同氏はこの地域の歴史に精通された研究者で、陶磁器についても詳しい方である。

出土地点――熊本県下益城郡城南町（しもますきぐんじようなんまち）大字坂野（さかの）（坂本区）山畑、竹田兼雄氏所有地

出土品目――①青磁陰刻牡丹文不遊環瓶　１点

②青磁稜花皿　５点（内２点は破棄）現存３点

以上計４点は城南町教育委員会保管

徳本氏による発見の状況は次のとおりである。昭和41年10月５日に、竹田兼雄氏所有の山林を蜜柑畑に造成するため、ブルドーザーにより整地工事中に、小丘の西側斜面の笹藪内から一基の五輪塔が出土し、その直下から青磁瓶１点および青磁皿５点の上記遺物が発見された。瓶は口縁部を欠損し、さらに環部１ケ所も欠損している。皿５点のうち２点が破損していたため、ブルドーザーの運転手が破棄してしまった。発見の報を受けて、徳本氏が、破棄されたこれらの破片を探策したが再び地下に埋没されて発見できなかった。五輪塔の台石を調査したところ、「応永十七年」の年号銘が刻まれていた。しかし、この台石を工事実施者である竹田氏に保管するよう依頼したが、竹田氏よりブルドーザーの運転手への連絡が遅れたため、再び土中に埋没され、現在その埋没個所は不詳である。

以上が発見の顚末である。城南町は熊本市から南へ約15キロ、緑川の南に位置する農村である。しかし阿高貝塚、御領貝塚、塚原遺跡、陳内廃寺、そして肥後益城国府など、縄文時代以来、肥国の中心地であり、これらの遺跡の詳細については、松本雅明氏らの手になり、市町村史の白眉とされ高い評価を得ている『城南町史』（昭和40年刊）でうかがえ、したがって、文化財の調査もよく行なわれている地域である。この青磁などの発見された坂本は、倭名抄の坂本郷の遺名と考えられ、鎌倉～室町期には隈牟田荘の領域である。この荘園は、鎌倉期、はじめ岳牟田荘とよばれていたようで、隣接の豊田荘とともに、後宇多院勧喜光院の領となっていた。勧喜光院は鳥羽上皇の女御の美福門院によって、永治元年（1141）に京都（左京区聖護院東）に建てられた寺である。そして鎌倉末・南北朝のはじめには隈牟田荘または隈荘と呼ばれるようになり、菊池氏が地頭職をもっていたと思われる。菊池武房は鎌倉後期にこの地に能仁寺を建立するが、この寺は肥後で最初の禅宗寺院で宋より渡来した宝山和尚を鼻祖としている。この頃より隈牟田荘に、手工業者を含めた中世町が形成されたとみられる。南北朝の争乱は、この荘内の土地もまた争奪のまとになり、大友、阿蘇、鹿子木などの勢力が入り乱れている。

さて、遺跡は坂本・平野部落にある標高80mの丘陵である。中世においてこの丘陵および周辺には、約30基の石塔（五輪塔、宝篋印塔、層塔、宝塔、板碑）が確認されている。そのなかで在銘品では、享禄２年（1529）、弘治３年（1557）、永禄６年（1563）刻銘の各板碑があり、五輪塔では在銘ではないが室町前期まで遡るものが坂本西山畑にあり、南へ２キロの下宮地には建武３年（1336）在銘品がある。青磁を塔基に納めた報告の五輪塔もこうした石塔と一群のものとして位置づけられ、室町期の五輪塔の性格からみて墓と推定される。

2　出土遺物

(1)　青磁陰刻牡丹文不遊環瓶　１口（Fig. PL. 1）

口縁部を欠損しているが現存高さ 19.5cm、底径8.3cmの瓶である。口縁部をやや開き、胴部を下脹れにしたいわゆる玉壷春形に双耳環をつけた形態である。頸部に一条の節帯をつけ、胴部下半部にも胴つなぎの節帯がある。この間に、片切彫りで牡丹唐草文をいっぱいに配し、蔓草は３本の櫛を単位とした櫛描文で刻んでいる。牡丹文の表現はやや粗く、その形状は判然としない。下半の節帯に接して斜めに篦刻線がみられる。腰の部分には蓮弁を配するが、各弁には鎬なく、側線は並行線に近く、弁先は丸味を帯び、かつ各弁の間隔が離れているところに特徴がある。耳の片側は完全に欠失しているが、他の側は残り、魚耳で、これに径5.3cmの環を付けている。

釉は明るい緑色を呈し、厚さは、１mmに近く、畳付付近を除いて外底部を含めた総釉である。胎土は灰色の磁胎で、露胎の畳付附近は赤茶色を呈し、この部分に淡褐色の粗土のクッツキがみられ、外底にも１個ついている。

この形態の瓶は元後半から明前半にかけて製作されたものである。出光美術館に蔵せられる飛青磁刻花牡文不遊環瓶をみると、頸部に芭蕉文、胴部に牡丹文を刻み、腰部にはいわゆるラマ式蓮弁文を配している。文様表現からみると 元後半、14世紀前半代とみられる。本品をこれに比較すると文様表現や同じく上下二条の節帯においても、するどさを欠き、元後半期まで遡り得ない。本品の年代を考える上で指標となるのは、その腰部に施された蓮弁文である。弁間を離し、各弁が丸味をもつ無鎬の形は、14世紀後半以降に増加してくるタイプで、その類例は碗、皿においてみられる。14世紀後半から15世紀前半と考えられている沖縄県勝連城の出土品（別稿一沖縄県の調査項参照）には、こうしたタイプの蓮弁がよくみられる。そうすると本品が一応1410年の下限をもつ遺跡出土品から考えて、これを14世紀後半を中心とした年代に位置づけることが可能となってくる。このような瓶は日本出土品として決して例が多いものではないが、今後の類例の年代決定の上で役立つとともに、その文様構成要素のひとつであるこうしたタイプの蓮弁文の時間的位置の１点を14世紀後半に置くことが許されるであろう。

(2) 青磁綾花皿　3枚（Fig. PL. 2～4）

現存する3点の皿は細部では若干ことなるが、形態や胎土など共通するところが多い。

②は、比較的良好な発色で、透明釉がやや厚くかけられ、青緑色を呈し、全面に貫入がみられる。内底中央部と高台の内側は露胎でこげ茶色を呈し、高台内は篦で粗く削っている。周縁を稜花様につくるが鈍く、これに沿って2～3本の沈線文をめぐらすが、連続刻線となっていない。内側面の2個所に篦描きの花文様を施すが、これも判然としない。しかし他の2点の皿と比較するとやや良いできと言えよう。

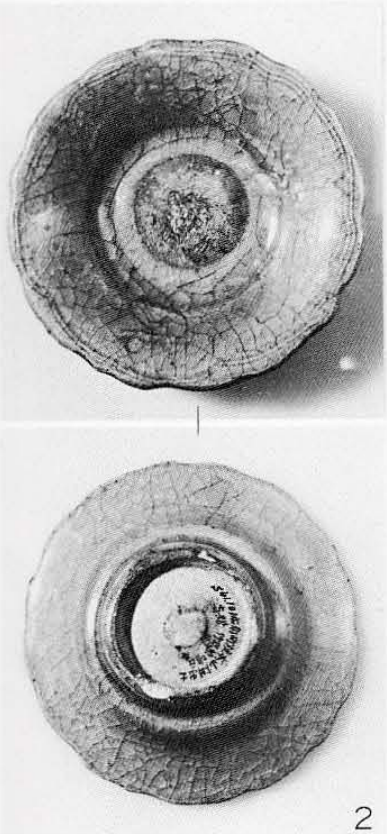
③も同形態で、腰部に屈曲をもって外反しながら口縁に至る。3点とも腰部の屈曲は丸味をもっており、明確な稜線ではない。釉はベージュを帯びたオリーブ色であるが、光沢はなく白濁の部分が口縁部付近にみられる。施釉は高台部外側までであるが、内側にも流れこんでいる。高台内は粗い削りで、胎土は褐色である。口縁部に②と同様に沈線がみられるが白濁色の部分は刻線がはっきりしない。

④も同形態で、これらの法量は、口径10.6～11.7cm、高さ2.6～3.0cm、底径4.7cmである。④では光沢のない暗いオリーブ色に発色し、しかも厚く施釉されているので口縁部付近の沈線は明らかでない。施釉方法も同じで、底部には砂が付着している。

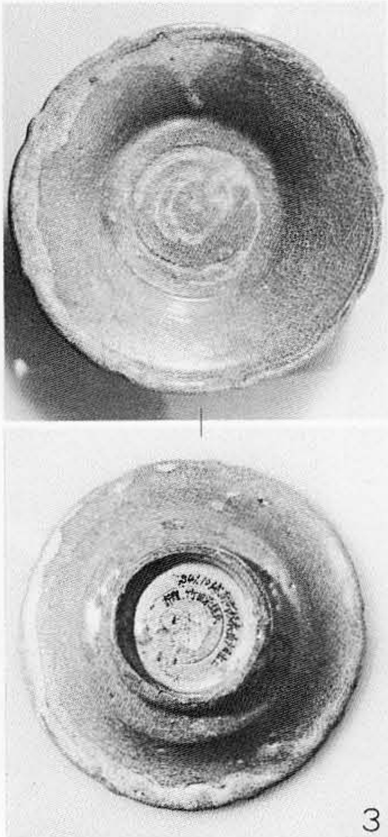
これらの青磁稜花皿について年代観は、漠然と15～16世紀と考えてきた。これに対して拙稿「日本出土の明代青磁碗の変遷」(『鏡山猛先生古稀記念、古文化論攷』1980）において、B－2タイプとした青磁細蓮弁文碗との共伴資料が多いところから、この稜花皿も15世紀後半～16世紀中葉と限定した。例えば、朝倉氏館跡第15次調査や新潟県華報寺経沢出土品などを共伴資料として掲げた。しかしこの見解は修正を必要とし、本例のように遅くとも15世紀の初頭には埋納されているからである。すなわち、あまり時期の限定できる青磁ではなく、15世紀初めから、16世紀中葉まで長期間にわたり製作、使用されたと考えた方がよいであろ。この長い期間に形状を変化させることがなかったのであろうか。この点は今後の資料の細部の検討にゆだねたいが、施釉方法において少なくとも2種類があることを指摘しておこう。本例の3点のように原則として高台内および畳付を削り露胎のままに残す方法と、北海道余市町大浜中遺跡からの出土品のように、高台内側まで施釉し、中央部を除いて一種の蛇目状に釉を掻き取る方法がある。施釉方法を除いて全体の形態や法量、さらに施文法など両者は同一系統とみられる。大浜中出土例のような施釉方法は14世紀中葉以前には見られない方法であり、明代になって行なわれる焼成方法の変化に対応するものと言える。それに対して本例のような施釉方法は元以前の古式のやり方であるが、それを15世紀までつづけているようであり、むしろ旧式な焼成を続けていた窯の存在を窺見することができよう。原則として青磁碗、皿の施釉方法は14世紀中葉を境にして変革をみるが、本例のような旧式の方法も並行して行なわれ、碗においてもこの手法をみることができる。



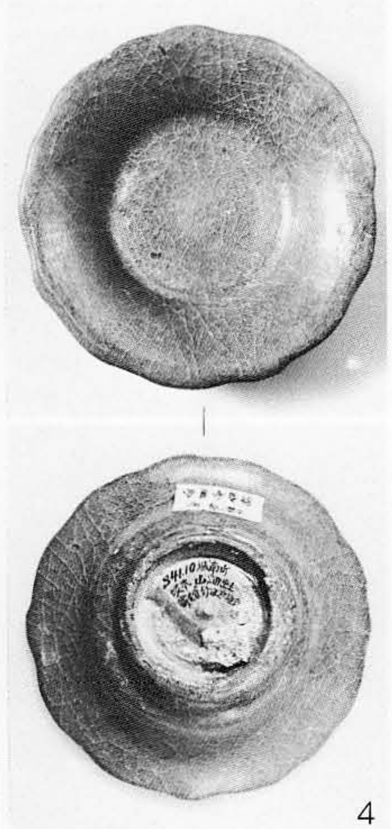
1



2



3



4



PL. 熊本県城南町　応永17年（1410）刻銘塔基出土の青磁

いづれにしても、この遺跡から出土した青磁稜花皿は従来の見解と異なり、遅くとも、15世紀初めには日本に輸入されていたと考えられ、おそらく14世紀後半までその製作年代を遡らせることができるであろう。

この遺跡は幸い1410年の紀年銘をもつことによって、埋納されていた青磁瓶と皿の年代決定に資するところが大きい。とくに沖縄以外では14～15世紀の貿易陶磁を出土する遺跡が少なく、年代を決める資料が不十分である。その意味でこの遺跡の出土品のもつ価値は非常に高いと言える。

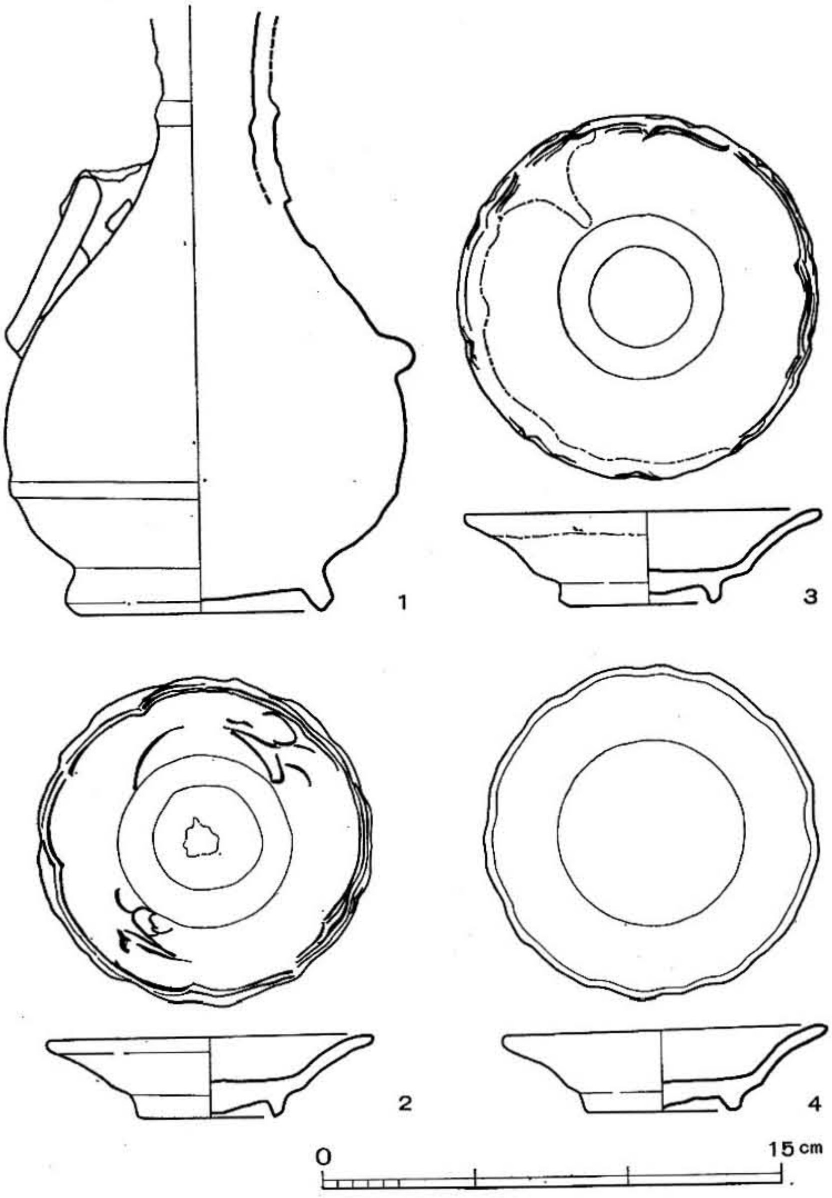


Fig. 熊本県城南町　応永17年（1410）刻銘塔基出土の青磁（森本朝子原図）

富田三太良遺跡出土の陶磁

村　上　　　勇

Ceramics Excavated from Toda Santara Site

Isamu Murakami (Shimane Prefectural Museum)

The report is made on the ceramics discovered in the Toda Santara site in 1912. Toda used to be the place where the great powerful clan of the San'in district built a castle during the Muromachi period.

Twenty-three dishes were discovered in a large jar covered with a Tenmoku bowl. These dishes must be of the same period by and large. The jar (PL. 1.) is the Bizen ware of the Chūgoku district (Japan) which was made during the Muromachi period. The Tenmoku bowl (PL. 2) is considered to be a Chinese product. All the dishes in the jar are Chinese products; one blue-and white dish decorated with a riband double vajra (PL. 3, 4), nine blue-and-white dishes with chrysanthemum design (PL. 5), three white porcelain dishes in the shape of chrysanthemum (PL. 6, 7) and ten white porcelain dishes (PL. 8, 9).

It is generally accepted that the blue-and-white of the Chia-ching (嘉靖) period is characterized by its design and this kind of blue-and-white are numerous in Japan. However, those ceramics are seldom discovered in such a complete set. In this respect the author's report is very important as well as one made on the ceramics excavated from the Aramaki-honmura site, Yamanashi Pref.

1　遺跡の概要

遺跡は島根県能義郡広瀬町大字富田字中村宅ノ後1553番地に所在する。遺跡名を付けているが25点の陶磁器が一括で発見されたもので、特別に遺構などは検出されていない。

富田（とだ）は月山富田城下一帯の大字名であり、中世後半期における山陰で最大の都市であった。尼子・毛利（吉川）堀尾などはいづれも月山富田城に本拠を置いて山陰を支配した。月山の山麓下に発生した富田の町が必然的に山陰を代表する都市として整備されていったことは想像に難くない。城や城下の主だった建物が、松江に移った慶長16年（1611）後も、第２の

都邑として繁栄していたが、寛文6年（1166）洪水によって埋まり地上から姿を消した。すなわち、今日富田川河床遺跡として発掘調査が行なわれ、多数の陶磁などの出土をみている。(註1)

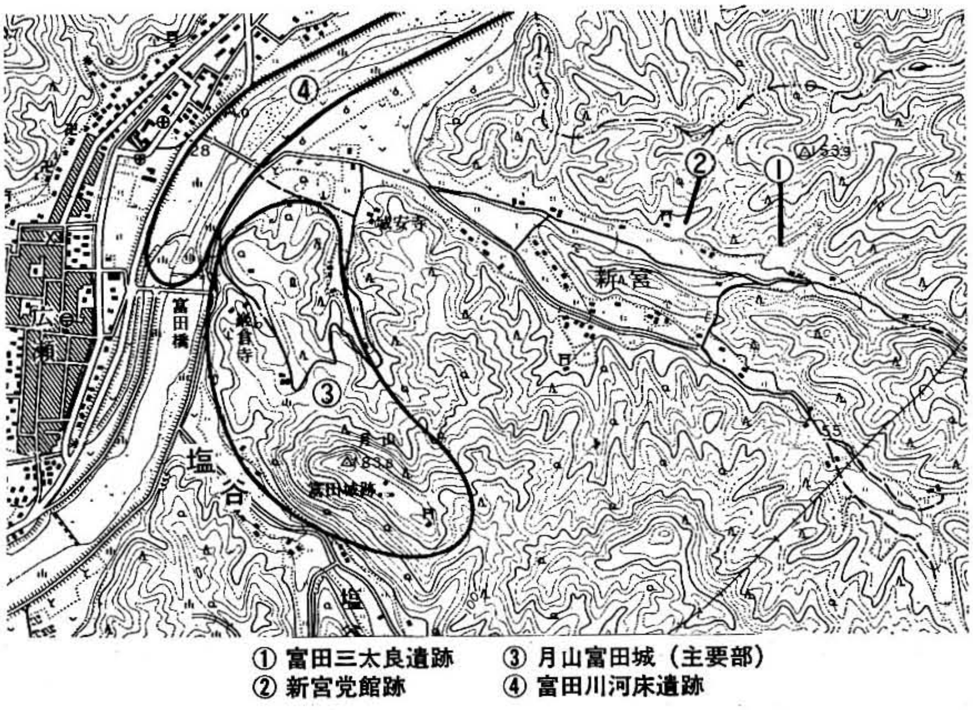
三太良（さんたら）は新宮谷と呼ばれる月山の北側の谷間をさかのぼった一地点の通称である。新宮谷と相対した南側の谷間は塩谷と呼ばれている。いずれにも館が構築された跡がうかがえるが、文献にも名を留め、よく知られているものに新宮党の館がある。天六6年（1537）尼子経久が晴久に家督を譲った際に、次男国久が居館を月山東麓の新宮谷に設け、3人の子息と居住した。世に新宮党といい、尼子の軍事の主力であったが、天文23年（1554）の11月に尼子の当主晴久自らの手によって一族は滅亡させられた。(註2)

三太良は新宮党の館跡から直線距離にして200ｍ谷の上にあたる場所である。低い丘陵が入り組んでいる一画を、大正元年（1912）に吉川寿次郎が開田のため掘削した。舌状小丘陵の南西斜面から壺とその上に蓋のように逆さに置れている茶碗を発見し、中を見ると皿23枚が納まっていた。最近まで、そのままの状態で保管されて注目されることもなかった様であり、発掘によるものではないが、一括で出土した25点の陶磁器と考えて差しつかえあるまい。

2　遺物の観察

出土した陶磁器は、細かな差異を問わなければ、形式上7種類に分類することが可能である。

A．備前焼双耳壺（図版1）1口



① 富田三太良遺跡　③ 月山富田城（主要部）
② 新宮党館跡　④ 富田川河床遺跡

輪耳水指と呼ばれることもある。肩部に左右対称に非実用的な輪を貼付けた壺である。高さ24.8cm、口径17.4cm、底径16.4cm、胴部最大径25.0cm、多くは井戸の側や台所において水甕の役割をしていたという。胎土は紫褐色を呈し、備前焼の製品が最も充実した戦国期の特徴をよく表わしている。内側の底と外面の一部に胡麻が被る。胴部に二条の沈線を入れてその間を突帯風に見せており、胴下半部に箆描きで「±／」の記号が見られる。

B．天目茶碗（図版２）１口

やや横にひろがる器形であるが、手取りは重量感がある。高さ6.3cm、口径12.1cm、高台径4.7cmを測る。口縁部はいったん直立ぎみになって外反する。口縁に茶色で腰部にかけて茶褐色と褐色の釉が流れて溜っている。高台近くは露胎で轆轤目がきわだっている。高台は削り出しで、高台内の削りは浅い。露胎の部分には鬼板が塗ってある。生産地は明確にし難い。

C．青花羯磨文小皿（図版３・４）１枚

高さ2.5cm、口径9.6cm、高台径4.2cmの小皿である。内面見込みに二重の円圏を設け、中に羯磨文を描き、外面には便化した牡丹唐草文が描かれている。釉はやや青味がかって厚い。高台脇は釉切れが著しく、縦の貫入も多い。文様は線に太さがあり、線の先は尖っている。

D．青花菊花文小皿（図版５）９枚

９枚共全く相似た碁笥底式の小皿である。内湾する体部の見込みに、箆描きによる沈線の円圏が施されている。文様は見込みの二重円圏内に菊花文が描かれる他、外面には口縁下にＹ字状の文様が回る。また底部を取りまいて便化した剣先文（芭蕉文）風なものが廻っている。釉は長石分が多く、厚く被かって貫入が多い。寸法はそれぞれ次の通りである。

高 3.0cm	口径 11.0cm	底径 3.7cm
高 2.8cm	口径 10.8cm	底径 3.6cm
高 3.0cm	口径 10.8cm	底径 3.4cm
高 3.0cm	口径 10.6cm	底径 3.7cm
高 2.9cm	口径 10.9cm	底径 3.7cm
高 3.1cm	口径 11.0cm	底径 3.5cm
高 3.0cm	口径 11.0cm	底径 3.3cm
高 3.2cm	口径 10.9cm	底径 3.5cm
高 2.8cm	口径 10.9cm	底径 3.7cm

E．白磁菊花形皿（図版６・７）３枚

３枚の皿は２種に小分類できる。

1．高さ3.6cm、口径12.5cm、高台径7.2cm及び高さ3.6cm、口径11.8cm、高台径6.1cmの２枚は轆轤挽きのあと型に入れて菊花形に整えたと考えられる。畳付に目砂の一部が附着し、高台内の二重円圏中に「大明年造」、「天下太平」の青花銘をもつ。

2．高さ3.0cm、口径10.5cm、高台径5.1cmのやや小形のもので、丸彫り風に削りとって花弁を表わし、菊花形にしている。内面は、口縁から見込みの境目まで箆を幅広く使い、外面は箆の先で幅の狭い縦の沈線を入れているので全体の調子はやや鋭い。釉は比較的厚目に被っている。

F．白磁皿（図版8）3枚

細かい貫入が内外面を覆い、全体に茶色味を帯びている。口縁は外反し、口唇下に稜がつく。比較的しっかりした高台の周辺は露胎であるが、釉が丁寧にかけてないため一部は高台内に入りこんでいる。磁胎は良好なものでなく、腰部や高台脇がよく削って調整してあるが、それでもやや手取りは重い。なお、3枚とも高台内に墨書銘があり、内2枚は、あるいは「木」と読んで差支えないかもしれない。また、見込みに二字分墨書らしい痕跡のあるものがあるが判読できない。

高さ 3.3cm　口径 11.6cm　高台径 5.0cm
高さ 3.1cm　口径 11.8cm　高台径 5.1cm
高さ 2.7cm　口径 11.5cm　高台径 5.0cm

G．白磁皿（図版9・10）7枚

Fの白磁皿と異なる7枚の皿は3種類に小分類される。1点は磁胎が良好で白色の釉が被り貫入がなく、口径に対し高台径が大きくなる。

1．7枚の内5枚が共通した特徴を有している。腰がやや張って端反りになり、畳付が尖って三角形を呈す大き目の高台をもつ。やや上りの悪いものがあり、高台のまわりで釉切れを生じたり、目砂が畳付に付着している。

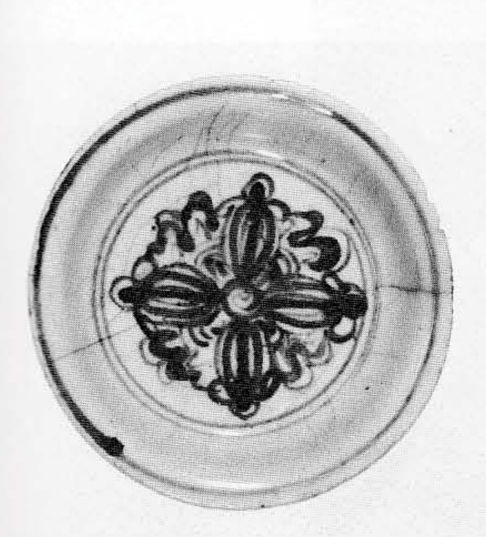
高さ 2.9cm　口径 12.1cm　高台径 6.2cm
高さ 3.2cm　口径 11.9cm　高台径 6.6cm
高さ 3.0cm　口径 12.0cm　高台径 6.4cm
高さ 3.0cm　口径 11.6cm　高台径 6.2cm
高さ 3.1cm　口径 11.5cm　高台径 6.3cm

2．1枚だけであるがG1の形式のものをそのまま大きくした、しかも上りの良好なものである。

高さ 3.5cm　口径 14.2cm　高台径 8.0cm

3．1枚だけG1・G2に比べ器形や施釉方法、高台の造りを異にするものがある。腰は張らずに口縁部は鍔状に近くなる位に外反する。高台は小さく、畳付きは平担で、高台内は釉が被らない。内面見込みの境目に段を一段もつ。

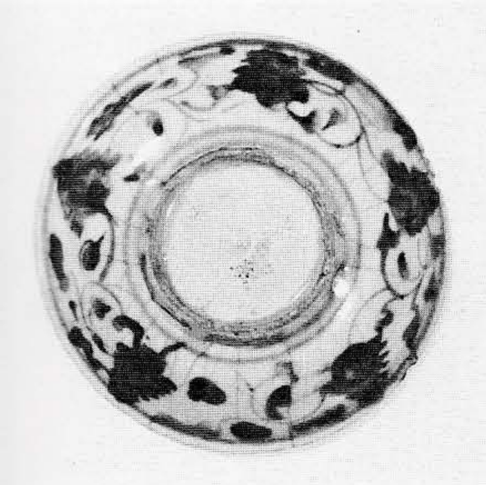
高さ 3.4cm　口径 11.7cm　高台径 4.7cm



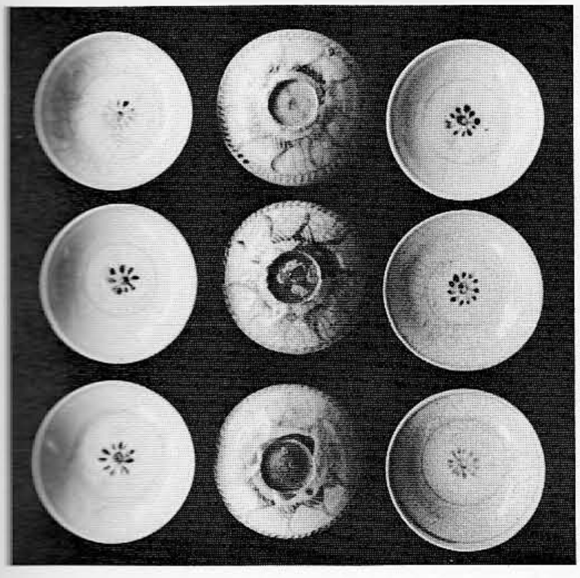
3.青花羯磨文小皿（C）



1.備前焼双耳壺（A）



4.同上・裏面

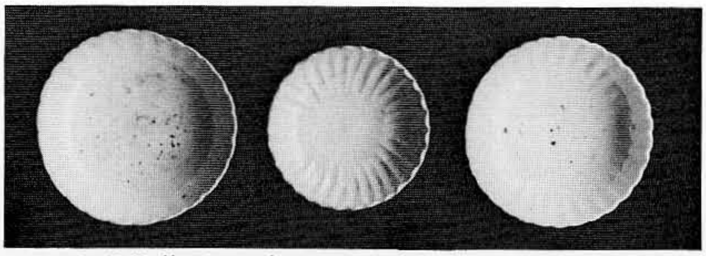


5.青花菊花文小皿（D）

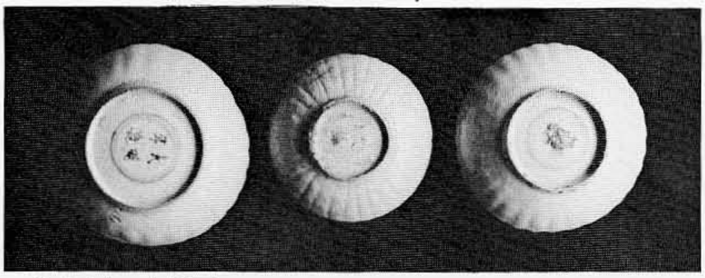


2.天目茶碗（B）

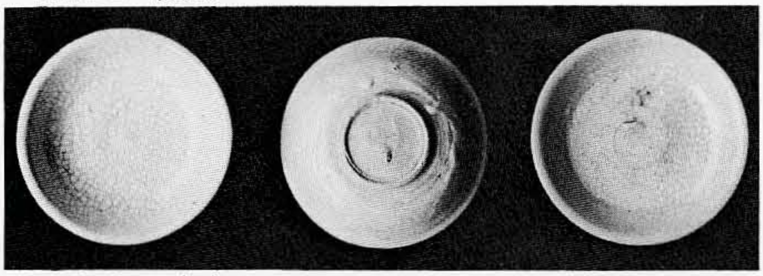
PL. 富田三太郎遺跡出土の陶磁



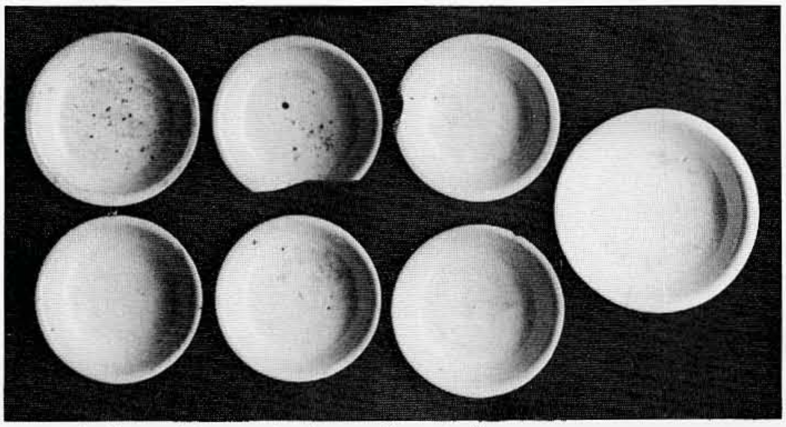
6.白磁菊花形皿（E1.E2.E1）



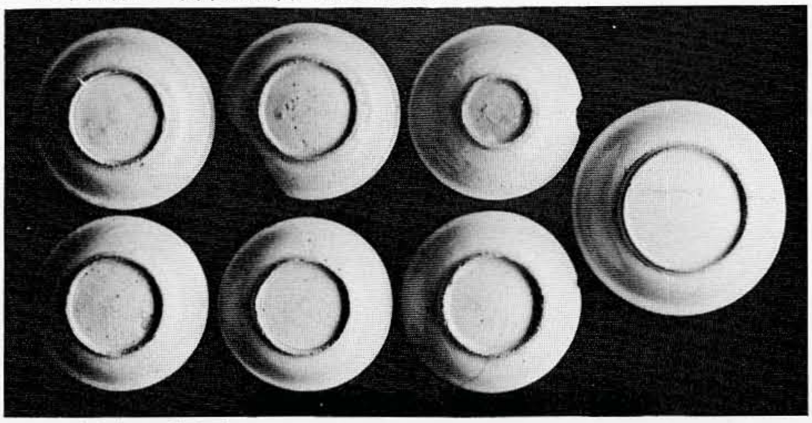
7.同上・裏面



8.白磁皿（F）



9.白磁皿（右G2.右上G3.他はG1）



10.同上・裏面

PL. 富田三太郎遺跡出土の陶磁

3．考　　察

三太良遺跡から一括出土した25点の陶磁は日本製である備前焼双耳壷と生産地不明の天目茶碗を除くとすべて中国製である。図版3・4の青花羯磨文小皿（C）の文様は骨太い線によって描かれ、線先が尖る点は元青花以来の伝統を引継ぐものである。(註3) また図5の青花菊花文小皿（D）のように、碁笥底のものは沢瀉様のものに鳥がとまったものや寿字文のものを始め、各種の文様をもって、時期的にも若干の幅があるようであるが、D類の小皿はC類と同じく文様の描き方に古様を残している。これらの青花皿は東南アジアからも多数出土することが知られており、(註4) 従来は明初から出現すると考えられていた。近年戦国期の城・館が調査され、これらの青花皿は16世紀を中心とした製品として位置づけられるようになった。(註5) しかしながら細線で輪郭を施した中を塗りつぶす嘉靖、万暦に特徴的な描法をとっておらず、16世紀の日本出土の中国製青花皿の中でも古式のものと解される。こうした点は同じく一括出土品である山梨県一宮町新巻本村の例でもうかがえる。

白磁皿の年代については困難な点が多いが、石川県小松市波佐谷の一括資料(註6)から見て、口径の大きい（G2）ものが早くから出現することは指摘できるかもしれない。G3類はほとんど類例を見ないが、G1類の通例のものは17世紀まで続いて使用されている。白磁菊花皿・E2類は類例に恵まれないが、E1類は各地で良く見かけるものである。中国製の白磁皿の底裏には、呉須で梅枝文などを配するのを古い例とし、後には「万福攸同」、「大明年造」、「長命富貴」、「天文年製」、「天下太平」などさまざまな銘が描かれるようになる。これらは多く嘉靖タイプ以後のものに見られるので、E1類の白磁皿は16世紀でもあまりさかのぼらせることはできない。白磁皿（F）については今のところ類例がなく、時代の判定も困難である。

天目茶碗（B）は口縁部が直立してあまり外反しない14世紀頃の形式のものと異なる点は明確であるが、産地の判別が困難な点と併せ、考古学的に細かい年代決定の論拠になるものを知らない。

また、これらの陶磁の性格については埋葬に伴なうものであるとする根拠もなく、積極的に証明するものはない。関連して調査した山陰両県の資料の一部を記すと、一括資料と考えられるものに

島根県八束郡東出雲町古城山出土

　日本陶磁・美濃天目茶碗5口

　中国陶磁・白磁皿20枚

鳥取県日野郡溝口町三部出土

日本陶磁・美濃灰釉皿
中国陶磁・青花沢瀉文小皿 } 計約10枚

などがある。

さらに、手懸りの一つとして見かけの上から7種類に分類した三太良遺跡の皿の組合せは検討に値するかもしれない。青花皿・C類は1枚で、青花皿・D類は9枚、白磁皿・F類は3枚である。さらに、詳しく観察すれば白磁皿E1類とE2類は分類できるが、視覚的に菊花形である点を重視すればE類として3枚と見ることが可能である。同じことはG類にも言えることで、G2類とG3類はそれぞれ1枚で、G1類は5枚であるが、白く丸い皿という意味の白磁皿と考えると7枚と数えることができる。すなわち、皿は視覚的な特徴により奇数枚数でそろえてあったと指摘することが可能である。いずれにしても、他の遺跡の例からしても、何枚かの組合せで出土することに、これらの陶磁が使用され埋置された意味があったとしたい。

4. まとめ

一括埋置されたこの時期の陶磁器の性格については、現時点で早急に言及することは難しく全国的な視野で再検討する必要があるのは言をまたない。その中で三太良出土陶磁の歴史的様相も明らかにできよう。

ここでは、三太良出土の一括陶磁が埋置されたのは備前焼が戦国期のものである点や青花皿が16世紀の中でも古様を示す点を考慮して、16世紀の中葉をさほど下らない時期であると推定するにとどめておきたい。

〔註〕

1. 広瀬町教育委員会・富田川河床遺跡調査団『富田川河床遺跡発掘調査報告』昭和52年（1977）
2. 前島己基「尼子氏・新宮党の居館跡」『日本城郭大系』第14巻月報、昭和55年（1980）新人物往来社
   米原正義『出雲尼子一族』昭和56年（1981）新人物往来社
3. 長谷部楽爾「日本出土の元・明の陶磁」『日本出土の中国陶磁』昭和53年（1978）東京国立博物館
4. 伊東忠太・鎌倉芳太郎『南海古陶磁』昭和12年（1937）宝雲舎
5. この問題を考古学的な研究の俎上にのせたのは小野正敏氏である。小野正敏「16世紀の染付の分類といくつかの問題」『シンポウム「15・16世紀を中心とした出土陶磁」発表要旨』昭和54年（1979）島根県立博物館
6. 長谷部楽爾「石川県小松市波佐谷出土の古陶磁」『ミューゼアム』255　昭和47年（1972）東京国立博物館

謝辞　三太良遺跡出土陶磁の理解には、間壁忠彦・矢部良明両先生のご教示を参考にしている。なお、林屋晴三先生のご指導を得て、遺物は島根県立博物館の蔵品として収蔵された。

大阪府における中国製陶磁器の出土状況

——高槻市出土資料を中心に——

橋　本　久　和

On Chinese Ceramics Excavated from Osaka Pref.

——Mainly about the pieces of Takatsuki city

Hisakazu Hashimoto (Takatsuki City Institute of Underground Cultural Properties)

Chinese ceramics are discovered in several tens of sites in Osaka Pref. They had not been paid attention to until Mr. Yōichi Nishiyama first discussed the celadon found from the Straits of Kitan. I intend to show the present state of the excavation in Osaka Pref., concentrating my interest on those in Takatsuki city (Osaka Pref.) where the medieval relics have been examined since before.

The Yüeh celadon are excavated from the Guuke-Kawanishi site in Takatsuki city and the Nagahara site in Osaka city, Though a few in number, they are the oldest among Chinese ceramics found in Osaka. Most of Chinese ceramics are excavated from the relics of after the 11th century. From the 11th century to the first half of the 12th century the white porcelain were the principal ceramics, and in the second half of the 12th century the Tungan type and the Lüngchuan type celadon were added. The trade of ceramics between Japan and China from the 11th to the 13th century has already been elucidated after careful examination of the excavation in Takatsuki city. On the other hand, from the 14th to the 16th century there are many respects to be solved. However, the materials of Sakai city, its suburbs and the outskirts of the Osaka Castle will be a key to the solution. They generally agree with the excavation of Dazaifu, Fukuoka Pref. or the conditions of the 15th-the 16th century made clear by Mr. Meitoku Kamei.

A good many Chinese ceramics were imported in the latter half of the 12th century when the Heishi clan was in power: at that time foreign trade was promoted, and the Inland Sea route was improved. Japanese medieval earthenware are also excavated from the sites in Osaka Pref. And it has been proved that they were brought from a long distance within the country. Perhaps domestic industries developed and commercial activities were extensively carried on in those days. In Yamazaki and Minase, the neibouring towns of Takatsuki city, there were several commercial groups engaging exclusively in

trade activities.

They allied themselves with the Heishi clan and the powerful temples, and traded in Chinese ceramics. From the ruins of commoners' residential areas were mostly found bowls and plates, from the ruins of the Heian Palace excellent pieces such as four-eared jars and ewers. Out of all the pieces from the former, Chinese ones amount to only 1 percent, while in the case of the latter maybe more. Thus, Chinese ceramics found in Japan may serve to study the difference between the rural and the urban districts like the Heian palace, or the disparity between the rich and the poor within a commoners' residential area.

1 はじめに

これまで、大阪府下の中国製陶磁器としては、豊能郡能勢町出野の若宮八幡宮経塚出土の青白磁合子・和泉市槇尾山経塚出土の青白磁合子が有名であった。また、友ケ島沖の紀淡海峡海底から採集される青磁類も古くから有名であったが、これに考古学研究者の立場から検討を加え、明代のものと考察した西山要一氏の業績は府下の中国製陶磁器を研究するうえで大きな画期となった。(註1) 西山氏の論考が発表された1975年頃には、府下の発掘調査件数は厖大なものとなっており、中国製陶磁器の出土量も増加の一途を辿っていた。しかし、現段階までに報告されているものはごく一部にしかすぎず、全体を把握するには困難な状況にある。府下の中国製陶磁器の出土地として、東京国立博物館編の『日本出土の中国陶磁』では30ケ所の地名があげられているが、西山氏によれば泉州地方の出土地だけで約20ケ所、以下記述する高槻市だけでも12ケ所があげられ、その出土地の多さには想像がつくであろう。本稿では、まず、筆者の勤務する高槻市での状況を記

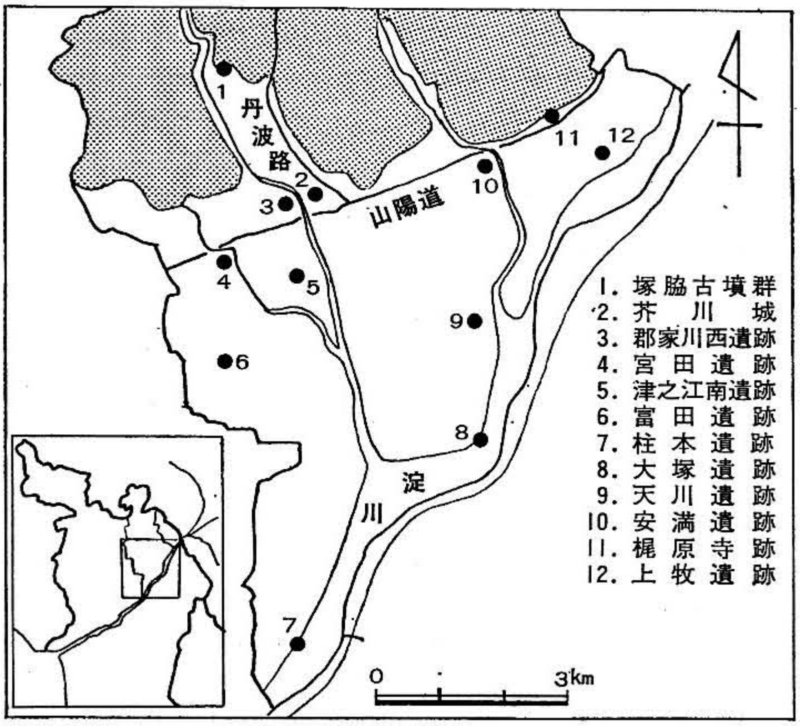


Fig. 1 高槻市の中国製陶磁器出土遺跡

し、次に府下の特徴的な状況とあわせて中国製陶磁器の研究状況を紹介する。

2　高槻市出土の中国製陶磁器

高槻市は大阪と京都のちょうど中間に位置し、市域の中央を東西に山陽道（西国街道）が通り、丹波方面へむかう丹波路（亀岡街道）が北部の山間をぬって延びている。市域の南を流れる淀川は古来、瀬戸内と京都・北陸を結ぶ重要な交通路であった。高槻市の少し上流で木津川・桂川・宇治川の三川が合流し、これより下流が淀川である。三川合流地点付近には後鳥羽上皇水無瀬離宮跡（三島郡島本町）、隣接して油座で有名な山崎（京都府乙訓郡大山崎町）、その対岸には石清水八幡宮（京都府八幡市）、さらに石清水八幡宮の鎮座する男山の西麓一帯は摂関家領楠葉牧跡（枚方市楠葉周辺）である。このような地理的環境は中世の高槻を政治・経済的に大きな流れに巻きこんだ。我々が、その流れを理解するためには、中世の遺跡から出土する諸資料を整理・分析するのが常套手段である。例えば、淀川の河港であった高槻市柱本・大塚遺跡、あるいは島本町広瀬南遺跡からは各時期・各地方のものを含む多量の土器類が発見される。淀川が

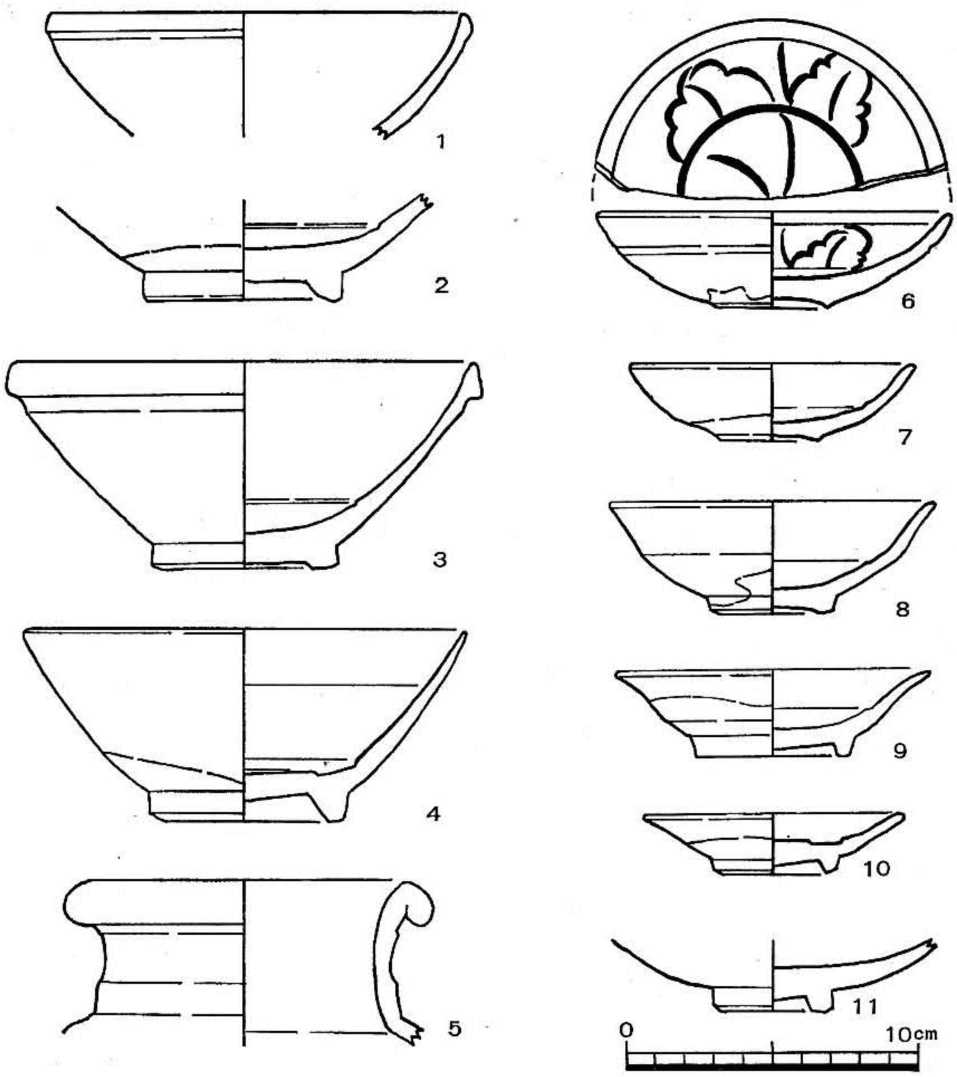


Fig. 2　高槻市出土の白磁類

重要な交通路であったことを示していると同時に、柱本や大塚・水無瀬が物資の集積地であり、京都や各地へ運ばれていったことが想像される。その物資のなかに中国製陶磁器が含まれていることは言うまでもないであろう。

これまでに、高槻市で中国製陶磁器が出土している遺跡は12を数える（Fig 1）。出土した資料の多くは小破片であり、時期を決定する資料も数少ないが、現在までの研究状況を紹介してみる。なお、記した遺跡は9ヶ所で、実測図・写真は代表的なものに限定した（Fig. 2・3、ＰＬ１・２）。中国製陶磁器の分類については、主として森田・横田氏の分類案によった。(註2)

柱本・大塚遺跡

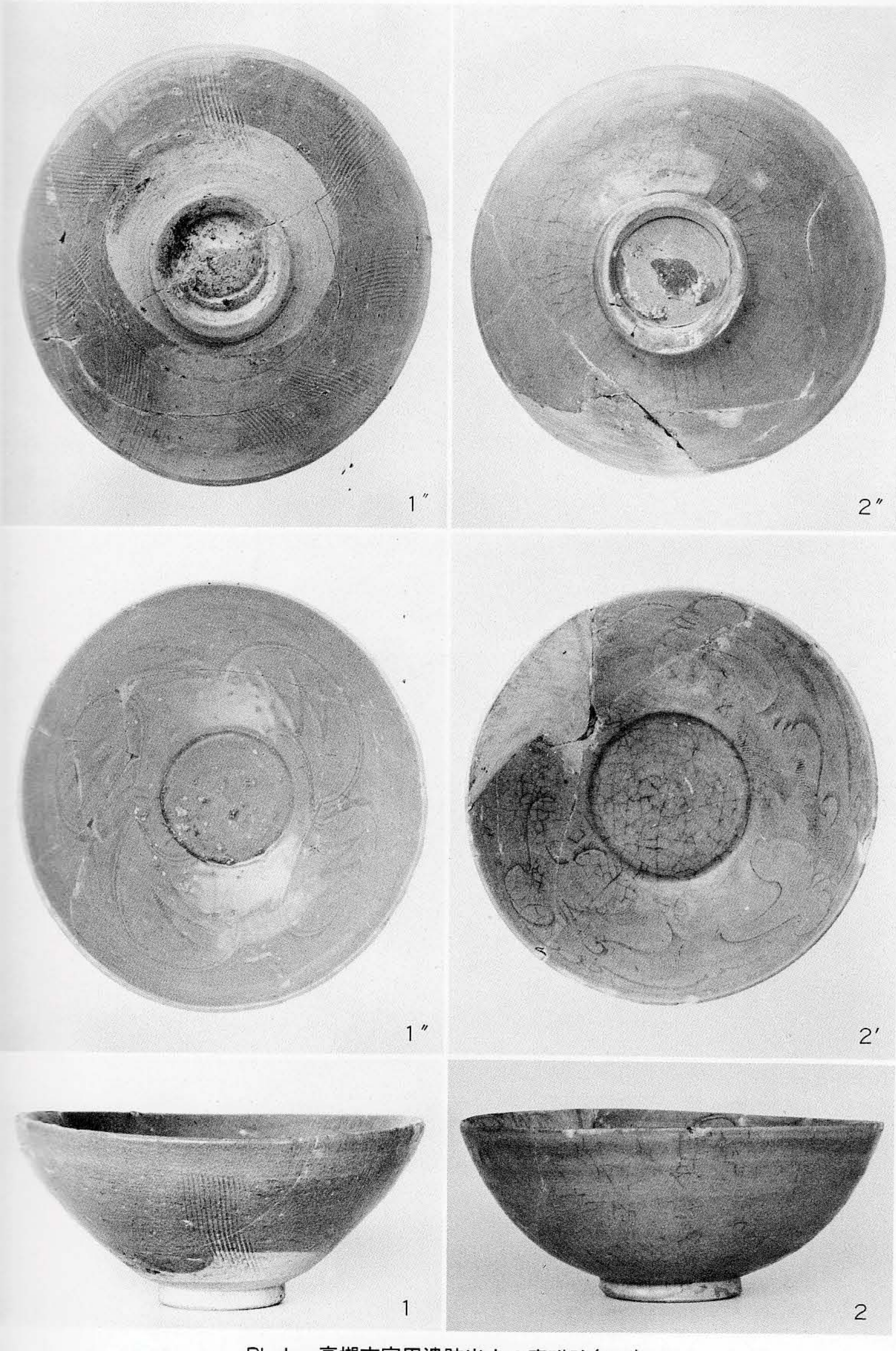
いずれも、淀川河床遺跡で浚渫工事にともなって各時期・各地方の遺物が採集されている。(註3)中国製陶磁器の量は少ないが、白磁では玉縁の小さな碗Ⅱ類・玉縁の大きな碗Ⅳ類、口縁がまっすぐ、または外方へ折り返し、高台が細く削り出された碗Ⅴ類がある。同安窯系青磁では内面を片切彫と櫛描の点綴文で、外面は縦方向の櫛描文を施す碗Ⅰ・Ⅲ類がある。龍泉窯系青磁では外面に鎬蓮弁文を施す碗Ⅰ－5類（14）、間隔があき鎬のない蓮弁文を施すもの（新安136タイプ）、雷文帯蓮弁文碗（亀井氏が14〜16世紀の青磁碗のうちＡタイプとするもの）(註4)、雑釉の内外面無文碗（17）などが出土している。おおむね11世紀から16世紀頃までのものが採集されているが柱本遺跡で白磁四耳壷（5）が、島本町広瀬南遺跡で青磁瓶の破片が採集されている他は、淀川河床遺跡では碗が目につき、小形の皿類は目につきにくい。

上牧遺跡

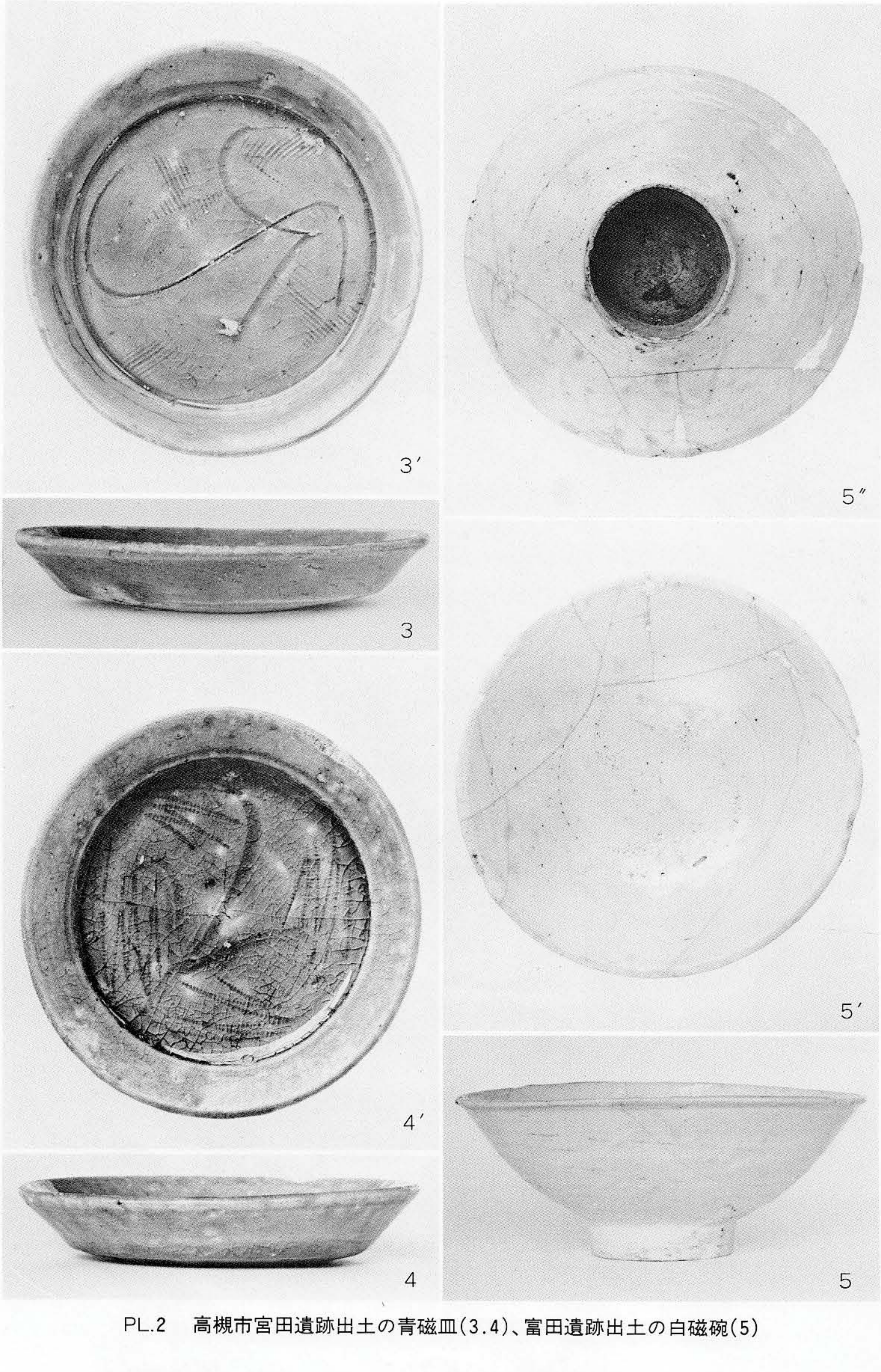
摂関家領楠葉牧跡の対岸に位置し、この遺跡も摂関家の縁者が11世紀中頃に開発したものとみられる。(註5)中国製陶磁器はすべて白磁の碗・皿類である。遺物全体の1.4％を占めている。碗ではⅡ類・Ⅳ類・Ⅴ類・Ⅷ類が、皿ではⅥ類が主である。碗で他の遺物類、とくに瓦器椀(註6)との共伴関係が比較的明らかなものをみると、Ａ区包含層ではⅠ－3期からⅡ－3期までの瓦器椀を含むが、Ⅱ類が3点、Ⅳ・Ⅴ類が各5点、Ⅷ類が1点である。井戸2下層ではⅡ－1期の瓦器椀であるが、Ⅱ類が1点、Ⅳ類が11点、Ⅴ類が5点、Ⅷ類が3点である（中国製陶磁器数は破片数である。以下の記述は同様である）。

安満遺跡

弥生時代遺跡として有名な安満遺跡の東部には奈良時代以降の集落が拡がっている。(註7)これまでの調査で、中国製陶磁器は中世の遺物全体の1.45％を占めている。やはり、碗・皿類に限られる。白磁碗ではⅡ類・Ⅳ類・Ⅴ類・Ⅷ類が、白磁皿では内面に花弁を描いたⅦ類（6）やⅧ類がある。青磁では龍泉窯系の内外面無文で見込みに金玉満堂の印のある碗Ⅰ－1類（13）や



PL.1　高槻市宮田遺跡出土の青磁碗(1.2)



PL.2　高槻市宮田遺跡出土の青磁皿(3.4)、富田遺跡出土の白磁碗(5)

外面無文で内面に飛雲文を片切彫りした碗Ⅰ－４類がある。この他に、口縁が外反する内外面無文碗で、釉の発色が悪く、気泡の目立つものもある（15)。

瓦器椀との共伴関係を知るうえで良好なものとして、79年度の19地区で検出した溝内からⅠ－２期の瓦器椀と白磁碗Ⅱ類４点、Ⅳ類２点、Ⅴ類が３点出土している。

富田遺跡

明徳元年（1390）創建の普門寺下層から検出された中世集落(註８)から内面に櫛描の花文のある白磁碗Ⅴ－４－ｂ類の完形品（PL. ２－５）が出土している。土坑墓から出土したが、共伴資料は無い。この遺跡からは他に、碗Ⅳ類や口禿げの白磁皿（Ⅸ－１類）の破片が出土している。

郡家川西遺跡

山陽道に面し、嶋上郡衙を含む遺跡である(註９)。郡衙廃滅後は、郡衙東北部に中世の集落が営まれるようになる。出土した中国製陶磁器は小破片ばかりであるが、白磁では碗Ⅳ類・Ⅴ類・Ⅷ類・皿Ⅲ類（10)、Ⅵ類（７）が、青磁では越州窯系青磁碗（12)、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類・杯Ⅲ類、香炉が、同安窯系青磁碗Ⅰ類などがある。さらに、時期の降る資料として、阿久刀神社西側の溝内から備前焼Ⅳ期（ｂが主）の鉢と共伴して外面無文で内底面に草花文の印を押した青磁碗と青磁皿（16･18）が出土している。また、雷文帯蓮弁文青磁碗も出土している。

この遺跡では、中国製陶磁器の多くは整地層から出土したもので、共伴関係などを知る良好な資料は少ないが、各時期・多彩なものがある。

宮田遺跡

遺構・遺物とも、淀川北岸の中世集落跡として、もっともまとまった遺跡である(註10)。出土した中国製陶磁器のうち、瓦器椀と共伴関係が明らかなものは神社南地区、建物群北溝、土坑墓出土資料があげられる。

神社南地区ではⅠ－２期の瓦器椀と白磁が40点余り出土している。碗ではⅡ類が16点、Ⅳ類（３）が12点、Ⅴ類が１点である。建物群北溝ではⅠ－２期からⅡ－３期までの瓦器椀が出土しており、時間幅があるがⅡ－２期を中心とする。119点の白磁・青磁が出土しているが、白磁が104点（86.6%)、青磁が13点（10.8%)、青白磁が２点（2.6%）である。白磁碗をみると、Ⅱ類７点、Ⅳ類34点、Ⅴ類17点、Ⅷ類９点で、神社南地区とくらべⅣ・Ⅴ類が増加している。皿ではⅡ類（８)、Ⅲ類（９)、Ⅳ類がある。青磁では同安窯系の碗Ⅰ類が５点、皿Ⅰ類が２点、龍泉窯系の碗Ⅰ－４類が５点、Ⅰ－５類が１点である。青白磁はいずれも合子の蓋で蓋表に草花文・菊花散文が施されている。土坑墓とみられる遺構から龍泉窯系青磁碗と同安窯系青磁碗・皿が出土している。龍泉窯系青磁碗は京都府田辺町字三山木出土資料と類似し、外面

無文で内面に3個の花文を片切彫し、その周囲に細かい櫛描文を配している（PL. 1－2）。龍泉窯系青磁碗Ⅰ－3類に分類される。同安窯系青磁碗は内面に片切彫と櫛描文が施される碗Ⅰ－1－b類である。同安窯系青磁皿はⅠ－1－b類に分類され、内面に片切彫と櫛描文がやはり施されている（PL. 1－1、PL. 2－3、4）。これらに共伴する瓦器椀はⅡ－3期である。

この遺跡は、1971年以降調査が継続しているが、遺物全体に占める中国製陶磁器の量は神社南地区で1.3%、建物群北溝で0.9%、77年度調査の建物群では0.9%である。建物群北溝だけでみると、出土量が多く1.4%を占める地点の背後には大きな建物群が、出土量が少なく0.4%を占める地点の背後には小さな建物群が検出されている。

芥川城跡

正平年中（1346～49）に芥川氏が初めて城を築いたといわれ、文献の上では幾度となく争奪がくり返されたが、元亀元年（1570）以後には記録が無くなる。

発掘調査は充分実施されていないが、白磁碗Ⅳ類、龍泉窯系青磁碗Ⅰ－5類、杯Ⅲ類、無文の青磁碗、高台の抉りが無いが白釉の皿（11）などが出土する。また、小量ながら染付として口縁内側に四方襷文を描く碗と内面に玉取獅子を描く皿の破片が、さらに、線彫り蓮弁文を施した青磁碗の破片も出土している。遺物類には時間幅があるが、全体の2.5%が中国製陶磁器である。

塚脇12号墳

丹波山塊に連なる高槻市北部の帯仕山々麓に営まれた塚脇古墳群では、しばしば中世の遺物が出土する。(註11) そのうちの一基、12号墳から染付皿が出土している。内面に十字花文、外面に牡丹唐草文が描かれ、小野氏の分類では皿Ⅴに相当する。(註12) 帯仕山に隣接する三好山には、細川高国が永正年間（1504～1520）に築城した城山城跡がある。これは三好長慶が全盛期（天文22年から7年間）に根拠とした芥川城と考えられている。前述の芥川城跡と城山城との区別が文献ではつけにくいが、出土した染付皿や他の中世遺物も城山城と関連があるとみられ、遺物のうえから具体的に検討できるものと考えている。

3 ま と め

高槻市出土の中国製陶磁器の概要を記してきたが、以下、大阪府下や周辺部の出土状況にふれながら簡単にまとめてみよう。

さて、府下出土の中国製陶磁器のなかで、最も古い部類に属すものとして越州窯系青磁碗がある。これまでに、郡家川西遺跡と大阪市長原遺跡(註13)で合計数片が確認されているだけである。いずれも遺物包含層からの出土であり、時期の決定は困難である。各地で越州窯系青磁の出土例

が増加しているが府下では、まだ限られたものである。

中国製陶磁器が実際の発掘調査で検出されるのは11世紀代の遺構からである。この段階の中心は白磁碗Ⅱ類で、宮田遺跡神社南地区、安満遺跡の溝出土の資料があげられるが、他では良好な資料がない。次の段階は12

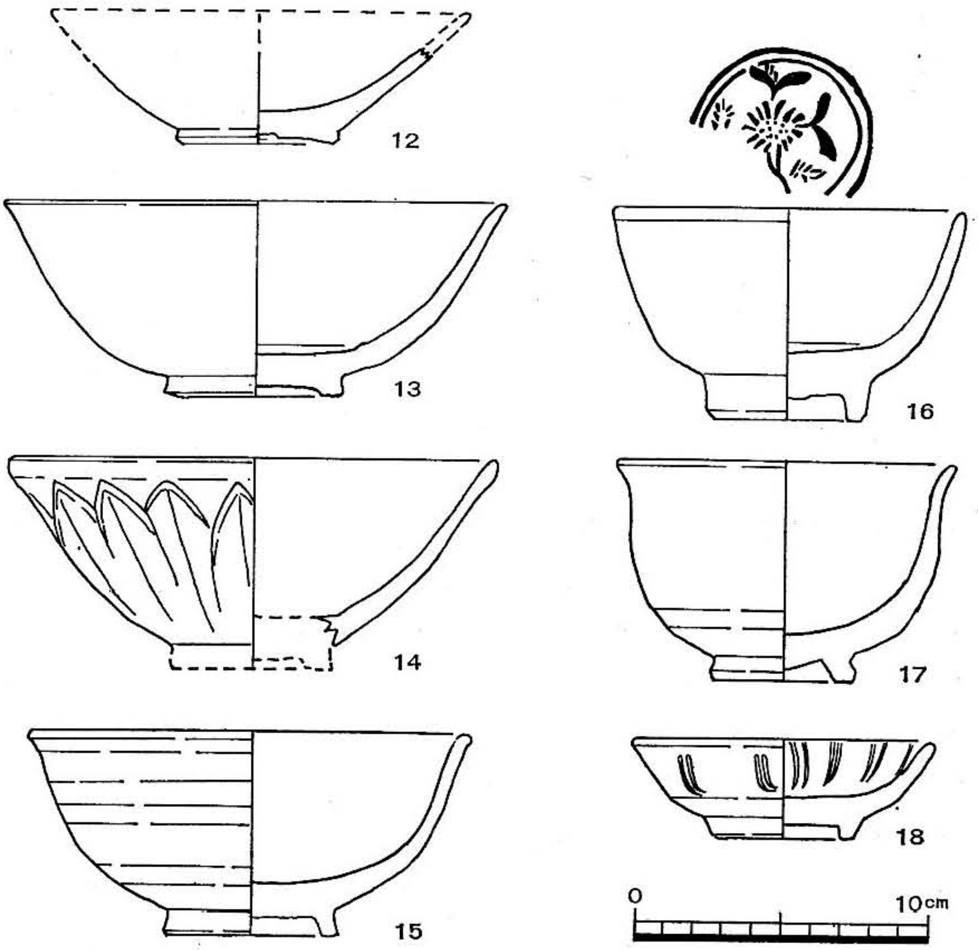


Fig 3　高槻市出土の青磁類

世紀前半で、白磁碗Ⅳ・Ⅴ類が中心となり、相対的に出土量が増加する。府下全体に出土するようになり、山間部の能勢町中筋遺跡などでも出土する。次の段階も依然、白磁碗Ⅳ・Ⅴ類が豊富に出土するが、白磁碗ではⅧ類が目立ち、同安窯系青磁・龍泉窯系青磁が出土するようになる。宮田遺跡建物群北溝の資料のなかで、菊花散文の青白磁合子蓋は能勢町出野若宮八幡宮経塚出土例と類似し、この経塚は1181年の紀年銘がある。このようなことから、この遺物群を12世紀後半のものと把えるが、龍泉窯系青磁は劃花文が大半で蓮弁文はわずか１点を数えるにすぎない。類似する遺構として、大阪市長原遺跡 ＳＤ210 がある。この遺構も瓦器椀・土師器皿はおおむね12世紀いっぱいの幅をもち、白磁碗Ⅳ類にまじって、12世紀中頃から後半のものとみられる白磁四耳壷、龍泉窯系劃花文青磁碗の破片が出土している。貝塚市橋本遺跡(註14)から出土した資料は同安窯系青磁皿と龍泉窯系劃花文青磁碗の組み合わせである。また、京都府長岡京市右京第28次調査土坑墓出土資料(註15)に龍泉窯系劃花文青磁碗が、同加茂町山城国分寺跡土坑墓出土資料にも龍泉窯系劃花文青磁碗がある。宮田遺跡の土坑墓とみられる遺構から出土した同安窯系・龍泉窯系青磁と共伴する瓦器椀はⅡ—３期であり、建物群北溝出土資料とあわせて、12

世紀後半に同安窯系青磁・龍泉窯系青磁が出土することがわかる。龍泉窯系劃花文青磁碗で、年号を記した木簡との共伴資料がある。藤井寺市国府遺跡の池状遺構から出土したもので、(註16)年号は承安２年（1172）で、報告者はＶ期の瓦器椀（南河内における編年・尾上実案）(註17)が共伴するとしている。しかし、出土した青磁碗は破片であり、瓦器椀にも若干の幅があるようで、年代決定の決定的資料とはなりがたいが、おおいに参考になるものである。なお、未報告であるが、八尾市水越遺跡から同安窯系青磁碗の完形品が出土している。(註18)

次の段階は、蓮弁文の龍泉窯系青磁碗Ｉ－５類の出土量が増加傾向にあるが、確実に他の遺物類との共伴関係を把握できる資料はあまりない。ただ、詳細な報告は無いが、岸和田市上松中尾遺跡の土坑墓(註19)では、Ⅲ期末ないしⅣ期の和泉型瓦器椀（13世紀後半～14世紀）と共伴して蓮弁文青磁碗が出土している。また、安満遺跡井戸11でもⅣ期の瓦器椀と共伴して内外面無文のＩ－１類が出土している。口縁が外反する無文の碗はこれにつづくとみられるが、兵庫県芦屋市三条岡山遺跡(註20)では14世紀から15世紀前半のなかで把えられる遺物群に含まれている。また、京都府長岡京市第83次長岡京跡調査(註21)の井戸からも出土しており、報告では14世紀前半であるが根拠は不明確である。高石市大園遺跡溝９(註22)では、Ⅲ期末ないしⅣ期の和泉型瓦器椀と瓦類、日本製陶器類が出土し、若干の時間幅を考慮しなければならないが、無文の青磁碗・同安窯系青磁皿、雷文帯蓮弁文青磁碗が出土している。堺市大仙遺跡(註23)も若干の時間幅があるが、14世紀後半から15世紀にかけての城館跡とみられ、雷文帯蓮弁文青磁碗が出土している。この雷文帯蓮弁文青磁碗は亀井氏によると、14世紀中頃に出現するということであるが、府下では箕面市如意谷遺跡(註24)などでも出土しており、今後詳細な時期を決定する資料の出現に期待される。また、亀井氏がＢ－１タイプとした蓮弁文青磁碗は15世紀後半を中心とする年代が考えられているが、紀淡海峡以外の資料では、四條畷市正法寺跡(註25)から出土している。共伴する瓦質火舎などから室町時代と概報では記されてある。郡家川西遺跡の溝から出土した内底面に草花文の印のある無文碗は福井県一乗谷遺跡で代表的な青磁碗で、15世紀から16世紀とみられるが、主として備前焼擂鉢Ⅳｂ期のものと共伴するので、15世紀後半のものと考えておく。染付については、現在のところ、まとまった出土資料をあげることはできない。最近の調査では、堺市の環濠都市遺跡(註26)や大阪城周辺(註27)の資料がある。前者では、16世紀中頃に廃棄された溝から亀井氏のいう明代青磁碗Ｂ－２タイプや染付碗・皿が、後者では遺物包含層から染付皿や端反りの白磁皿が出土している。また、未報告であるが、藤井寺市高屋城跡や池田市池田城跡でも備前焼等とともに染付が出土しているという。

以上、高槻市を中心にして中国製陶磁の出土状況の概要を記してきたが、横田・森田氏による大宰府での編年や亀井氏による14～16世紀の編年と大筋において合致しているであろう。

中国製陶磁器が本格的に出土するのは、白磁碗Ⅳ・Ｖ類の量が増加する12世紀に入ってからであるが、12世紀後半には同安窯系・龍泉窯系青磁が加わる。過日の研究集会では、白磁碗Ⅳ

類について屈志仁氏は生産窯を広州西村窯あるいは潮州窯と指適したが、これら12世紀代に輸入される中国製陶磁器はすべて華南産とみられる。12世紀後半は、中国では南宋が一時的な平和の間に江南各地の産業開発に努力をし、陶磁器はとくに貿易振興上重視され、龍泉窯は最盛期を迎えたという。日本国内では鳥羽・後白河上皇の院政期にあたり、平氏が日宋貿易に積極的な姿勢をとり、瀬戸内海航路の整備に努めた。国内産業も発展し、遺跡出土の瓦器椀や須恵器鉢などを検討すると、地域的分業や地域をこえる商業活動の活発さをみることができる。この背景には、荘園制の枠をこえた小農民の広範な形成を通して、富の蓄積がなされたことが想像される。しかし、小農民が中国製陶磁器交易の荷ない手とはなり得ず、権門社寺に結合し専業的に商業に従事する者の発達があったとみられる。とくに、高槻市周辺の水瀬無・山崎など淀川流域の重要な河港には、そのような商業に従事する集団がはやくから形成されていたことであろう。

このような交易の対象となった中国製陶磁器は、どのような中世集落からも出土するところから、一般民衆が豊富に使用したとする考えと、所有階層は限られるとする考え、また、遺跡によって出土量に差のあることを強調する考えなどがある。これらの考えが、ともすれば抽象的な論議になるのは具体的データが欠落しているからである。11ないし14世紀の中国製陶磁器の単純な割合をだすと、前述のように上牧遺跡1.4%、安満遺跡1.45%、宮田遺跡1.1%、やや時期が降るが芥川城跡2.5%で、平均約1.5%である。同様の作業を行なった高石市大園遺跡では約1%、広島県草戸千軒町遺跡でも約1%である。岸和田市上松中尾遺跡(註28)の場合、約500基の土坑墓のうち青磁碗は6基から出土している(1.2%)。高石市伽羅橋遺跡では瓦器椀・陶質椀1200個に対し、青磁碗約10個という。このようにみると、11ないし14世紀の集落では遺物総量の1%前後を占めていることがわかる。この数値は、京都大学構内での遺物総破片数での数値にも類似するが、他の平安京内の調査例とは若干異なるようである。その差異が平安京内の貧富の差なのか、別の条件があったのかは興味のあるところである。中国製陶磁器が、土師器、瓦器にくらべ堅牢で永年の使用に耐えることを考慮しても、一般民衆にとっては貴重品であり、宮田遺跡建物群北溝の出土例からも中心的な家族ほど多量に所有していることがわかる。時期がやや降って14世紀から15世紀になると堺市大仙遺跡では平均2.6%という数値が得られ、(註29)また芥川城でも2.5%となっている。この数値が遺跡の性格(城館)によるのか、時期的なものかは一般集落との比較が必要である。

記してきた、中国製陶磁器はいずれも碗・皿類が大半を占める。盤・洗などのいわゆる雑釉陶器や四耳壷・水注・梅瓶の類についてはほとんど接することができない。これにくらべ、平安京内では比較的豊富にこれらの資料が出土している。このことは、権門社寺中心の交易体制にあって、優品や奢侈品は平安京や鎌倉に運ばれたのであろうか。対称的に、福岡市祇園町遺跡出土資料には焼成不良のものが目立つ。

以上、感じるままに記してきたため、まとまりのないものになったが、大阪府下では、ようやく中国製陶磁器が注目されてきた段階であり、詳細な研究は今後の課題である。

本稿は、以前に「摂河泉文化資料、第22号」に発表したものに修正・加筆したものである。また、「摂河泉文化資料」では大阪府下出土の中国製陶磁器の特集を企画しており、今その準備が進められている。さいごに、研究集会で報告の機会を与えていただいた三上先生をはじめ、諸先生方に感謝の意を表します。

〔註〕

1．西山要一「紀淡海峡海底採集の中国陶磁器」北村文庫会　1975年
2．横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」九州歴史資料館研究論集 4　1978年
3．「高槻市柱本遺跡試掘調査概要」柱本遺跡調査会　1972年
4．亀井明徳「日本出土の明代青磁碗の変遷」『鏡山先生古稀記念古文化論攷』 1980年
5．「上牧遺跡発掘調査報告書」高槻市教育委員会　1980年
6．瓦器椀の編年は前掲 5 および、拙稿の「中世土器の地域色と流通」（考古学研究104号　1980年）を参照して下さい。
7．「安満遺跡発掘調査報告書」高槻市教育委員会　1974年
8．「富田遺跡」昭和51・52年度高槻市文化財年報　1978年
9．「嶋上郡衙跡発掘調査概要Ⅰ～Ⅴ」大阪府教育委員会　1971～1975年
「嶋上郡衙跡発掘調査概要 1 ～ 4 」高槻市教育委員会　1977～1980年
10. 「宮田遺跡」高槻市史第 6 巻　1973年
11. 「塚脇古墳群」高槻市教育委員会　1965年
12. 小野正敏「16世紀の染付の分類といくつかの問題」『15・16世紀を中心とした出土陶磁』発表要旨 1979年
13. 「長原」大阪文化財センター　1979年　大阪市文化財協会が調査した地区でも出土している。
14. 西山要一「大阪府貝塚市橋本遺跡出土の遺物」摂河泉文化資料第 5 号　1977年
15. 「長岡京跡発掘調査研究所ニュース第17号」 1980年
16. 「国府遺跡発掘調査概要・X」大阪府教育委員会　1980年
17. 「狭山遺跡・軽里遺跡発掘調査概要」大阪府教育委員会　1978年
18. 田代克己氏から資料を拝見した。
19. 酒井龍一氏から資料を拝見した。
20. 「三条岡山遺跡」芦屋市教育委員会　1978年
21. 「長岡京跡発掘調査ニュース第 9 ・10号」 1978年
22. 「大園遺跡発掘調査概報 2 」大園遺跡調査会　1976年
23. 「大仙遺跡発掘調査概要Ⅱ」大阪府教育委員会
24. 「箕面市如意谷遺跡現地説明会資料」古文化調査会　1980年 9 月
25. 「四條畷町正法寺跡発掘調査概報」大阪府教育委員会　1970年
26. 「堺市文化財調査報告第 6 集」堺市教育委員会　1980年
27. 「森の宮遺跡第 3 ・ 4 次発掘調査報告書」難波宮址顕彰会　1978年
28. 山県元「草戸千軒町遺跡」考古学ジャーナル №182　1980年
29. 遺構によっては染付が混ざるらしく、必ずしも厳密なものではない。

京都出土の中国産輸入陶磁器

——14C・15Cを中心に——

鈴　木　重　治

Chinese Trade Ceramics of the 14th-the 15th century Found in Kyoto

Shigeharu Suzuki (Dōshisha University)

A large number of Chinese trade ceramics were brought to Kyoto in every era, such as T'ang three-color glaze ware in the 8th century and Yüeh or Chang Sha celadon in the 9th-the 11th century. In the 12th-the 13th century Chinese trade ceramics remarkably increased in number.

A pile of Japanese-and Chinese-made ceramics of the 14th-the 15th century are found in holes and ditches. A large quantity of Tenmoku bowls are excavated from the Rinsenji site. The date of them is placed in the late 14th century. At the Kamikuze-shironouchi site are found white porcelain of the late 14th century. According to 白混 (景徳鎮陶瓷館), they are identified as 湖田窯, 白虎窯, 徳化窯 and 繁昌窯 ware. From the campus site of Dōshisha University, where there is a stratum burnt in the fire of 応仁元年 (1467), celadon, Tenmoku bowls and white porcelain are excavated.

There are some celadon incense burners as well. Fig. 1, Ying-ch'ing incense burner, is from the precinct of the old Sōkokuji temple and antedates the late 14th century. Fig. 2, Ying-ch'ing incense burner, is from the tomb of the Rev. Enkan (Zen priest) who died in 1308. Fig. 3, celadon cylindrical incense burner, is from the precinct of the old Sōkokuji temple and antedates the late 15th century; so does Fig. 4, celadon incense burner.

I　13世紀以前の出土資料

京都に搬入された中国産の輸入陶磁器は、各時代の資料を通じて多量に存在することが知られている。これらの中には、寺院などの伝世品に加えて遺跡からの出土資料があり、遺構単位の遺物組成を検討する上で好資料を提供するものがある。

これまでに知られている出土資料のうち、8世紀代の資料は、平安京左京九条三坊の唐三彩陶枕のほか左京八条三坊、右京二条三坊の絞胎陶枕などであるが、遺構を含めて伴出資料を明

確にし得ない状態で出土している。平安京内では、８紀代の遺構自体の検出例が少ないこともあって、資料が限られている。

９世紀から10世紀に入ると､資料の量は急激に増しており平安京の発展に対応している。右京二条三坊の三彩壷、二彩碗、左京七条三坊の胎釉絞胎壷、仁和寺円堂址の青磁合子(註1)、青白磁合子、西寺の青磁灯盞、白磁碗、青磁碗、青磁壷、青磁水注、西市跡の白磁碗、青磁碗、西大宮大路の青磁碗、銅官窯水注、左京四条一坊の青磁碗､左京六条一坊の青磁碗､右京六条二坊の白磁碗、北野廃寺の青磁碗(註2)、宇治木幡浄妙寺の青磁水注(註3)、深草古墓の青磁碗などが知られていて、定窯の白磁、越州窯の青磁、銅官窯の貼花文、景徳鎮の青磁が主要な資料となっている。

11世紀から12世紀にかけての資料は、さらに増加の傾向にある。左京四条一坊の白磁碗、青白磁水注、左京三条三坊の白磁碗、左京八条三坊の白磁碗、太秦弁天島経塚の青白磁合子、朝日山古墓の褐釉水注、深草稲荷山経塚の青白磁合子、青白磁小壷、白磁小皿、白磁小坏、清水寺経塚の青白磁小壷、白磁碗、花背別所経塚の青白磁小壷、青白磁合子、鞍馬寺経塚の青白磁小壷(註4)、双ケ丘経塚の褐釉鉄絵盤、西市跡の白磁碗、樫原廃寺の白磁合子、白磁碗、伏見栢の森八角円堂の白磁四耳壷、青磁皿、白磁合子、山科大宅廃寺の白磁碗などであり(註5)、経塚に伴う資料が圧倒的に多いが、平安京内の発掘が進むにつれて白磁碗の資料が増化している。

12世紀の後半から13世紀にかけての資料は、竜泉窯系の劃花文青磁碗や同安窯系の櫛描き文青磁碗、景徳鎮産の青白磁梅瓶、泉州窯産の黄釉鉄絵洗、緑釉洗などが、左京七条三坊、左京六条三坊、太秦井戸廃寺、岡崎法勝寺、旧相国寺、山城国分寺、長岡京など平安京の内外から出土している。これらのうち、量的に多いのは、劃花蓮花文青磁碗、櫛描き文青磁碗、鎬蓮弁文青磁碗であり、肥厚化を示す玉縁の白磁碗とともに需要に応じて大量に搬入されたことを示している。

地方色の強い土師器や瓦器などの皿、碗と伴出して、遺物組成の一部を構成する資料も確認されている。山城国分寺址のＳＫ5417は、寺址の北辺を東西に走る溝が埋没して廃棄された後の土坑墓であって、12世紀後半の土師器の中皿、小皿を伴出して劃花蓮花文青磁碗が検出されている(註6)。また長岡京跡右京第28次の調査では、同じく12世紀後半の瓦器碗や土師器の皿を伴出した土坑墓から、劃花蓮花文青磁碗が出土している(註7)。平安京内では、左京八条三坊の溝状土坑から常滑の甕、壷、神出系の擂鉢などを伴つて、白磁碗、劃花蓮花文青磁碗、櫛描き文青磁碗、魚文青磁皿、櫛描き雷光文青磁皿が出土している。

以上のように13世紀までの資料を概観すると、器種ごとに個々の資料は増加しているものの、経塚や土坑墓などの一部を除いて､いまだに遺構に伴う資料が少なく､使用年代や廃棄年代の検討を含めて考古学的には多くの問題を残していることになる。このことは、14世紀以後の資料についても指摘されるところであり、基準資料の抽出作業が求められるわけである。

Ⅱ　14世紀・15世紀の一括資料

14世紀初頭に位置づけられる遺構のうち、中国産輸入陶磁を多量に出土している例は、旧相国寺境内の同志社女子大学心和館地点で検出されたＳＫ306が典型である。(註８)ここからは、13世紀に製作年代のおかれる鎬手蓮弁文青磁碗、櫛描き文青磁碗、口禿白磁皿、白磁四耳壷、黄釉鉄絵洗などが出土しているが、伴出の土師器皿、瓦器碗、山茶碗、瀬戸灰釉洗、常滑甕、神出系片口鉢、瓦質土釜、瓦質土鍋などの多量の国産品には、14世紀に入つてからの製品が多く、廃棄年代をよく示している。この土坑中には、薄い灰層が検出されていて、その上下を分層することで先後関係を検討してみたが、下層に至つて土師皿の量が増していることを認める以外は、遺物の組成に変化は無く、上下間に大きな時期差を認めることはできない。これらのことは、13世紀代に搬入されて使用された中国産輸入陶磁器が、14世紀まで伝世していたことを物語っている。

このような例は、他にも知られていて、白川街区の吉田近衛町遺跡(註９)のＳＫ01の土坑では、13世紀代の鎬手蓮弁文青磁碗、青磁盤、白磁四耳壷、白磁碗を出土しながら、伴出の土師皿や瓦器碗などから14世紀の末頃の遺構と考えられている。

14世紀の中葉以降15世紀の後半までの資料は、平安京をはじめ、その周辺でも多くの出土例が報じられているが、遺構の検出に伴う資料や基準となり得る資料は、臨川寺旧境内(註10)、相国寺旧境内(註11)、東福寺境内(註12)、城ノ内遺跡(註13)、白川街区(註14)などで検出された数例のみである。出土資料のうち量的に多いのは、碗、皿の類であり、青磁、白磁、天目の碗や青磁、白磁の皿である。次いで青磁の盤、鉢があるが香炉や壷などの出土量は少ない。この時期になって急激に資料が増加するのは、天目碗である。天目碗のうち建窯の製品が多いことは、各地の出土例と共通して、吉州窯産の天目碗は、京大医学部の構内より検出されている１例のみである。普遍的な青磁碗についてみると、14世紀代に比定される一群は、鎬手蓮弁文の退化形式とみられる蓮弁文碗で、鎬が明瞭でなくなり、片切り彫りによる幅広の蓮弁文をもつ一群と、無文を主体としながら、内底部に印花文をもつものがみられる。くすんだ黄緑色や灰緑色を呈する釉を、部厚くかけている資料が多いが、これらの中には、外底部の中央を除いて蛇の目状に釉を欠き落した資料や、印花文をもつ内底に釉をみない資料が含まれる。烏丸通花屋町より出土した土坑９の青磁は、この時期の好資料であり(註15)、層位的な観察から報告者は室町時代前期と考えている。15世紀代を通してみられる青磁碗は、雷文帯を口縁直下にもちながら体部に篦切り蓮弁の退化した文様をもつ一群である。神泉苑(註16)より出土している資料をはじめ、中世の輸入陶磁として古くから知られていて、平安京内でも各地から検出されている。

14世紀後半の一括資料については、臨川寺上久世城ノ内遺跡などで良好な資料が知られてい

る。臨川寺(註17)については数次にわたって発掘調査がおこなわれているが、江谷寛氏による50年度と51年度の調査にはみるべき資料が多い。ここでは建物跡や溝及び庭園址などが検出されていて、南北朝期にかぎられる多量の瓦や常滑の甕、土師器などともに青磁碗、白磁碗、白磁馬上坏、白磁印花文碗、白磁印花文皿、天目碗、青磁鉢、青磁擂りこぎ棒などが出土している。中でも建窯の天目碗は量的に多く、瀬戸天目を含めて天目碗の復元資料は数十個体に及んでいる。これらの天目碗の中には、墨書と朱書の「三会」銘のものがあって、臨川寺三会院に関する資料と考えられている。臨川寺については文献史料も知られていて、康安元年(1361)と永和四年(1378)の火災による災害は三会院にも及んでおり、出土の状態からみると、建物跡の西北隅から天目碗がまとまって検出され、青磁、白磁、青花などは建物北側の中央部から集中して出土している。庭園址に伴う石組遺構や溝からの出土資料を含めて、14世紀後半までの一括資料としては、稀れにみる好資料である。

上久世城ノ内遺跡(註18)は、中世の集落遺跡であつて、東寺領庄園として東寺百合文書に多くの史料を残す上久世の庄に相当している。発掘調査によって溝、建物群、井戸、土坑などが検出されており、とりわけＳＥ101、ＳＤ110、ＳＤ112、ＳＫ187、ＳＤ122の溝、井戸、土坑などの資料は、土師皿、瓦器碗、土釜、瀬戸灰釉平鉢、瀬戸おろし皿、瀬戸仏花瓶、瀬戸天目碗などの資料に伴出して中国産輸入陶磁器を出土している。このうちＳＥ101は、検出した遺構中もっとも古い時期の遺構と考えられ、瓦器碗、土師器によって13世紀の後半に位置づけられている。ＳＤ101、ＳＤ112、ＳＤ122、ＳＫ187などは城ノ内遺跡の主要な遺構群であって、終末期の瓦器碗や土師皿などの組成から14世紀の後半でも終末近く、下っても15世紀の初頭までの年代が与えられている。これらの遺構から出土している中国産輸入陶磁器片は、152片を数えており国産の陶磁器片の28点を大きく上まわつている。出土した青磁碗、皿、白磁碗、皿の中には、生産窯についての見解が中国の研究者によって示されているものがある。すなわち、景徳鎮陶磁館の白混氏によると、白磁のうちには、湖田窯産、白虎窯産、徳化窯産、繁昌窯産の資料があり、14世紀の資料と考えられている。(註19)

また、上久世城ノ内遺跡に近い大藪遺跡からは、井戸が多数検出されていて、瓦器碗の年代から14世紀前半から中葉までの時期が与えられた青磁の碗が出土している。鎬の明瞭でなくなった蓮弁文碗と、片切り彫りによって幅広い蓮弁を施した碗である。

上京での出土資料のうち、旧相国寺境内に当る同志社の構内(註20)は、集中的に中・近世の遺構群の検出をみたことで、14世紀代の一括資料も多い。その中でも女子大図書館地点のＳＫ339、ＳＥ301、中学校体育館地点のＳＫ2226、ＳＫ2337、ＳＫ2354、及び地下鉄今出川駅の同志社側昇降口南口地点のＳＫ216、ＳＤ303などは、備前の甕、瀬戸の灰釉平鉢、魚住系須恵質片口鉢、瓦質火舎、瓦器碗及び多量の土師皿などを伴出した遺構群であり、青磁碗、青碗香炉、青磁盤、白磁碗、白磁皿などを伴出している。これらのうち、特徴的な青磁碗は、黄緑色や灰緑

色の釉を部厚くかけた無文の碗で、中に体部の下半から高台部までを露胎とするものが含まれている。

15世紀代の資料についても、同志社の構内からの出土資料に注目されるものがある。応仁元年（1467）の兵火による火災は、附近を焼土と化し、広範囲にわたって焼土層を形成している。火災後の整地層や、廃棄坑、短期間に埋め戻された溝や井戸などが検出されこいて、15世紀の中葉から後半にかかる時期の一括資料を示している。このうち中学校体育館地点のＳＫ2221、ＳＤ2302、女子大図書館地点のＳＥ301、新町別館地点のＳＤ001などは、層位的にも廃棄年代を応仁元年（1467）又はそれ以前でも大差のない時期におさえることのできる一群である。ＳＫ2221は、東西8.5m以上、南北８m以上、深さ0.6mの隅丸方形を呈した土坑であり、土坑中には大量の焼けた瓦が無雑作に廃棄されていた。土坑の上部は、焼土粒を含めて堅くつきかためられていて、火災後の整地によることが明瞭であった。土坑中から出土した瓦には、鬼瓦、鳥衾、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦などがあり、瓦塼、土師皿、瓦質脚付火舎、須恵質擂鉢、瀬戸灰釉平鉢、備前擂鉢のほか、中国産の青磁筒形香炉、天目碗、青磁碗、白磁碗などが出土している。青磁碗は、口縁部が肥厚して玉縁状を呈する無文の資料であって、黄緑色の釉が厚くかけられている。ＳＤ2302からは、土師皿、土鍋、瀬戸灰釉平鉢、魚住系須恵質片口鉢とともに白磁碗が出土している。ＳＥ301は円形プランの石積みの井戸であり、内部から瓦質火舎、備前甕、有孔瓦塼、土師皿などが埋め土の焼土に混じつて出土し、これに伴って青磁碗が検出されている。青磁碗は底部のみであるが器壁は厚く、やや内彎する高台の外端部は、削りによって面取りされていて畳付までの外底部は露胎となっている。釉は灰緑色を呈して部厚くかけられている。ＳＤ001(註21)の溝からは常滑甕、備前擂鉢、瓦質火舎、土鍋、硯、平瓦、丸瓦、瓦塼、土師皿を伴って青磁碗、青磁盤などが出土している。碗には無文のものと、内底部に印花文をもつもの、櫛描き文をもつもの、雷文帯をもつものなどがあるが、無文のものや印花文をもつものは器壁が厚く、雷文帯をもつものより口径が大きい。この溝は幅３m、深さが1.5mあって東西方向に28m検出されているが、更に東西方向に延びることが確認されている。室町第の北辺にとりつく堀の一部であり、応仁の大乱によって短期間に埋没したものと考えられている。これらの遺構からは、多くの土師皿が出土していて、遺物組成の中でも重要な位置を占めており、その編年的考察はは、年代観の上にも多くの情報を与えている。

これら遺構出土の一括資料は、共伴資料として遺物組成をよく示しているが、遺構廃絶時の同時共存を提示するわけであり、遺構自体が長期間にわたつて使用される場合や、短期間に廃絶する場合、更に出土遺物ごとの使用期間の差などを考慮に入れることで、それぞれの実体に迫ることができるはずである。中国産の輸入陶磁器などは、祭具用の土師皿のように、短期間の使用後に簡単に廃棄されるものではなく、しばしば長期間にわたって使用される場合がある。また器種によっては、一形式一タイプとはかぎらず、数タイプに分かれる場合すらあるわけで

ある。各地で共伴関係を示す土師皿と青磁碗についても、土師皿が大きく変りながら、青磁碗に変化の少ないことが、多くの遺構で知られている。主として15世紀の後半代から16世紀の後半までにみられる青磁碗のうち、箆切り蓮弁文青磁碗から線描き蓮弁文への変化に対応する土師皿の変化は、京都では、すくなくとも四形式が設定される。この器種による展開は、旧相国寺境内で検出された遺構群の他、山科本願寺、本国寺、内膳町など市内の各地で検証されている。

なお、この時期の白磁の変遷を、特徴的な資料についてみると、前段階からの口禿げの皿が14世紀初頭まで残り、15世紀に入ると畳付に抉りをもつ一群が主体となり、その後半からは端反りの一群へと変化しているが、それぞれの間には並用されている期間を認めることができる。青花については、16世紀以降の資料ほど15世紀までのものはなく、断片的に知られているだけに今後の課題として残される。

Ⅲ　14世紀・15世紀の香炉

発掘調査によって出土する中国産輸入陶磁器のうち、散見される資料に香炉がある。これらのうち14世紀、15世紀に年代の与えられる出土資料中の基準資料は、現在のところ図示した4点であり、1・2が14世紀、3・4が15世紀の資料である。

1は相国寺の旧境内のうち、現在の山門に近い同志社大学光塩館地点のＳＫ316の土坑から出土した影青陰刻唐草文香炉である。この遺構の下は、平安時代の整地層を掘りくぼめていて、その上部が削平されているため当初の形態をとどめていないが、附近からは数基の土坑墓や備前焼の大甕を使用した14世紀代の甕棺墓が検出されていることもあって、墓地である可能性がある。上部の包含層中に終末期の瓦器碗を認めるところから、14世紀の後半までの時期が与えられる。口径 11cm、器高 7.9cm、そのうち脚の高さは 1.7cmを示す。口縁部の直下から体部の上半部にかけて三本の凹線をめぐらし、中央部を線彫りの沈線による唐草文で飾り、体部の下半部には二本の凹線をめぐしている。また脚の外面には中央の縦位置の画線をもち、左右の孤線を浮文によって飾っている。体部の内面の下半部と外底面は、露胎として釉をかけず、外面のみに釉をかけていて、凹線と沈線の文様の部分のみが青味を深くしており、装飾的にも効果的な釉調を示している。

2は、東福寺の開祖円鑑禅師の墓から出土した影青印花文角形香炉である。円鑑禅師の没年は延慶元年（1308）であつて、墓地は14世紀初頭の葬法の一部を示し、花崗岩製の切石を使用した石室構造をもっている。石室は、80cm四方の方形プランを示し、深さも 80cmが測定されている。この石室の左脇に、東福寺22世固山禅師の骨壷が埋葬されていることもあって、石室の石材が落ち込む状態で検出され、香炉も割れているが、その一部は石室の底から出土してい

る。固山禅師の没年が延文五年（1360）であることから、すでに14世紀の後半には部分的に破壊されていたことになる。

香炉は、口径 10.5cm、器高 10.8cmを測り、そのうち脚部は2.2cmである。体部の中央を六面取りとしていて、それぞれを長方形の枠でかこみ、内部に花文を配している。肩から口縁部までの上半部は内傾しつつ立ち上り口縁に寄って外反し、頸に数条の浅い沈線をめぐらしていて、相い対する二耳は、肩に接する部分から口縁の上端を越えて大きくＳ字状に施されている。このＳ字状を呈する耳の基部には、小豆大の貼り付け浮文が肩に乗る状態で置かれている。また肩をめぐって花文に対応するように浅い沈線による波文があって、六面取りの花文の装飾を引き立てている。脚部は外反して裾に広がり、安定した形態を呈していて全体のプロポーションをひきしめている。

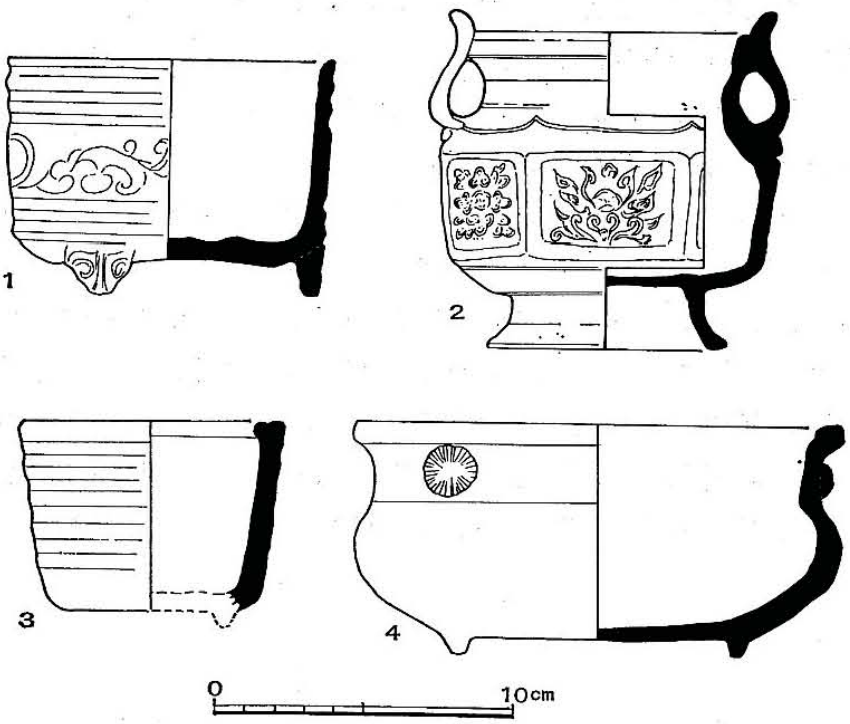


Fig. 京都出土14Ｃ・15Ｃの香炉
（1.3.4. 相国寺旧境内，2. 東福寺円鑑禅師墓）

この香炉に類似する資料は、新安沖の沈船から引き上げられた一括資料中にあって、青白磁印花花卉文角形香炉として知られていて、元代景徳鎮産の優品と考えられている。(註22) 東福寺の出土資料は、年代のおさえられるる影青香炉の基準資料といえよう。

3は、旧相国寺境内の東南部に当たる同志社女子大学心和館地点から出土した青磁筒形香炉である。第三遺構面から検出されていて、15世紀後半までの年代が与えられる。この第三遺構面は、応仁の大乱による焼土層の下部に位置する層位にあって、その上部の整地層が年代をおさえる決め手となっている。

黄緑色の釉を持ついわゆる天龍寺手の青磁であって、口径9.1cmを測り、器高については底部が欠けているため明らかではないが、底部に接する体部下端までが6.1cmであるため、7cm程の器高を予測している。体部の上端から下端までの間を、凹線をめぐらすことで形態を整えていて、製飾文様を施さないことで素朴な感じを与えている。15世紀の一般的な青磁香炉といえよう。

4は、旧相国寺の境内のうち、今出川通りに面した同志社女子大学図書館地点から出土した青磁膀腰香炉である。14世紀代の土拡墓群に近接した位置の上部から出土し、ここから備前の甕や土師皿などが散在して検出されている。3の香炉と同様に、応仁の大乱時の焼土層が、年代を決める手がかりを与えている。

口径16.4cm、器高8.0cmを測る。口縁の上端部はやや内傾していて、内側に段を持つことで一本の稜線が形成されている。体部の下半を大きく内側にしぼりながら底部へと続くが、ゆるやかなカーブが脚まで連続していることで、腰の丸味のある張り出しが強調されており、安定のよいプロポーションを生み出している。頸には円形浮文を貼り付け、その上面に細線を放射状に刻むことで菊座に近い施文効果をもっている。釉は3と同様の黄褐色を呈しているが深みがある。体部の内面と外底面を露胎としているが、畳付までの釉がけは丁寧である。15世紀代に限定し得る出土資料のうち、青磁膀腰香炉の一つの典型といえよう。

〔註〕

1. 小山冨士夫「仁和寺出土の越州窯合子と影青合子」陶磁10—3他
2. 京都大学考古学研究室「京都大学考古学資料目録」2巻所収。なおこの資料は越州窯産と考えられていたが、香港中文大学のジェイム・ワット氏によると、景徳鎮産の青磁であるという。
3. 藤岡了一「浄妙寺出土越州窯青磁水注」美術史第1号他
4. 東京国立博物館図版目録、経塚遺物篇「鞍馬寺経塚遺宝」他
5. 東京国立博物館「日本出土の中国陶磁」
6. 京都府教育委員会による発掘資料
7. 註6に同じ
8. 同志社大学校地学術調査委員会「常盤井殿町遺跡発掘調査概報」
9. 京都府教育委員会「吉田近衛町遺跡調査概要」
10. 江谷寛「臨川寺旧境内」仏教芸術 115
11. 鈴木重治「相国寺旧境内」仏教芸術 115　同志社大学校地学術調査委員会調査資料1～13
12. 八賀晋氏の発掘調査による。
13. 堀内明博・百瀬正恒・吉村正親「上久世城ノ内遺跡」仏教芸術 115
14. 京都大学埋蔵文化財研究センター「京都大学構内遺跡調査年報」
15. 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会「遺跡調査年報」
16. 坂東善平「神泉苑遺跡について」古代学研究 28
17. 註10の他、京都市埋蔵文化財研究所「臨川寺跡発掘調査概報」
18. 註13と同じ
19. 百瀬正恒「城ノ内遺跡出土陶磁器の生産窯について」訪中印象記
20. 註11の他、同志社大学校地学術調査委員会「同志社キャンパスの遺構と遺物Ⅰ、Ⅱ」
21. 同志社大学校地学術調査委員会「同志社大学新町校地発掘調査概報」
22. 韓国国立中央博物館「新安海底文物」新安海底文化財特別展図録

山梨県東八代郡一宮町新巻本村出土の陶磁器

小　野　正　敏

Ceramics Found in Aramaki-honmura, Ichinomiya-chō,
Higashi-Yatushiro-gun, Yamanashi Pref.

Masatoshi Ono (Institute of Ichijōdani Asakura Site)

I deal with pieces which were discovered in Aramaki-honmura, Yamanashi Pref. in 1933. Thirty-nine pieces such as bowls and plates were found in a large earthenware pot which was buried upright under the ground, but at present one is missing: 6 celadon bowls, 2 blue-and-white bowls and 20 ash-glazed plates are Japanese, Mino ware, and the others are Chinese. The large pot, a container of those pieces, is also a Japanese product, Tokoname ware (Photo 1-3, Fig. 1. 2).

Fig. 3 illustrates the correlation among the blue-and-white, celadon bowls with lotus design and white porcelain plates which were excavated at several sites. Those pieces of Aramaki-honmura may approximately date back to the latter half of the 15th century, which coincides with the chronological date of the Japanese products——the Mino ash-glazed plates and the Tokoname pot.

I argue as follows in this paper. (1) As for the blue-and-white, Group 1 including the blue-and-white plates are dated from the second half of the 15th century up to the first half of the 16th century. But bowls are much older than plates and they date back to the first half of the Ming dynasty, the early 15th century. Accordingly, bowls are categorized into Pre-Group 1. (2) It is evident that Chinese ceramics were imported into Japan, suffering several changes as shown in Fig. 3. Stage-B in Fig. 3, concerned with the materials I am now dealing with, is the time when Chinese ceramics were extremely few in Japan while in Ryūkyū things were contrary. The situation of Stage-C is quite different from that of Stage-B.

Thus, the materials of Aramaki-honmura are important in the consideration of the chronological problem of the late 15th century.

調 査 者　　青柳洋治・小野正敏

調査年月　　1980年４月

既調査の文献　上野晴朗「甲斐国発見の鎌倉・室町時代陶器」甲斐路３号、1961

1　調査の目的と方法

この資料は、大甕の中に39個のまとまった遺物が一括して納められていたもので、これらの中には、中国製の磁器と日本製の陶器があり、その共伴関係からも資料価値が高い。この資料については、1961年に上野晴朗氏によって貴重な報告が行なわれているが、現在では入手し難く、一部の遺物実測図がないなど、一般に利用されにくい。

今回の調査では、資料を再検討し、資料全点について、写真撮影を行ない、器形の実測図を作成し、カード化することを目的として調査した。日程の都合により、一部の遺物について実測図が伴なわないものがあるが、先に述べた目的はおよそ達成できたものと思う。

2　遺跡と出土状況

出土地は、東八代郡一宮町新巻本村（あらまきほんむら）で、昭和８年に、同地の通称「お天神さん」と呼ぶ、小祠の境内より、道路工事によって発見された。遺物は現在、この地の地主の降矢進氏宅に所蔵されている。

出土状況について、発見者の降矢軍次郎氏の手記が、先の上野氏の報文に引用されている。これを転載する。

「御代咲村字新巻区降矢軍次郎家は、同村曹洞宗中山広厳院の開基降矢対馬守今泉道珠の二男図書の遠孫にして、祖先は橘氏なるを以て、往古より天満宮を邸内に奉祀し、塩田の長者降矢氏の氏神として尊崇せり。朱印八畝十歩を領し境内社地（現今は有租地）八畝十歩あり、同社地は邸宅と道路を挟みて不便を感じ、大正十二年十二月邸宅内に移転して跡地を開墾せり、昭和八年五月十五日元社殿のありし北の方二三間南寄の処を掘りたるに土焼の大甕を発見し其中より古雅掬すべき皿及茶碗参拾九個出でたり（以下略)」

甕は、口縁を上に向け正位に埋置されていたとのことである。甕の中には39点の碗皿があったとのことであるが、現在、降矢氏が所蔵するのは38点で、１点はなく、その器種も不明である。

3　遺物についての観察（ＰＬ．１～３、Fig. １、２）

現存する遺物38点の内訳は、中国製の青磁碗６点、染付碗２点、染付皿10点と、美濃製の灰釉皿20点であり、これに容器の常滑焼甕１点がある。

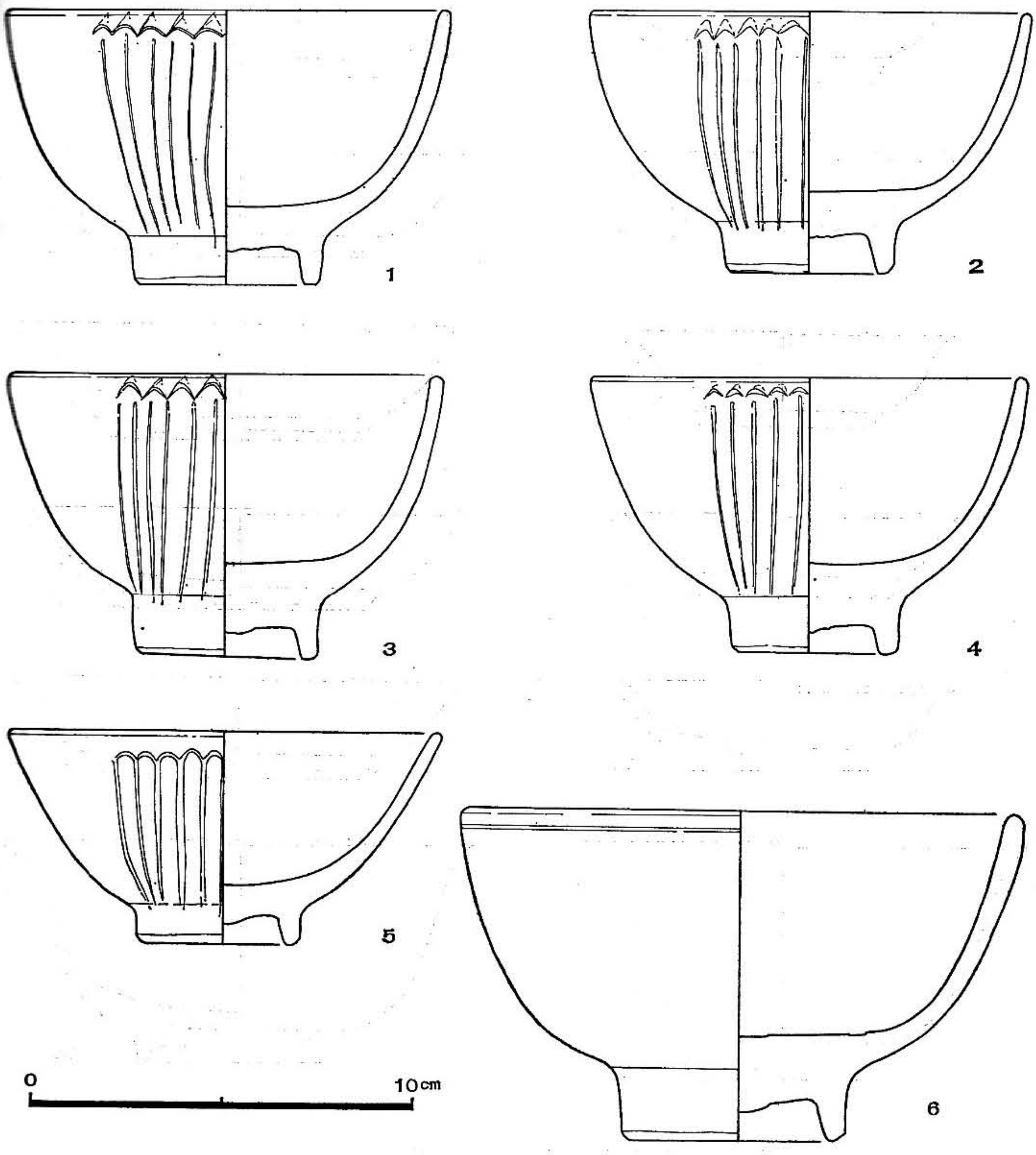


Fig. 1　青 磁 碗

青磁碗は器形と、外面の主文様から２グループに大別できる。第１のグループは、外面にヘラ描きの簡略化された、間隔の狭い蓮弁文をもつもので５個体がある。これらは法量によりさらに２つに分けられる。Ａは、①〜⑤で口径11〜11.5cm、器高７〜7.5cmを測り、腰は丸く、そのまま口縁に至る。高台は径4.5〜５cmで内グリは浅く、高台内の丸く釉を抜いた部分には、径2.5cm程の幅の細いくっつきの痕を残す。見込には、ヘラで描かれた花弁が認められ、

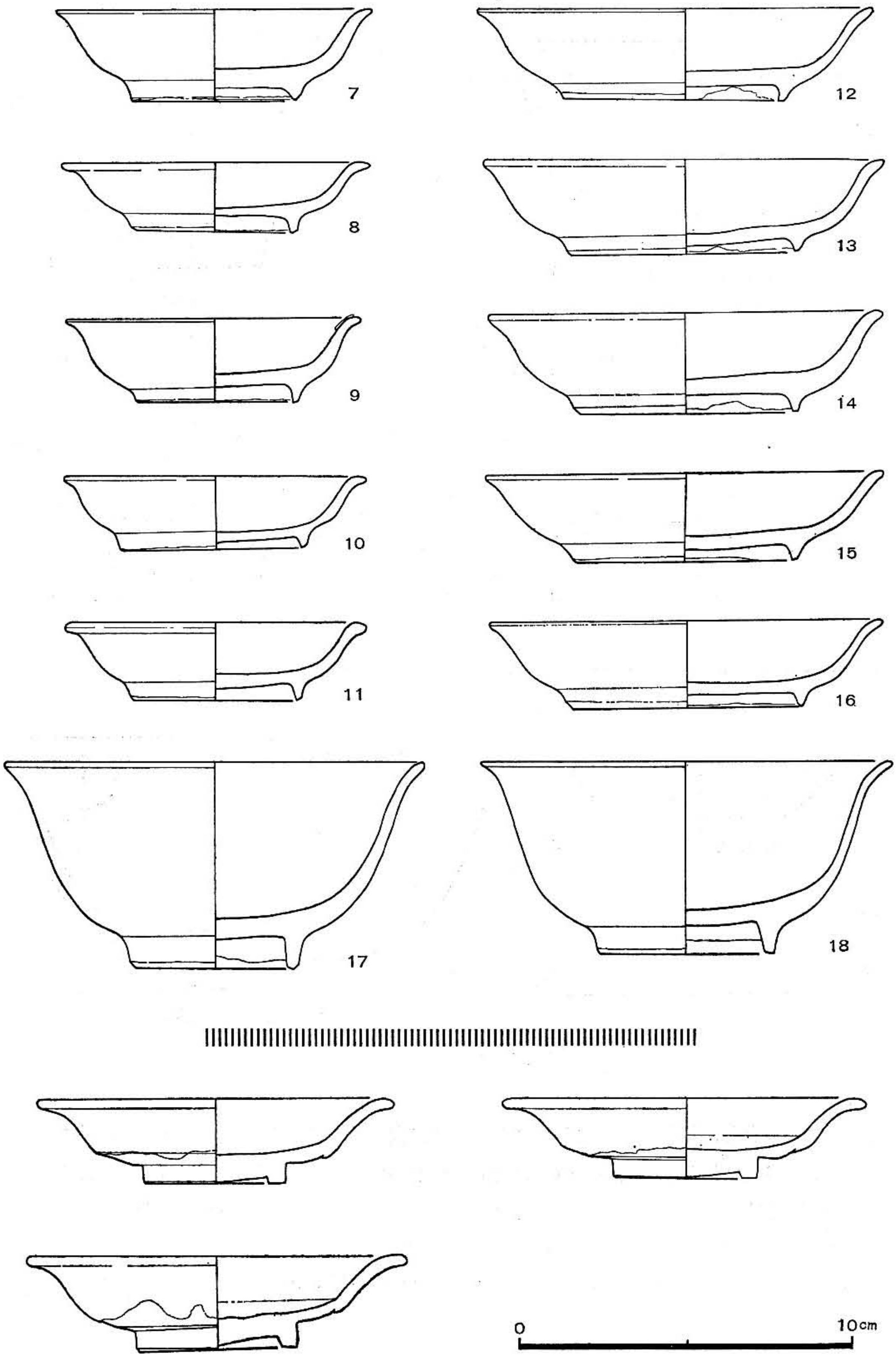


Fig. 2 染付皿・碗　灰釉皿



PL.1　青磁碗　山梨県・新巻本村出土



PL.2　染付皿・碗　山梨県・新巻本村出土



灰 釉 皿





常滑焼甕

PL.3　灰釉皿・常滑焼甕　山梨県・新巻本村出土

①と②はこの中心に「顧氏」のスタンプが押されている。Bは口径11cm、器高5.5cmで、腰の張らない、浅い開いた器形である。見込は花弁で、高台内は輪状に釉が抜かれている。⑤の1個体である。

第2のグループは、⑥で口径14.5cm、器高8.5cmで、第1のグループより大振りである。外面は口縁下に界線をもつだけで無文、見込に印花をもつが文様は不明である。第1のグループも第2のグループも、器形や高台部の施釉など、製作技法からは同じである。

染付碗は2個体で、いずれも端反りの器形で法量も似ている。⑰は、口径12.8cm、器高6.2cm、高台径5.2cmで、畳付はしっかりしたヘラ削りである。外面は肥痩のあるくずれた筆の宝相華唐草文、見込には2重の界線内に「福」字が描かれる。⑱は、口径12.4cm、器高5.9cmで、外面は渦文状の唐草のくずれたような文様をもち、見込には、「寿」字が描かれる。胴下半部に大きい貫入が目立つ。

染付皿は、法量によって2グループに分けられる。第1のグループは、⑦～⑪の5個体で、口径9～9.5cm、器高2～2.5cm、高台をもつ端反りの皿で、高台畳付をヘラ削りした後に、砂敷で焼成している。外面は5単位の宝相華唐草文で（⑦のみ4単位)、見込には羯磨文あるいは十字花文などと呼ばれる文様をもつ。いずれも肥痩のあるなれた筆で簡略に描かれる。器形の歪みやくっつきの痕を残すなど、余り上等の製品ではない。第2のグループは、⑫～⑯の5点で、いずれも口径12cm、器高2.5cm～3cmの端反り皿で、製作技法は、第1のグループと同じである。外面には4単位の粗略な宝相華唐草文を描き、見込には、いわゆる玉取獅子を描く。⑯だけは、見込に羯磨文を描く。

灰釉皿は20点あり、いずれも完形品で、法量は大略口径11cm、器高2.5～3cmで、近似している。器形は、腰折れ気味に外反する皿で、腰以下はヘラ削りで露胎、高台は削り出しの輪高台である。淡緑色の灰釉が内面全体と、外面腰までに施釉される。見込には、重ね焼の目跡を3または4個もつ例ともたない例とがある。胎土は、灰白色のボソボソした土で、美濃焼のモグサ土と呼ばれるものであろう。

容器の甕は、口径52cm、器高87.5cm、肩部が「く」の字に折れて、最大径をもち、89cmを測る。口縁には、5cmもある幅の広い縁帯が下がり、内側には浅い凹縁が樋状にめぐる。また肩には、指先で描いたような浅い凹線の記号をもつ。器形や胎土から常滑焼の製品と考えられる。

4　遺物の年代といくつかの問題

青磁碗、白磁皿、染付碗皿の分類

新巻本村出土の陶磁器の年代や、その問題点を考えるために、どの遺跡でも多く出土し、特

徴のとらえ易い、青磁の蓮弁文をもつ碗、白磁の皿、染付の碗、皿を、おおまかに分類し、そのメルク・マールとしたい。

Fig. 3で、青磁蓮弁文碗A群としたものは、東京国立博物館 1978『日本出土の中国陶磁』所収の図版No.217例（福岡・今津古墓）などにみられる、ヘラ削りによる浮彫の鎬蓮弁文の碗で、同じくB群は、同書図版 No.274 例（和歌山・友ケ島海底）のように、蓮弁が粗略に片切りのヘラで幅広に切られたもので、口縁に雷文帯をもつ例ともたない例がある。前者の方が、B群の中で後出と考えられ、器形も次に述べるC群に共通している。同じくC群としたものは、新巻本村の第1グループのように、線描きによる間隔の狭い蓮弁文をもつものである。

青磁蓮弁文碗A′群は、同書図版 No.218 例（伝福岡県出土）などに見られる鎬蓮弁が退化して背の稜が丸くなったもの、B′群は、同書図版 No.272 例（和歌山・友ケ島海底）のように、ヘラにより周囲を削って間隔の狭い蓮弁を表したものである、本来B′群はC群の時間的に古い部分と考え、C′群とするべきであるが、京都での発表に際して、B′群の名称を用いたので、このままにしておく。

白磁皿A群としたものは、同書図版 No.194 例（福岡・今津古墓）のように、口禿をもつ高台のないもの、同じくB群は、同書図版 No.301 例（宮崎・曽井城跡）のような浅い小皿で、高台に抉りのある例とない例とがある。胎土が軟質で、不透明な釉を腰まで施釉し、以下をヘラ削り露胎とするのが特徴である。しかし、磁質の胎土で青味のある透明感の釉の例もある。また、このグループには、同書 No.300 例（宮崎・曽井城跡）のような小形の面取りをした坏などを共伴することが多い。白磁皿C群は、同書図版 No.303 例（石川・波佐谷城跡）のような、端反り皿で、内傾した高台をもち、その付け根は釉切れが目立つ例が多い。

染付については、かつて一乗谷出土の碗皿を中心に、具体的に分類しているので、これを援用したい。詳細は、小野 1979『16世紀の染付の分類といくつかの問題』「15・16世紀を中心とした出土陶磁発表要旨・島根県立博物館」を参照してほしい。Fig. 3の染付1群は、この分類の碗Ⅰ～Ⅵ類と皿Ⅰ～Ⅳ類、Ⅵ～Ⅷ類であり、同様に染付2群は、碗Ⅶ～Ⅸ類と皿Ⅴ類、Ⅸ類、Ⅺ類、Ⅻ類である。染付3群は碗Ⅹ類を含む〝α〟とする。

主要な遺跡での出土状況の概観（Fig. 3）

14世紀前半代の代表的な遺跡として、鎌倉におけるいくつかの遺跡、例えば、光明寺裏遺跡、長勝寺遺跡、材木座の北区鎌倉学園遺跡などの成果がある。これらの遺跡で、青磁蓮弁文碗A群と白磁皿A群との共伴が知られ、染付は伴なわない。この遺物群の年代は、大略1333年の鎌倉幕府滅亡までと考えて良いだろう。

次によく似た年代が推定されている韓国の新安沖出土の遺物群を見ると（国立中央博物館 1977『新安海底文物』）、ここでも青磁蓮弁文碗A群と白磁皿A群を確認できる。また青磁蓮弁文碗A′群又はB群と見られる例も少量認められ（同書No.136など）、同じ手法の蓮弁文を酒会壷

などの器形にも見る（例えば、No.62）。日本での消費地と貿易船という差を考えると、その違いを年代だけに絞るのは、危険とは思うが、鎌倉でのいくつかの遺跡での資料には共通して、青磁蓮弁文碗Ｂ群、白磁皿Ｂ群が認められないことから、新安沖の遺物群を少し後出と考えたい。そして、青碗蓮弁文碗Ａ群の終末を14世紀中頃、白磁皿Ａ群の終末もそれに近いと推定した。

次に、青磁蓮弁文碗A′群を出す遺跡として沖縄県勝連城の遺物を見ると、青磁蓮弁文碗A′群と白磁皿Ｂ群の共伴が知られ、これに元様式の染付が伴なう。ただし、この遺跡の青磁碗の主体は、玉縁風の口縁をもつ端反り碗で、蓮弁文をもつものは少ない。白磁皿Ｂ群では、抉入のあるものはないか、又は極端に少ないと考えられる。次に同じ沖縄県の御物城の遺物は、雷文帯をもつ青磁蓮弁文碗Ｂ群が主体で、これに勝連城より量の増大した白磁皿Ｂ群（抉入のあるものないもの両者）が共伴し、少量の染付が伴なう。青磁蓮弁文碗B′群は数点が認められるだけである。

紀淡海峡の友ケ島沖の遺物群では、雷文帯をもつ青磁蓮弁文碗Ｂ群とB′群が共伴しており、Ｃ群はない。ここでは、白磁皿は知られてなく、染付は２点の端反り碗が認められる。青磁蓮弁文碗B′群の量が増加しているので、御物城より若干新しいと考えられる。ただ、B′群が量的にまとまって存在するのは、この資料だけであり、今後の検討を必要とする。

雷文帯にラマ式蓮弁文を有す青磁碗については、亀井明徳氏が沖縄県山田城から座喜味城への移転が1422年であると伝えられる城の興廃年代をもとに「14世紀後半から15世紀前半、すなわち明前期」に位置づけている（亀井 1978『山田城跡発見の中国陶磁について』「座喜味城跡」読谷村教委）。筆者は、青磁蓮弁文碗Ｂ群の中で、御物城や友ケ島沖の例のような雷文帯をもつものは、青森県尻八館の例のように、雷文帯をもたないものより後出と推定しており、山田城、座喜味城のＢ群が前者であることから、この両者の漸移が14世紀末又は15世紀初頭と考えている。

青磁蓮弁文碗Ｃ群の共伴関係について、福井県一乗谷朝倉氏遺跡の資料を検討してみたい。一乗谷で発掘された遺構群は、朝倉氏が一乗谷へ入城した時と考えられる文明の初め頃の遺構Ⅱ期と、16世紀初めに一乗谷全域に町割が行なわれ（Ⅲａ期）、何回かの改修の後に、天正元年（1573）に焼亡する（Ⅲｃ期）までの町割にのった遺構Ⅲ期とが主である。このうちⅡ期については、発掘面積が小さく不明な部分が多い。遺構Ⅲ期の青磁碗の主体を占めるのは、青碗蓮弁文碗Ｃ群であり、白磁皿はＣ群である。そして、これらに大量の染付１群が伴ない、Ⅲａ期より遅れて染付２群が伴なうようになる。この共伴関係はⅢｃ期まで変わらない。同じ時期の滋賀県観音寺城、小谷城をはじめ、16世紀後半の遺跡で似た状況が確認される。

一方、Ⅱ期の遺構では、量的な検討は不明だが、青磁蓮弁文碗Ｃ群、白磁皿Ｃ群、Ｂ群、染付１群が共伴しており、これまでの成果では、青磁蓮弁文碗Ｂ群と白磁皿Ｂ群を主体とする遺

物群は認められていない。ところで、Ⅱ期ないしⅢａ期の遺構では、より上層ではほとんど見ることのない遺物が若干出土する。先に述べた白磁皿Ｂ群もそのひとつであるが、青磁碗では、友ケ島沖遺物群にも確認される（西山要―1974「紀淡海峡海底採集の中国陶磁器」所収No.23〜27）もので、Ｃ群に比べて間隔の広い、頭の丸く描かれた蓮弁文をもつ例や、新巻本村出土例と同じ型式の灰釉皿、染付碗などである。これらは、いずれも量的に少なく、まとまって出土することはない。したがって、より古い時期の遺物の名残りがⅡ期ないしⅢａ期に残存しているものと考えられ、大略、この直前に、青磁蓮弁文碗Ｃ群、白磁皿Ｃ群への漸移が行なわれたと考えられる。

以上の見解を模式図にしたのがFig. 3である。

新巻本村出土遺物の年代

Fig. 3を参考にして、およそ新巻本村出土の遺物の年代を考えてみたい。新巻本村の資料は、青磁碗は蓮弁文碗Ｃ群、白磁皿はなく、染付皿は染付１群、また染付碗はこれまでの染付１群には含まれず、より古いと考えられ、Pre１群と仮称する御物城、友ケ島沖の染付碗に類似するものである。したがって、中国陶磁からは、友ケ島沖遺物群より若干新しく、一乗谷Ⅲａ期より古いという位置づけができる。一方、灰釉皿については、一乗谷での出土状況から15世紀後半と考えられ、常滑焼の甕もこれまでの常滑焼の編年の成果を借りれば、15世紀中〜後葉と言えるだろう。愛知県立陶磁資料館の井上喜久男氏の御教示によれば、この灰釉皿は窖窯期の最終段階の製品で、16世紀直前のものといわれる。

以上の年代観は、矛盾せず、およそ15世紀後半〜末の一括資料としてその価値が評価される。

染付 Pre１群について

先に述べたように、染付群の分類は、1979年の島根県立博物館での発表テーマであった。このテーマの延長の中で、年代的に染付１群より古い染付群が存在することを知った。ここでこの Pre １群の要点をまとめてみると、①青磁蓮弁文碗Ｂ群、Ｂ′群、白磁皿Ｂ群などに伴なう。②その年代は大略15世紀初〜後葉と推定される。したがって、時間的に元様式染付群と染付１群の間に位置づけられる。③器形は、碗では、染付１、２群に極く少ない端反り碗で、高台が比較的高く、ヘラ削りがしっかりしている。文様は、唐草文又は渦文風のものが多く、内面口縁下には、界線、四方襷文、雷文帯などをもち、見込には「福」「寿」字や「梅月文」が良く使われる。皿は不明である。④この観点で現在知る例を挙げると、新巻本村、友ケ島沖、和歌山県根来寺、沖縄県御物城、同座喜味城、大宰府第57次資料(？)、福井県一乗谷、同杣山城、青森県尻八館などである。⑤また、これらの特徴は、南京博物院1976「南京明故宮出土洪武時期瓷器」に見られる染付群の一部と共通点が多い。この文献に言われる「洪武」の年代をうけると上限がさらに14世紀後半にあがる可能性がある。

ところで、以上のような染付群を Pre １群と仮称したが、いくつかの問題が残る。そのひ

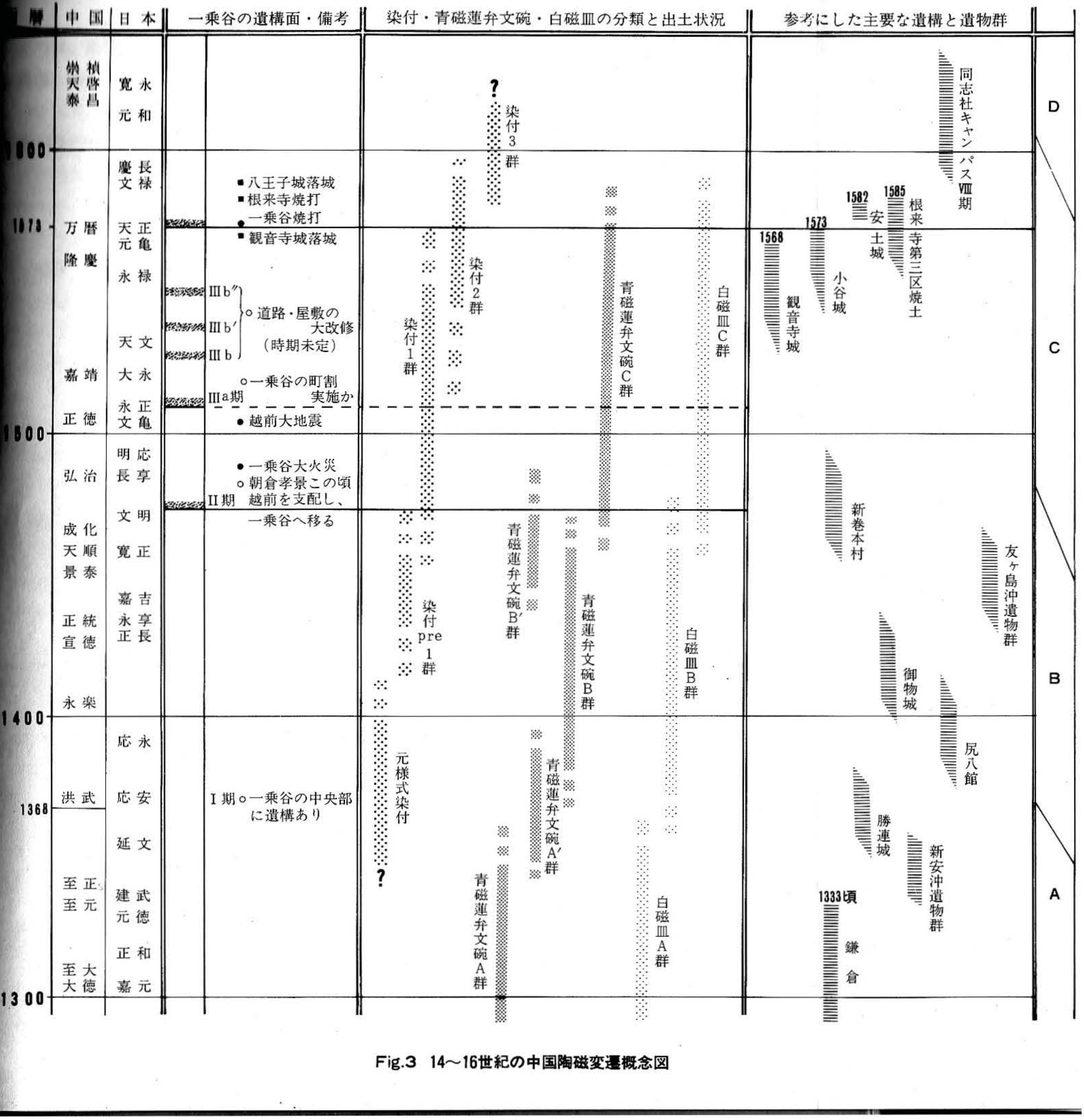


Fig.3 14～16世紀の中国陶磁変遷概念図

とつは、染付の中での碗、皿のセット関係である。小野1979に述べたように、染付における碗皿は、特定の器形と文様の組合せによって碗皿がセットで製作されている。この Pre 1群については、資料の少ないこともあって、これに対応する皿が知られない。したがって、新巻本村の資料の理解の仕方には、染付1群の古い段階に、Pre 1 群と仮称した端反りの碗のグループが存在し、これとセットの皿は、染付1群で、これが16世紀へ継続しているという考え方もできる。

もうひとつは、元様式の染付との関係であり、今後の大きなテーマとなるだろう。

染付・青磁・白磁の変化と画期

今回、新巻本村の資料をまとめる中で、時期を検討するメルクマールとして、染付、青磁、白磁から特徴的な碗、皿を用いて、中国陶磁のセット関係を模式化した。この作業を通じて、これら各器種の変遷がおおまかに一致し、全体として、いくつかの画期があることが認められる。その年代的な細部は、今後の資料の増加の中で検証され、再検討されることと思うが、筆者なりに現段階で示したのがFig. 3の最右欄のA～Dである。

これを概観すると、A～Bへの画期は、およそ14世紀中～後葉にあり、元末～明への過渡期と一致する。このB期は、「空白の15世紀」と近似し、日本では、沖縄を除く地域で中国製品が極端に減少し、実態の不明な時期である。逆に中継貿易を中心としていた琉球が最も盛んだった時期であり、この両者の優劣が次のC段階で逆転することを考えると、琉球の盛衰の意味がうかがわれる。B～Cへの画期は、15世紀中～後葉にあり、C期には、中国製の雑器が畿内を軸に大量に流通し、都市部や、戦国の城館などに全国規模で似た状況が見られる。一方、B期に続いて、その地位の低下した鎌倉や太宰府を中心とする北九州の状況がみられる。器種では、B期より加わったが、雑器としての大量使用のなかった染付群が急増していることが注意される。C～Dへの画期は、16世紀末にあり、雑器の中から青磁や白磁が減少し、次第に唐津や伊万里が出現し、染付も17世紀中葉をすぎるとほとんど伊万里に替わってしまうのである。

(1980.9)

鎌倉出土の中国陶磁器に関して

森　田　　　勉

Chinese Ceramics Found in Kamakura

Tsutomu Morita (Kyushu Historical Museum)

Kamakura abounded in things brought from abroad in the period of the Kamakura Shogunate, 1192-1333. Chinese ceramics are one of them. Ceramics which were collected along the seashore are well-known as 'Ceramics Found on the Kamakura Coast.' However, they are nothing but a collection, not an archaeological find in the strict sense of the word. The recent excavation research and the materials gleaned from relics and strata have made a great contribution to the chronological study. Those ceramics found at each site of Kamakura have a large variety of qualities and quantities.

We examined the ceramics, mostly Chinese ones, excavated from the Tsurugaoka-hachimangū keidai (precinct) site, the Ninotori'i-nishi site and the Kōmyōji-ura site. The author compares them with those from the Dazaifu or Hakata districts which boast of their large quantity, and argues as follows: In Kamakura.

1. Celadon: There are a great many Lung-chüan celadon type.Ⅲ——bowls, small bowls and small dishes; they are more than Lung-chüan celadon type.I.

2. White porcelain: There are bowls, small cups and dishes. Dish-type Ⅸ account for close to 90 per cent of all the dishes. There are a very few dishes with applied flower design. It should be noted that at three sites of Kamakura was excavated no dish type.Ⅷ-2b of the early 13th century, which the northern part of Kyushu has in a small quantity.

3. Ch'ing pai: A large number of Mei p'ing are excavated, and most of the Koryo ware found in Kamakura are in the shape of Mei p'ing. Accordingly it can be concluded that many people in Kamakura liked the shape of Mei p'ing in those days.

4. Polychrome ware: The number of basins of two or three-color glaze cannot fall short of that of Mei p'ing.

5. Black glaze ware: Very few Ten'moku bowls, which were imported in a small number after the middle of 13th century, are excavated.

As mentioned above, a great number of Chinese ceramics were brought to Kamakura from the end of the 12th century up to the early 14th century. Therefore Chinese ceramics of before the 12th century and of the first half of

the 14th century can be selected by excluding those of the late 12th-the early 14th century and making a comparison with those from other districts. It is possible to say that white porcelain bowl-type. II, white porcelain dish-type. V and VI were imported before the end of the 12th century. As for Lung-chüan celadon of the first half of the 14th century, bowls-type. II, bowls with everted and thickened mouth rim and bowls with flower appliqué on the inside of the bottom —— these types of celadon bowls are selected in the light of Chinese ceramics found at the Dazaifu pond-shaped site SX1200 which has an accompaniment of a wooden plate inscribed '元徳2年 (1330).'

The finds of Kamakura are very important, not only because of their good quality but also because they serve to identify Chinese ceramics of before the 12th century and the first half of the 14th century.

はじめに

鎌倉出土の中国陶磁に関する調査を、1980年9月20日から22日の3日間にわたり、鶴岡八幡宮境内第1～3次調査、二鳥居西遺跡（日生ビル）および光明寺裏遺跡出土品を主たる対象として実施した。

ここでは、それらの遺跡から出土した陶磁器の紹介とその特徴を概述し、また、調査の成果と今後の課題について、若干の私見を述べることにする。

なお、本文中の中国陶磁器の分類(別図)は、横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について―型式分類と編年を中心として―」『九州歴史資料館研究論集4』1978 による。

I　各遺跡出土品の紹介

(1)　鶴岡八幡宮境内遺跡（第1～3次調査）

発掘調査は1979年4～8月にかけて現鎌倉考古学研究所によって実施された。

出土品としては、龍泉窯系青磁、同安窯系青磁、宋・元代の白磁、青白磁、緑釉陶器および高麗陶磁等がある。

青磁　龍泉窯系青磁がもっとも多く、同安窯系青磁は僅かで、碗の破片が2点（PL. 1―1）出土しているだけである。

龍泉窯系青磁では内面に草花文を有する碗Ⅰ―2類（PL. 1―1）や飛雲文を有する碗Ⅰ―4類（PL. 1―1）等は少く、外面に蓮弁文を有する碗Ⅰ―5類（PL. 1―2）や器面全体を厚く施釉し、高台先端部を露胎とした碗Ⅲ類（PL. 1―3）が多い。

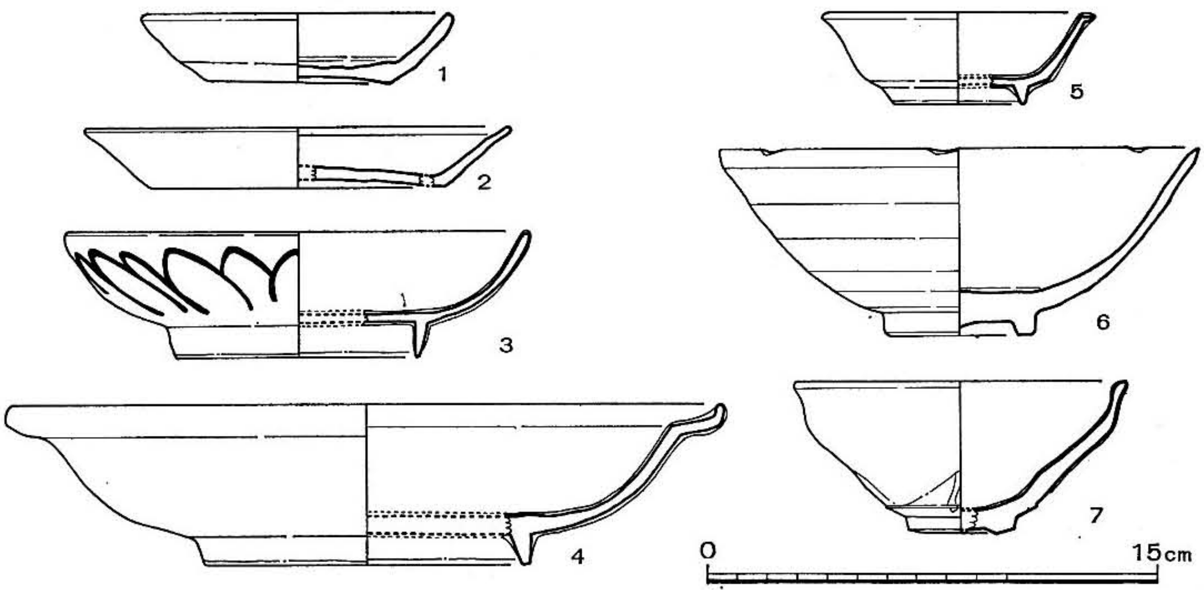


Fig. 1　二鳥居西遺跡出土の陶磁器実測図（1・2白磁、3～6青磁、7黒釉陶器）

二鳥居西遺跡出土陶磁器観察表

		器種	口径	器高	底径（高台径）	釉	貫入	胎土	備考
1	白磁	皿	10.3	2.3	6.0	乳白色	内面にわずかに入っている	灰色	外底露胎部分は淡赤茶色を呈する。また、この部分は回転ヘラ削りした後に、周縁部を板の小口面(?)を使って静止ヘラ削りしている。（PL．3—17）
2	白磁	皿	(14.1)	2.0	(9.7)	淡黄乳白色および白色	内外面ともに細い貫入を多く伴う	白色	口縁部を露胎とする。外底の釉は周縁部までで、他は露胎としている。（PL．3—16）
3	青磁	皿	15.4	4.2	7.9	若干緑味をおびた深青色	内外面ともに大きな貫入が多い	暗灰色	高台先端部とその周辺部を露胎とする。外面の蓮弁文は型造りの後にヘラで削り出しているが、厚い釉のため不鮮明である。高台先端部および外底見込み部分は赤茶色の斑点を伴う。（PL．2—10）
4	青磁	盤	23.5	5.2	10.8	暗緑色	内外面ともに多い	灰白色	高台先端部とその周辺部を露胎とし、その部分は暗褐色を呈する。（PL．2—9）
5	青磁	杯	9.0	3.0	4.3	暗緑黄色	なし	暗灰色	高台先端部とその周辺部を露胎とし、その部分は暗褐色を呈する。（PL．2—8）
6	青磁	碗	15.9	6.2	5.0	暗緑色	若干伴っている	灰黒色	高台畳付と高台見込み部分は露胎。口縁部の切り込みは6個所である。(PL．2—12)
7	黒釉陶器	碗	11.0	5.0	3.5	黒色	なし	灰黒色	釉面に油滴状の斑点を多く伴う。高台畳付部分に粘土による目跡が残っている。（PL．3—18）

白磁　口縁部を露胎とした碗・皿のⅨ類が全体の９割近くを占める。

青白磁　梅瓶、印花文を有する合子・小壷（ＰＬ．１－４）等が出土している。梅瓶類の占める割合が目立つ。

緑釉陶器　盤、鉢類がある。いずれも口縁部は肥厚し、丸味を有する（ＰＬ．１－５）。

高麗陶磁　葡萄唐草文を白土と赤土により象嵌した梅瓶が１点ある（ＰＬ．１－６）。

以上、概述した陶磁器は13世紀を中心としているが、一部12世紀末ならびに14世紀初頭と推察されるものも含まれている。

⑵　二鳥居西遺跡

1977年９～11月にかけて調査され、そこから出土したものは一般に日生ビル出土品として周知されている。遺跡は鎌倉市小町に所在し、現在ユニオン鎌倉店がある。

出土品としては、龍泉窯系青磁、同安窯系青磁、宋・元代の白磁、青白磁、三彩陶器、黄釉陶器、黒釉陶器等がある。

青磁　龍泉窯系青磁が同安窯系青磁を圧倒的に凌駕する。

龍泉窯系青磁は碗Ⅰ－５類（ＰＬ．２－７）、杯・盤・皿Ⅲ類（ＰＬ．２－８～10、Fig.1 ③～⑤）の占める割合が多く、碗Ⅰ－２・４類（ＰＬ．２―11）や皿Ⅰ類（ＰＬ．２―11）は少い。

同安窯系青磁は碗・皿Ⅰ類が大部分で、外面を片切彫風に条線を入れる碗Ⅲ類は僅に１点（Ⅲ－１・ｂ類）出土しているだけである（ＰＬ．３―13）。

白磁　碗Ⅳ・Ⅴ・Ⅷ類（ＰＬ．３―14）は少く、碗・皿Ⅸ類が９割前後を占める。また、内面に型押しによる浮文を描いた皿（ＰＬ．３―15）が数点ある。さらに、注目される資料としては口縁部を露胎とする点はⅨ類と同一であるが、それとは釉調、施釉方法、胎土が相違する皿（ＰＬ．３―16、Fig.1②）がある。

青白磁　碗・皿・小壷・合子・梅瓶（ＰＬ．４―19）、水注（ＰＬ．４―20・21）がある。特に水注２点は全形が知れる貴重な資料であり、ＰＬ．17―14は注口部に龍頭が貼付された類例の少いものである。

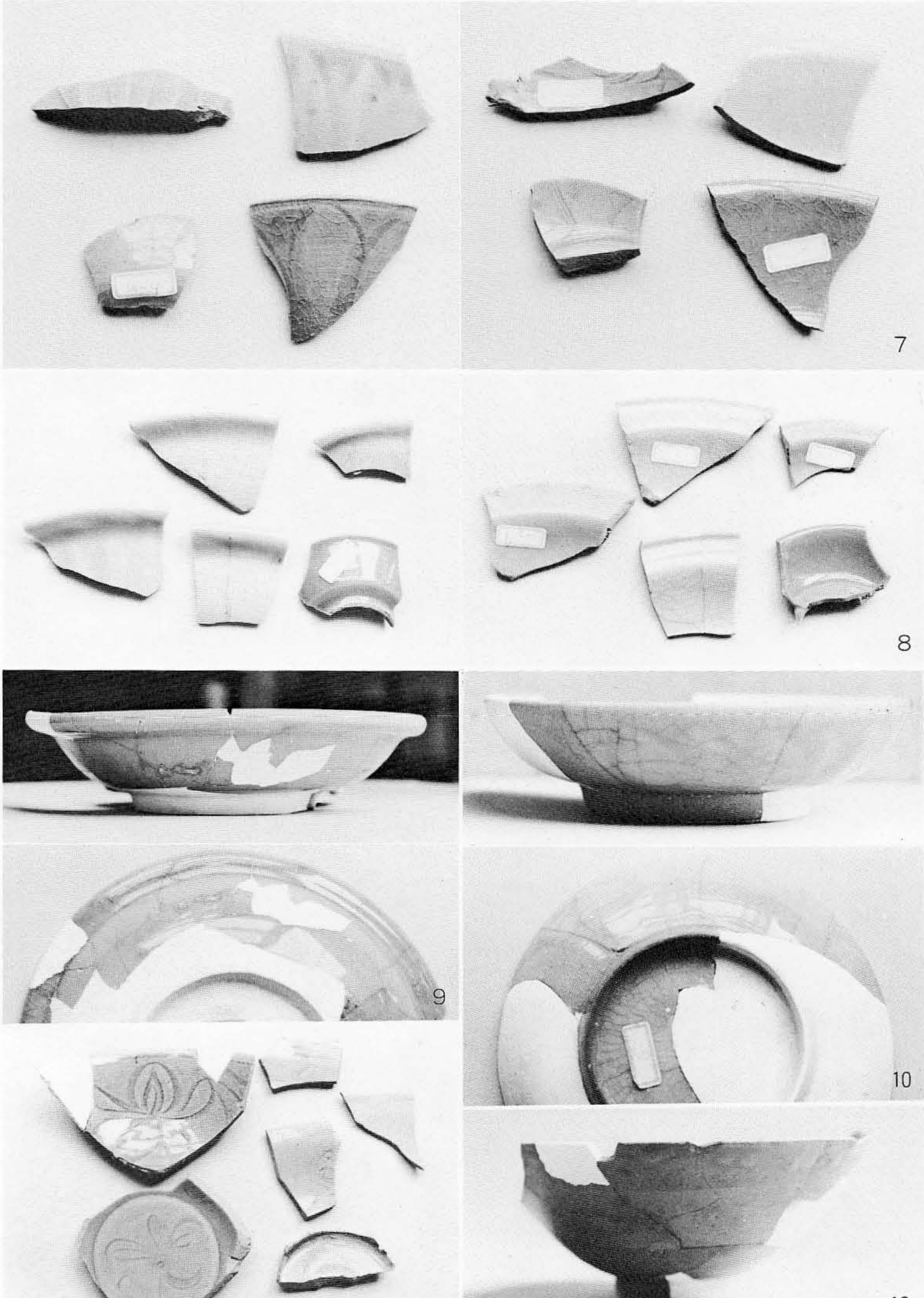
三彩陶器　内彎する体部と丸く肥厚する口縁部とからなる盤で、陰刻により内面に文様を描き三彩釉を施している。釉は一部銀化している（ＰＬ．４―22）。

黄釉陶器　盤・壷がある（ＰＬ．４―23）。盤は内彎する体部と断面四角形を呈する口縁部とからなり、内面には鉄絵がある。

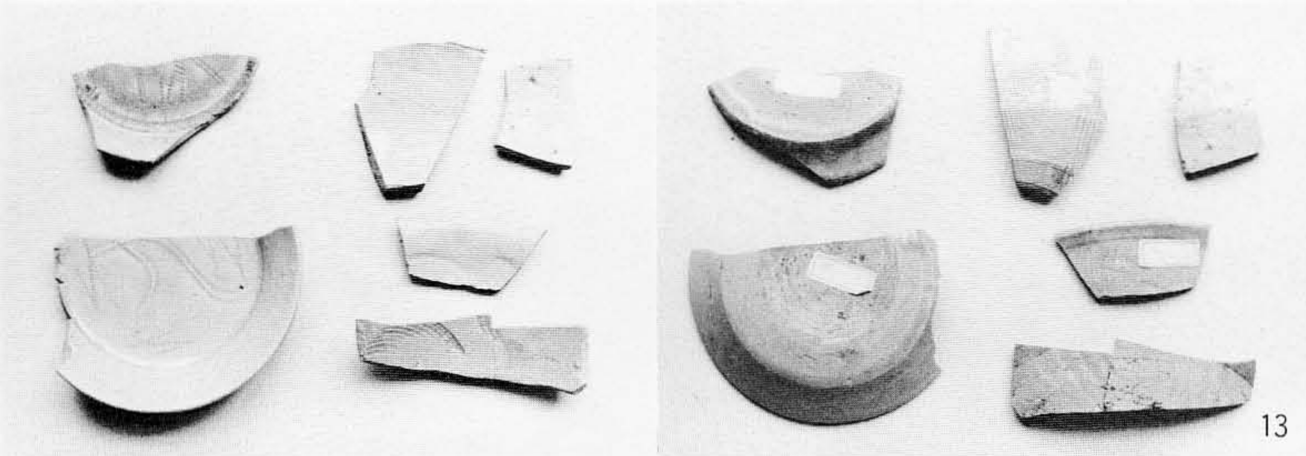
黒釉陶器　碗（ＰＬ．３―18、Fig.1⑦）、合子（ＰＬ．４―19）がそれぞれ１点ある。碗は灰黒色の胎に黒色の釉が厚く施され、また、釉面には油滴状の斑点が一面に認められる。低い高台と、体部上位で大きく屈曲し、口縁部を外反させる形状および体部最下位を強くヘラ削りし、面を成する特徴とこれらの器型が一般的に我国へ輸入される時期を考え合わせると、この碗は宋末から元代にかけてのものと考えられる。

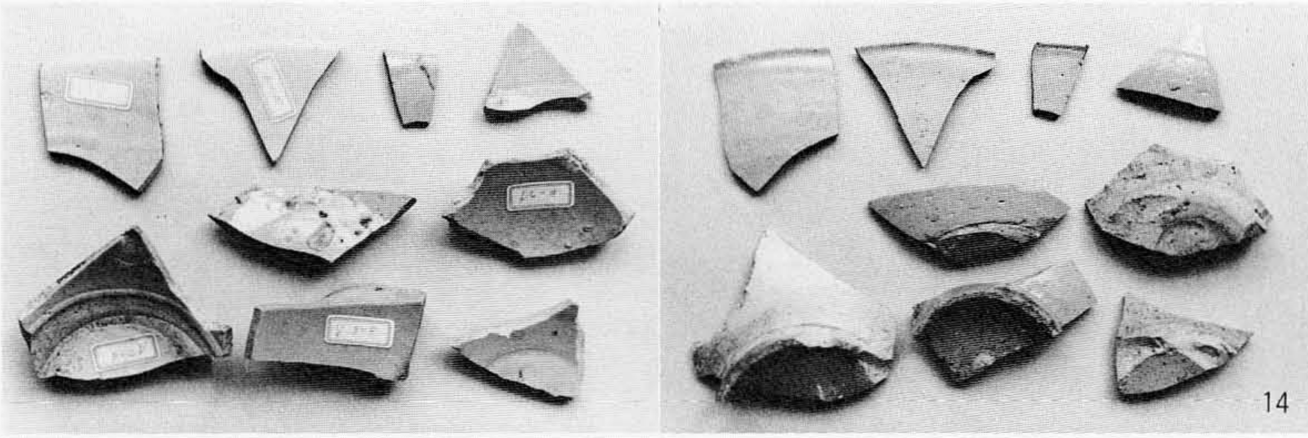


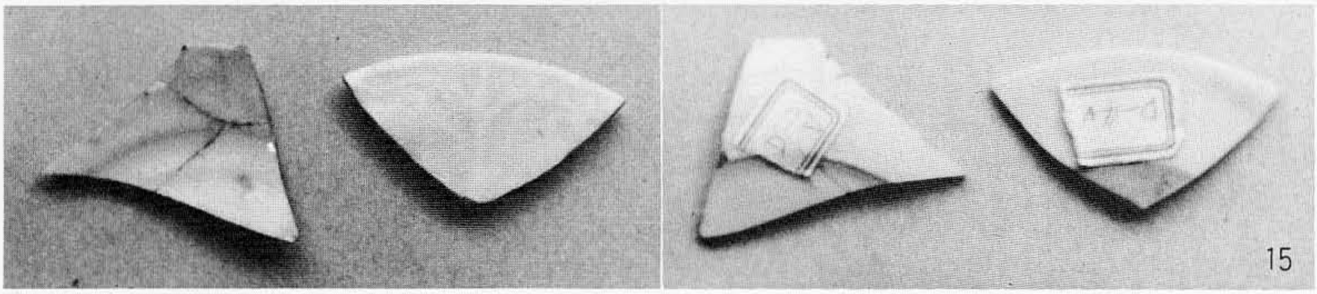
PL. 1　鶴岡八幡宮境内遺跡出土の陶磁器

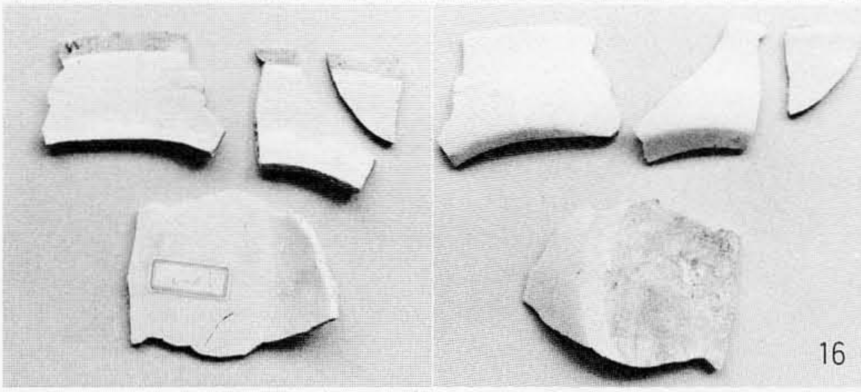


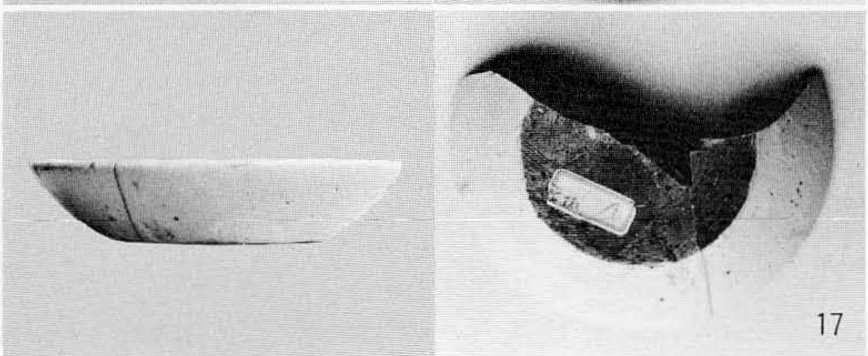
PL.2　二鳥居西遺跡出土の中国陶磁器（Ⅰ）


13


14

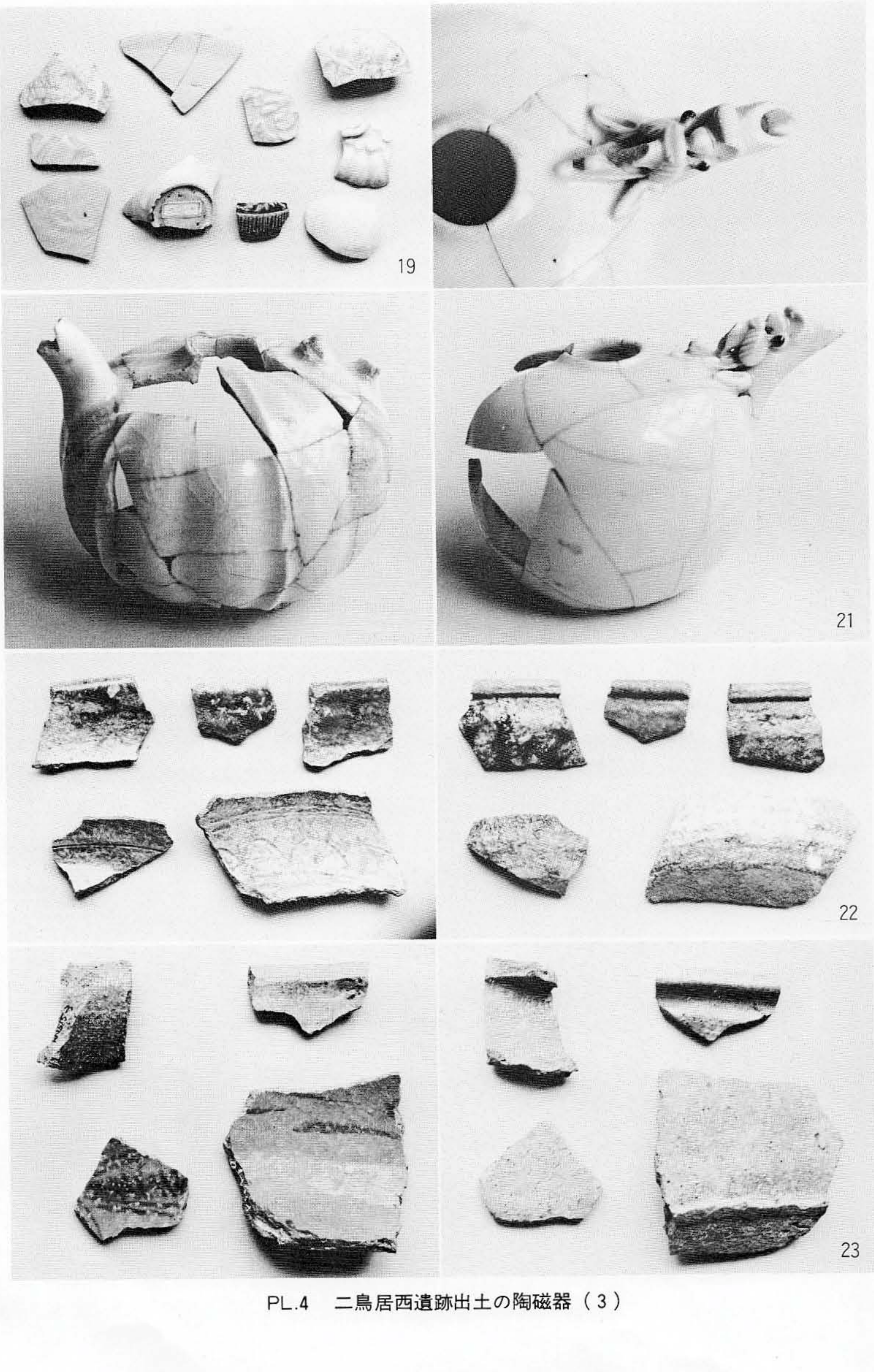

15


16


17


18

PL.3　二鳥居西遺跡出土の陶磁器（２）



PL.4　二鳥居西遺跡出土の陶磁器（３）

(3) 光明寺裏遺跡

1978年３～４月に第１次調査、1978年11月～1979年１月に第２次調査を北区鎌倉学園用地内遺跡発掘調査団が実施している。遺構は上・下２面にわたって存し、特に下層遺構から遺物がまとまって出土している。そこで、今回はこの下層遺構出土の中国陶磁器を調査対象とした。地番は鎌倉市材木座大字門前846番地（現材木座６—18）である。

なお、本遺跡については既に報告書（『光明寺裏遺跡』1980 北区鎌倉学園遺跡発掘調査団・東京都北区教育委員会）が刊行されているので、くわしくはそれを参照されたい。そこで、ここでは出土遺物の特徴のみを記すことにする。

青磁　龍泉窯系青磁碗Ｉ—２類、同安窯系青磁碗・皿が出土しているが極めて少く、龍泉窯系青磁碗Ｉ—５類、碗・杯・皿Ⅲ類が圧倒的に多い。また、１点だけではあるが、口縁部を外反させる龍泉窯系青磁無文碗（前述報告書第６図青磁(2)—13）が出土しており、この下層遺構の下限を考えるうえで重要な資料となる。

白磁　印花文を有する皿（徳化窯？）、口縁端部を外反・肥厚させる皿（前述報告書８図白磁(1)—32)、二鳥居遺跡出土と同種の口禿げの皿（ＰＬ３—16、Fig.1②）および水注以外は全てⅨ類の碗・皿類である。

その他、青白磁、黄釉陶器、緑釉陶器、二彩陶器、褐釉陶器が出土している。

以上、下層遺構出土の中国陶磁器は、鶴岡八幡宮境内遺跡・二鳥居西遺跡出土品と相違した特徴が看られる。まず、青磁では龍泉窯系青磁碗Ｉ—２・４類、同安窯系青磁碗・皿が前２遺跡に比して少いこと、次に、白磁では碗Ⅳ・Ｖ・Ⅷ類が出土していないことを指摘できる。このことから、本遺跡は前２遺跡よりも遅れて開始されたことが知れる。大宰府では、白磁碗・皿Ⅸ類および龍泉窯系青磁碗・杯・皿Ⅲ類は13世紀中頃以降の遺構から出土することから、この下層遺構の上限は13世紀中頃と考えられ、また下限は口縁部を外反させる龍泉窯系無文碗の出土および龍泉窯系碗Ⅱ類が出土していないことから14世紀中頃を接点とした時期とすることができる。

Ⅱ　北部九州出土の中国陶磁器との比較

我国でもも多く中国陶磁器が出土する地域は北部九州で、その中でも特に、太宰府、博多地域に集中している。そこで、鎌倉と太宰府・博多の両地域から出土する陶磁器とを比較し、共通する点や相違する点を検討し、鎌倉出土陶磁器の特徴を抽出し、要約してみよう。

周知のように、古代の大宰府は西海道を支配し、政治、軍事、外交・貿易の３つの大きな機能を有していた。特に、我国唯一の外交・貿易の門戸としての博多津を有していた為、大宰府や博多地域では、若干質的な相違はあるが、往時の京である京都とともに、唐・五代の白磁や

越州窯系の青磁が数多く出土している。その後中世にいたっても博多は「宋人百堂」といわれたように外国貿易の港として栄え、また大宰府も観世音寺、安楽寺、横岳崇福寺等の門前町的な集落が形成され、宋・元代の中国陶磁器がさかんに消費され、それらの一部が今日発掘調査によって検出されている。

このような関係から太宰府・博多出土の中国陶磁器は量・種類ともに極めて豊富で、鎌倉出土のものは全てといってよい程揃って出土している。しかし、各時期における中国陶磁のセット関係や比率をみると両地域間に相違点を見い出すことができる。

鎌倉では

1．青磁　龍泉窯系青磁碗・小碗・杯Ⅲ類が非常に多く、Ⅰ類を凌駕しようとしている程である。

2．白磁　碗・杯・皿Ⅸ類が白磁全体の9割近くを占め、浮文を有するものを除くと、Ⅸ類は、白磁のほとんどといってよい程である。また、北部九州において、13世紀代、特にその前半代に少数ではあるが各遺跡から出土している皿Ⅷ－2・b類が今回調査した3遺跡から出土していないことも特徴の一つである。

3．青白磁　梅瓶の出土量が多い。これは出土高麗陶磁のほとんどが梅瓶類であることを考え合わせると、梅瓶類に対する嗜好性の強さをうかがい知ることができる。

4．多彩釉陶器　二彩・三彩の盤の出土比率が、梅瓶と同様に高い。

5．黒釉陶器　13世紀中頃以降少数ではあるが輸入されたいわゆる天目茶碗の出土量が非常に少い。

Ⅲ　問題点と編年上の成果

鎌倉出土の中国陶磁器は、12世紀末頃から14世紀前半までのものを主体とし、なかでも砧手といわれている青磁、印花文を有する白磁皿、青白磁の梅瓶等質的に高いものを数多く出土している。しかし、約150年間にわたり使用された中国陶磁器の時代細分が未だ充分に把握できていない。それは何よりも、土壙や井戸等から出土する一括資料に十分に恵まれていないこと。また、市内各地で調査されている遺跡相互の検討、たとえば各層位の対比がいま一つ明確ではなく、そのため、層位出土の中国陶磁器を編年的に位置付ける作業を困難にしている。

しかし、前節で述べたように大宰府や博多地域は長期にわたり中国陶磁器が輸入・使用されているため、陶磁器の性質上、伝世し、古期のものが新しい時期まで残存し、その後投棄される割合は低くはなく、純粋なセット関係を把握するにはある程度の限界を有している。ところが、鎌倉出土の中国陶磁器は12世紀末から14世紀前半代に限られた時期のものが大部分であるため、他地域での出土品と比較することはより、12世紀以前および14世紀中頃を接点とする中

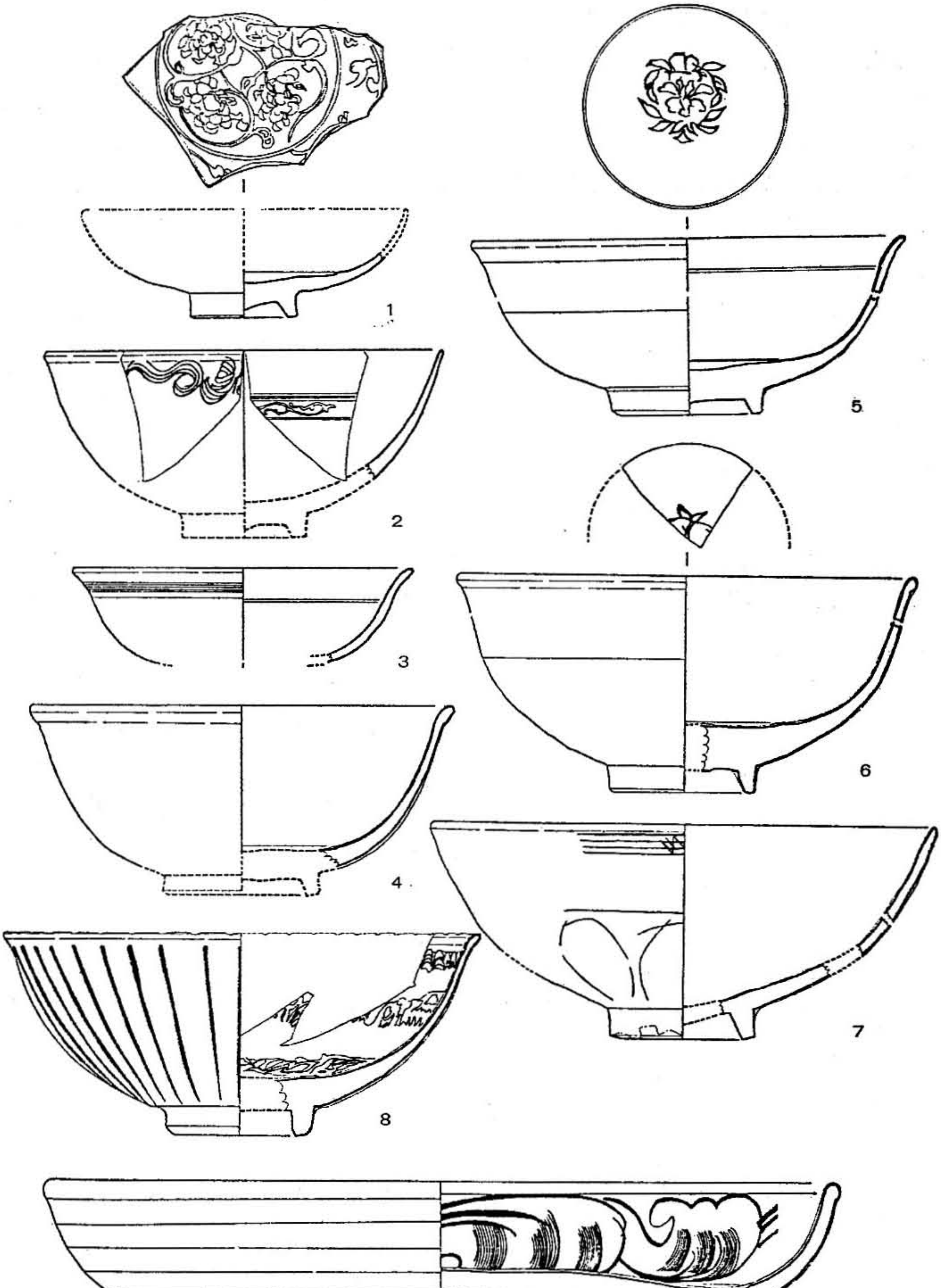


Fig. 2　推定金光寺跡出土の14世紀中頃の中国陶磁器（1.2白磁、3～9青磁）

国陶磁器を抽出することが可能である。

まず、12世紀後半以前のものとして、白磁が顕著にその特徴を表わしている。つまり、11世紀中頃から12世紀中頃にかけて多量に輸入された碗Ⅱ類、皿Ⅴ・Ⅵ類は1片も出土していない。この事実は消極的であるが、碗Ⅱ類、皿Ⅴ・Ⅵ類の編年上の位置付けの正しさを裏付けているものとすることができるし、また、12世紀末には既にそれらの白磁が我国へ輸入されていない可能性が強く出て来たといえよう。青磁は、二鳥居西遺跡の発掘調査の成果をみると、龍泉窯系青磁碗Ⅰ—2・4類、皿Ⅰ類、同安窯系青磁碗・皿は下層からまとまって出土し、上層からはあまり出土しないとのことであり、これらの陶磁器が12世紀後半から13世紀前半にその使用年代を求めることができる。この出土状況もまた大宰府編年とは矛盾しない事実といえよう。

次に14世紀中頃に位置付けられる陶磁器を大宰府史跡ＳＸ1200出土品との比較で検討してみる。ＳＸ1200出土の中国陶磁については『大宰府史跡—昭和52年度発掘調査概報—』1978九州歴史資料館に報告しているので、それを参照されたい。このＳＸ 1200からは「元□(徳カ)二年（1330)」銘を有する卒塔婆が出土し、それと共伴した土師器は大宰府編年によると14世紀前後と14世紀中頃に位置付けられる。そこで、この遺構から出土した中国陶磁器もその幅の中で考えられてきた。しかし、今回の鎌倉出土品の調査により、ＳＸ1200出土品の一部、特に龍泉窯系青磁が14世紀中頃のものとすることができるようになった。今回調査した遺跡出土の龍泉窯系青磁のなかで、器体全面に施釉した後に底部裏を環状に釉をカキ取り、その部分に焼台を置く碗Ⅱ類、無文の碗で口縁部を丸く肥厚させるタイプ(Fig. 2⑥)、内面に浮文からなる印花文を有するタイプ(Fig. 2⑧)のものは出土していない。また、口縁部を外反する無文の碗は光明寺裏遺跡でわずかに1点出土しているだけである。この事実から、これらの中国陶磁器はＳＸ1200新つまり、14世紀中頃前後に位置付けることができる。(Fig. 2参照)

以上、今回3日間という短い調査期間であったが、鎌倉出土の12世紀末から14世紀前半代の中国陶磁器を調査する過程で龍泉窯系青磁は他地域と比して、質的に高いものの比率が高いこと、また、12世紀末以前それと14世紀中頃を上限とする陶磁器の様相を知る手掛りを得たことは、大きな成果であった。

調　査　者　　青柳洋治・森田勉

調査協力者　　鎌倉考古学研究所　　大三輪龍彦　手塚直樹

　　　　　　　鎌倉市教育委員会　　玉林美男

龍泉窯系青磁

		1	2		3	4			
			a	b		a	b	a	
椀	Ⅰ								
	Ⅱ								
	Ⅲ								

龍泉窯系青磁

		1		2		3	4	備　考
		a	b	a	b			
小椀	Ⅰ							1・aは輪花のないもの。
	Ⅱ							
	Ⅲ							1・aは輪花のないもの。 2・aは内面見込みに文様がないもの。

龍泉窯系青磁

		1		2
		a	b	
杯	Ⅰ			
	Ⅱ			
	Ⅲ			

同安窯系青磁

		1			2	備　考
		a	b	c		
椀	Ⅰ					
	Ⅱ					Ⅲ類の形態で内外無文のもの。
	Ⅲ					1・aは内面無文のもの。
	Ⅳ					
小椀						

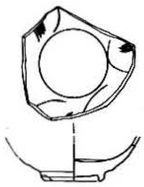
同安窯系青磁

		1		2	
		a	b	a	
皿	Ⅰ				
	Ⅱ				
	Ⅲ				

越州窯系青磁

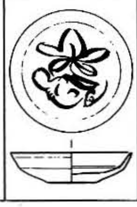
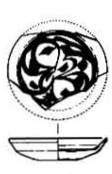
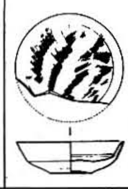
		1		
			a	b
椀	Ⅰ			
	Ⅱ			
杯				
皿				

別図　青磁分類図

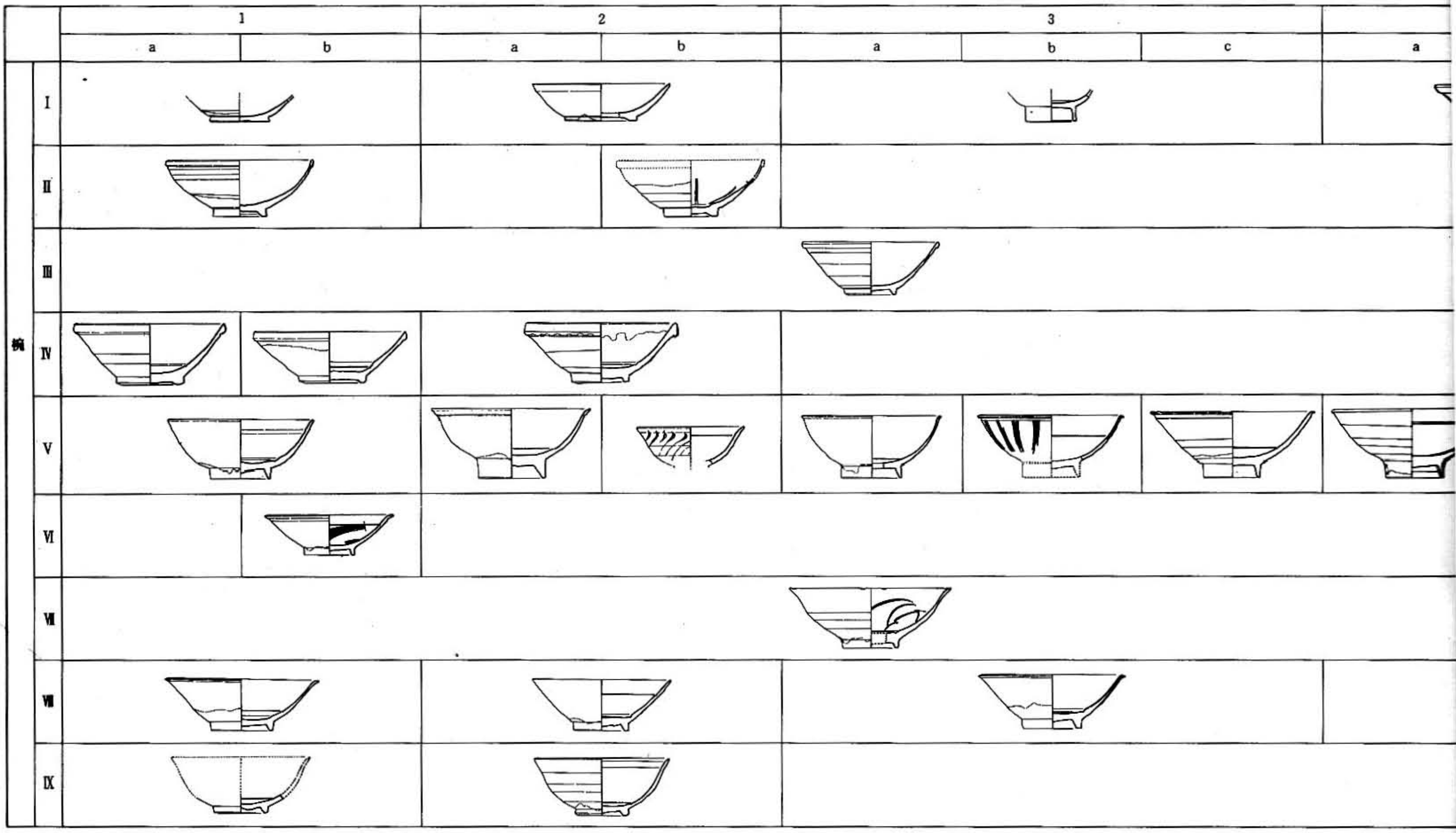
	6		7	備　考
d	a	b		
				5・dは内面見込みに文字をスタンプするもの
				1は内外無文のもの。

4	5	備　考
b		
		4・aは内面見込みに文様がないもの。

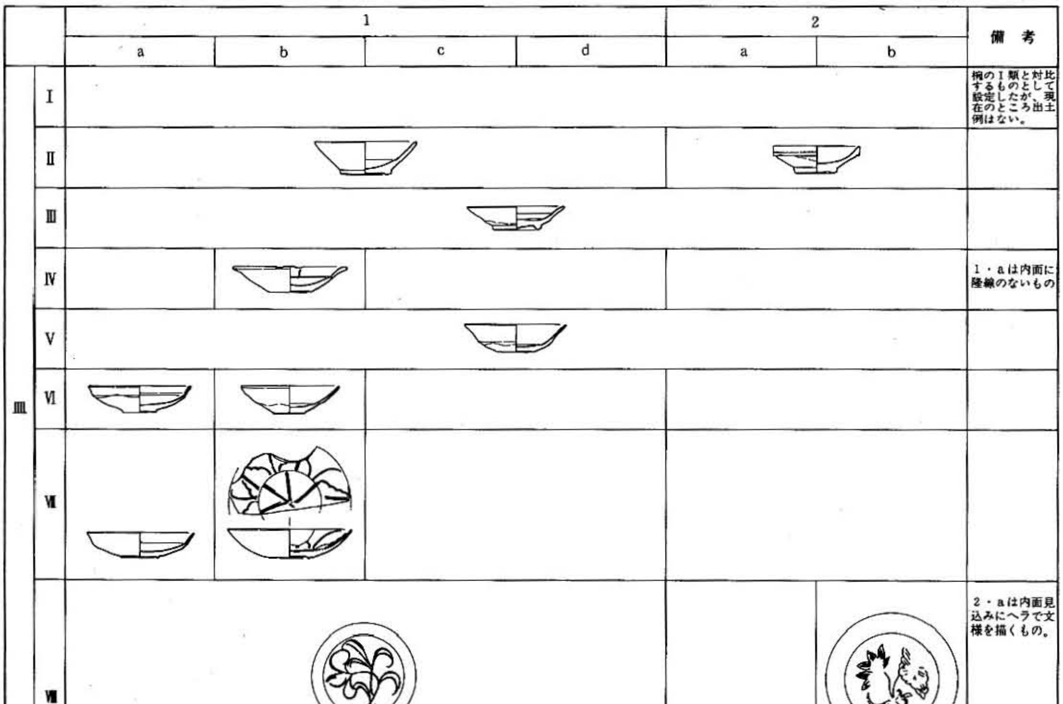
龍泉窯系青磁

		1		2			3		備　考
		a	b	a	b	c	a	b	
皿	I								1・a、2・a、3・aは内面見込みに文様がないもの。

		3	備　考
d	e		
			

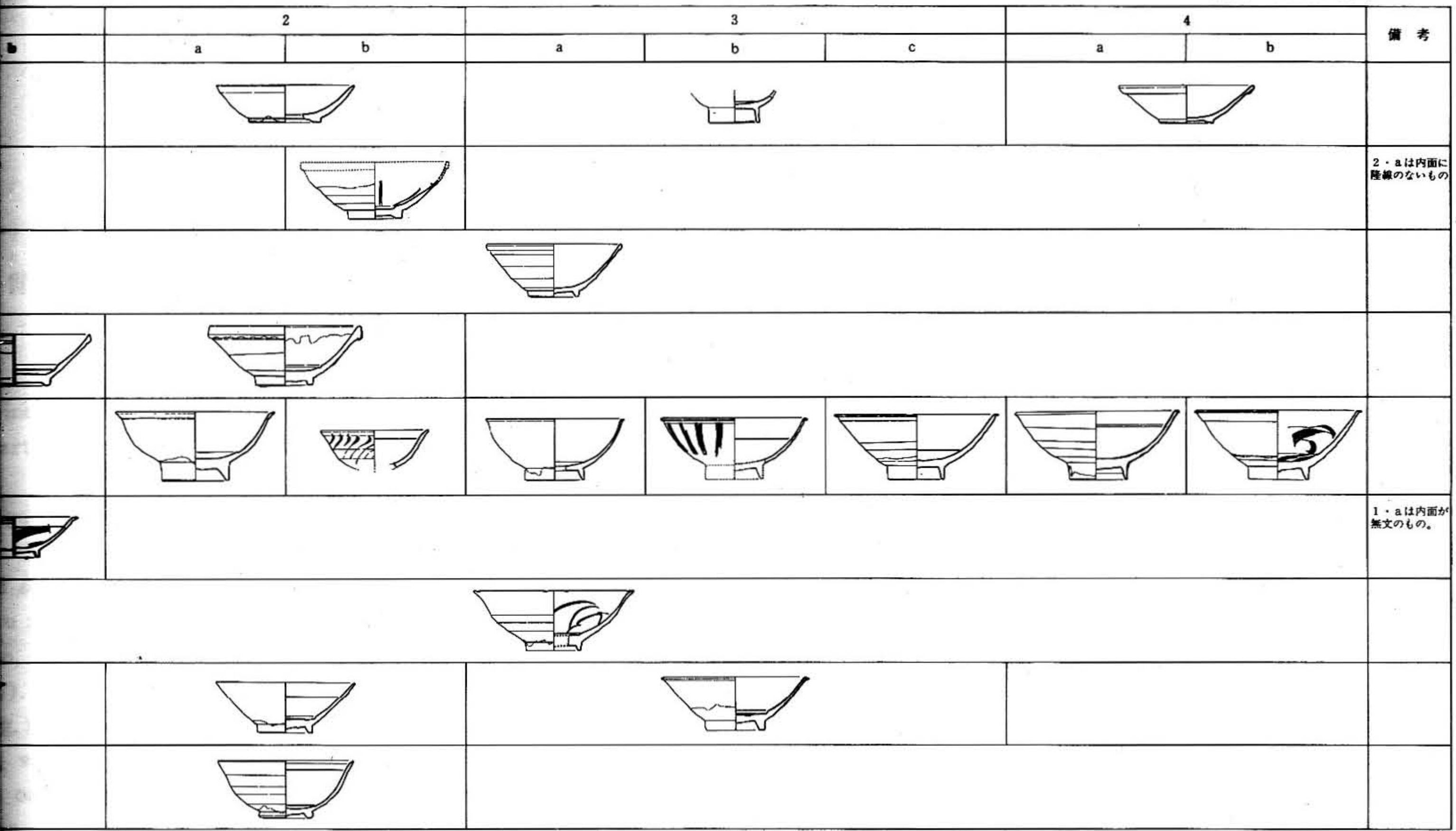


椀
1
2
3
a
b
a
b
a
b
c
a
I
II
III
IV
V
VI
VII
VIII
IX

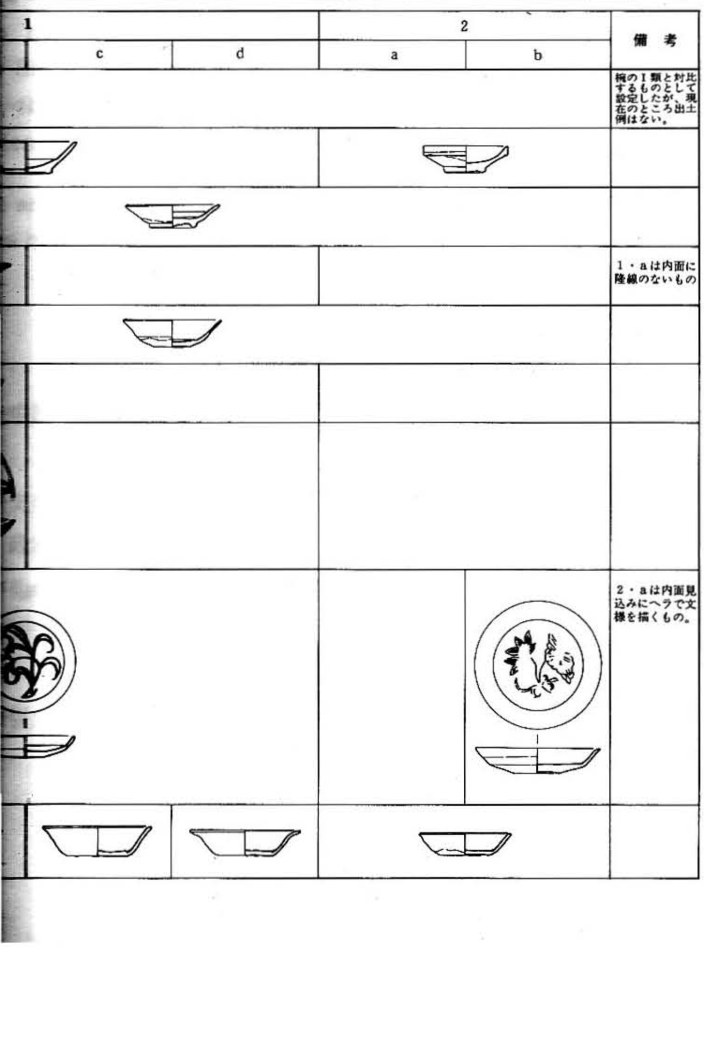


皿
1
2
備考
a
b
c
d
a
b
I
II
III
IV
V
VI
VII
VIII
IX
椀のI類と対比するものとして設定したが、現在のところ出土例はない。
1・aは内面に隆線のないもの
2・aは内面見込みにヘラで文様を描くもの。

別図　白磁分類図



2
3
4
備　考
b
a
b
a
b
c
a
b
2・aは内面に隆線のないもの
1・aは内面が無文のもの。



1
2
備　考
c
d
a
b
碗のⅠ類と対比するものとして設定したが、現在のところ出土例はない。
1・aは内面に隆線のないもの
2・aは内面見込みにヘラで文様を描くもの。
1

青森・北海道の中国陶磁

——青森・尻八館出土の中国陶磁を中心にして——

三上　次男・岩本　義雄・佐々木達夫

Chinese Ceramics in Aomori and Hokkaido Prefs.

——Particularly at the Shirihachitate site, Aomori Pref.

Excavation began in 1977 at the Shirihachitate site, Aomori Pref. So far, 121 Chinese ceramics are discovered.* Some of them are celadon, numbering into 56 pieces and some are white porcelain, 53 pieces. There are a few other pieces of Tenmoku and blue-and-white.

As for celadon, there are incense burners (Fig. 1-1, 2, 3), jars (Fig. 4) and basins (Fig. 5, 6, 7). Scroll dcsign is carved with a spatula and peony design is applied on the Fig. 1 incense burner. Fig. 4 jar is a so-called "酒会壷" and on its cover peony & scroll design is incised. They are of good quality and such pieces are rare in other parts of Japan. As for white porcelain, small dishes and small cups are large in number. Judging from their appearance, they can be dated back to the 14th or the 15th century. Three blue-and-white are found here at the Shirihachitate site and they are the products of the 15th century. We may, therefore, conclude that the Shirihachi clan prospered in the 14th or the 15th century.

*Actually all are shards and being put together, they are equivalent to 121 pieces of ware.

(T. Sasaki is responsible.)

1　尻八館出土中国陶磁の意義

東北地方は日本の歴史の中で重要な地域の一つであるにもかかわらず、文献史学の上では中世以前の住民の性格、政治の動態、社会の実態や経済の実情、それに文化の形態などの点について知られるところが他の地域にくらべて少ない。このような状態は時代を溯れば溯るほど、あるいは地域が北方に傾けば傾くほどその度合を増してくる。津軽半島地方などはとくにその傾向が著しい。

その理由の一つは津軽地方に信頼するに足る文献の残存が少なく、残存状況も偏っているた

めである。実際には、この地方の豪族と呼ばれるほどのものは、時の政治や経済の動きに関与してたえずこの地方の歴史をゆさぶり、一般の住民はさまざまの生産や流通に従ってこの地方の社会や文化の基礎をつくっていたのであり、こうした営みが積み重なってこの地方の歴史がつくられていったのである。

このようにはげしい歴史的な営みが続いているにも拘らず、文献史学で充分に解明ができないとすれば、他の方法によらなければならないが、考古学はそれの解明のための一つの重要な方法である。津軽地方には古代・中世の住民が社会生活を営んだ跡である遺跡も多く、発見された遺跡や遺物を通じて生産や流通の経済史、生活の文化史、社会史などの地域の歴史を再現することもできるはずである。津軽地方の中世の遺跡の中でも、1977年から1979年にかけて3年にわたり発掘調査された尻八館遺跡はとくに重要な研究資料を提供している。遺跡からは数多くの遺物が出土しているが、そのうちでも注目すべきは13世紀から15世紀に至る多くの中国陶磁である。この時代の東北地方全体からみても、尻八館遺跡出土の中国陶磁は研究資料として高い地位を与えることができるであろう。

2　尻八館遺跡出土の中国陶磁

出土した数百片の中国陶磁は、発掘調査員の一人、大橋康二氏の個体分類の努力によって、121個体と推定されている。それらの中には青磁、白磁、染付、黒磁（天目）、黒褐磁が含まれている。

青磁は出土量の半数に近い56個体と推定される。種類は香炉（Fig. 1－1・2・3）、広口壷（4）、盤（5・6・7）、小鉢（8）、碗（9・10・11・12・13・14）、皿（15・16）である。Fig. 1－1（PL. 1－1）の大香炉は淡灰白色の素地で、外面には上下の刻線の間に蔓を箆彫りし、次いで牡丹文と葉を貼りつけている。粉青色の釉をかけた浮牡丹香炉である。Fig. 1－4（PL. 1－2・3）の広口壷は淡灰白色の素地で黒色粒を多く含んでいる。外面は胴部を刻線によって上下に区画し、上部には牡丹文を浮彫りし、下部には蓮弁鎬文を陽刻している。蓋の上面には牡丹唐草文が陽刻されている。いわゆる酒会壷である。Fig. 1－9（PL. 1－4）は無文の碗である。素地は灰白色ないし白褐色であり、外面にはろくろ成形痕が残り、高台部分は無釉である。Fig. 1－11（PL. 1－5）は蓮弁文の碗である。外面に刻線による蓮弁が描かれ、同類の碗では見込には草花の押型文のある破片もある。素地は黒色微粒を含む灰色の精良土である。Fig. 1－13（PL. 1－7）は蓮弁文の碗である。外面に蓮弁文を刻み、見込には蓮文が押印されている。素地は灰色である。Fig. 1－14 は雷文の碗である。外側に雷文と刻線文があり、内面にも全体に彫文様が見られる。高台内は無釉である。Fig. 1－15は蓮弁文の皿である。外側面に箆彫り蓮弁文があり、見込中央には印文があるが不明瞭であ

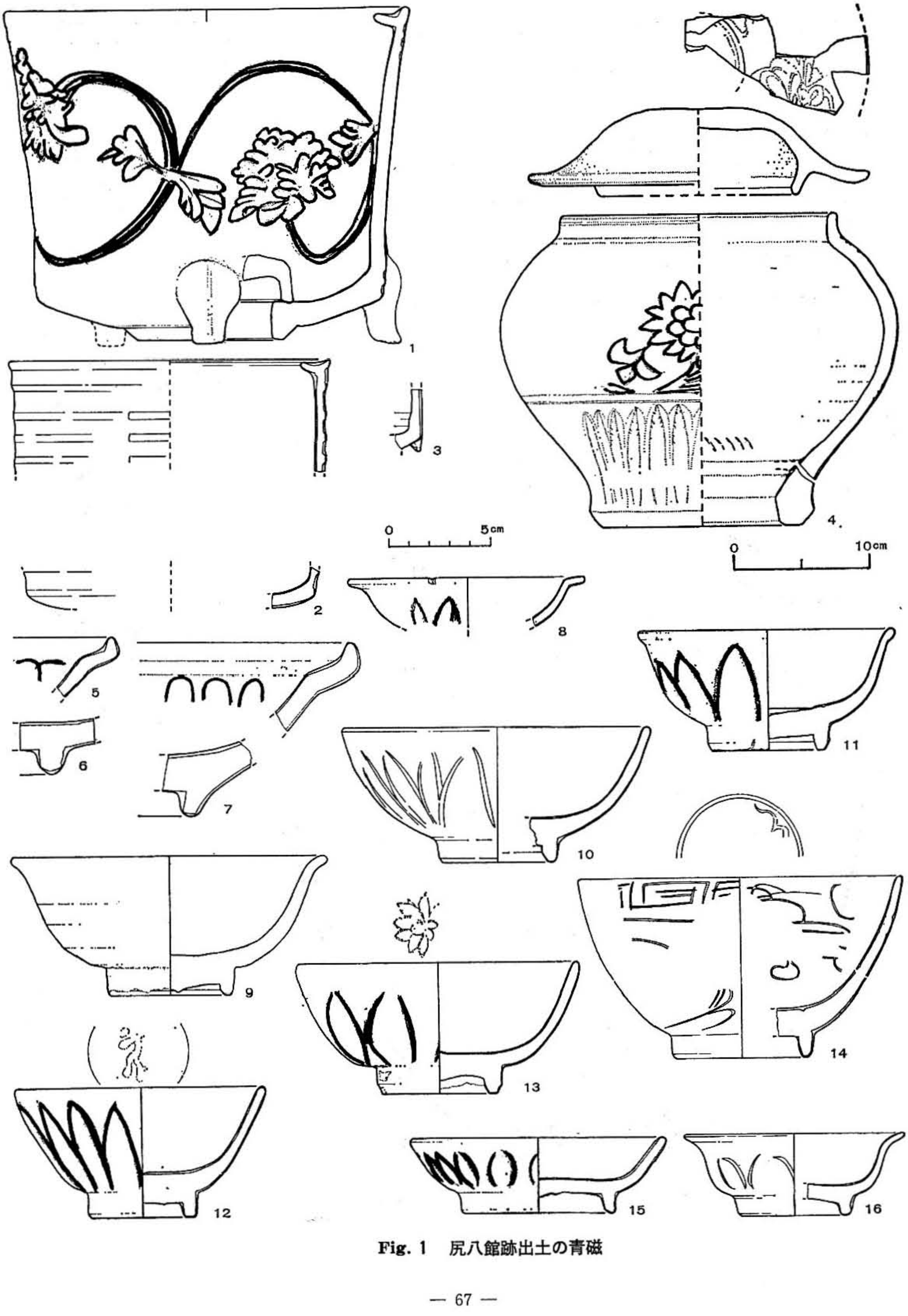


Fig. 1 尻八館跡出土の青磁

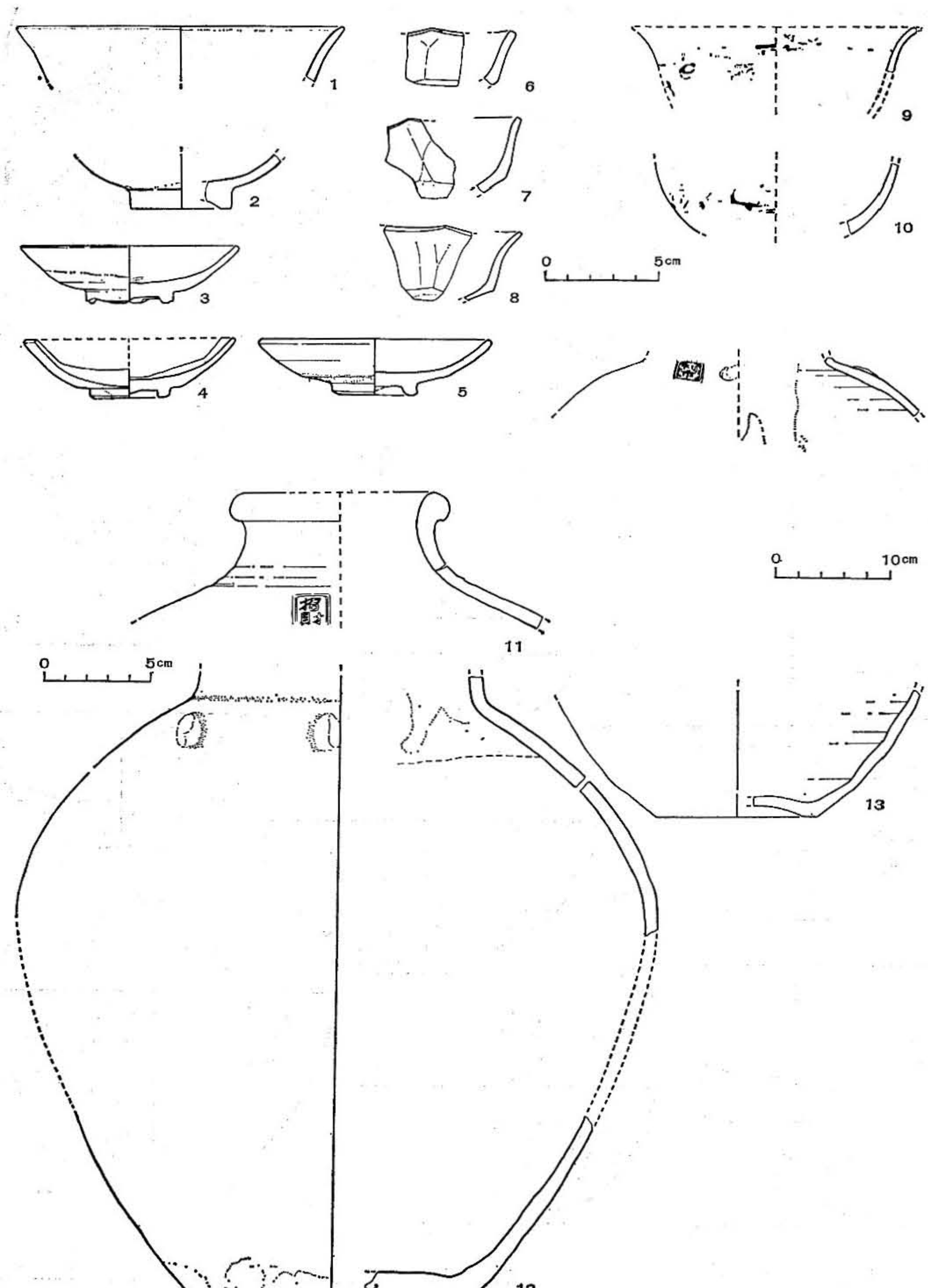
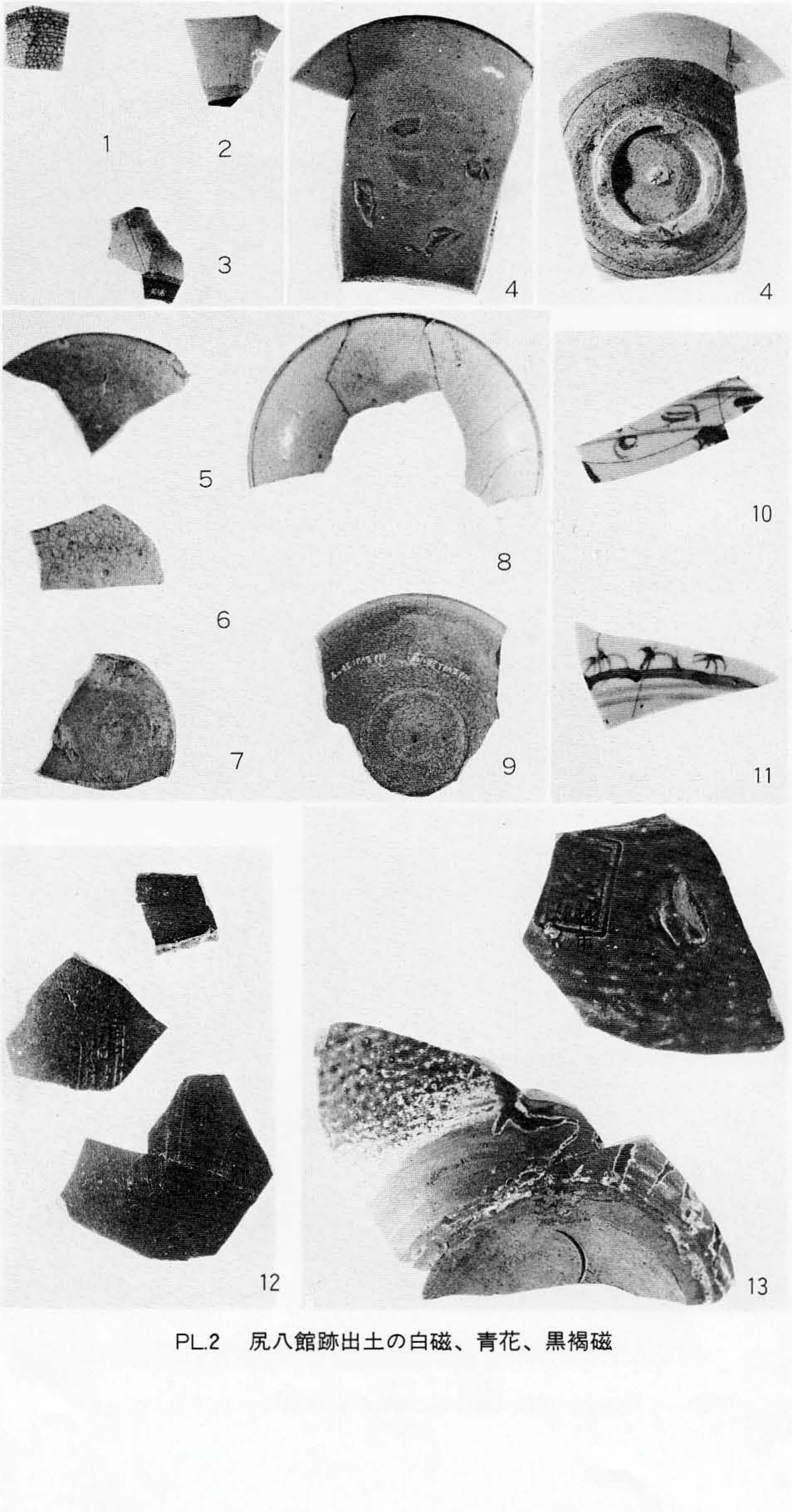


Fig. 2　尻八館跡出土の白磁・青花・黒褐磁



PL.1　尻八館跡出土の青磁



PL.2　尻八館跡出土の白磁、青花、黒褐磁

る。素色は灰白色である。Fig. 1—16も同様の蓮弁文皿であるが、形は少し異なり口縁部が外反する。素地は灰白色ないし淡灰白色である。

白磁は青磁とほぼ同数の53個体と推定される。種類は碗（Fig. 2—1・2）、小皿（3・4・5）、小杯（6・7・8）である。Fig. 2—1と2は口禿の口縁と高台部無釉の碗である。Fig. 2—3（PL. 2—4）は小皿である。高台部は無釉で、畳付は四カ所が弧状に抉り込まれている。釉は卵白色で素地は白色である。Fig. 2—4も小皿であるが、高台に弧状の抉り込みはない。Fig. 2—5（PL. 2—9）は素地が淡褐色軟質で、釉は黄白色を呈し貫入が多い小皿である。Fig. 2—6（PL. 2—1）は白色素地に黒斑の入る八角小杯である。貫入が多い。Fig. 2—7（PL. 2—3）も八角小杯で素地は灰白色で黒色微粒を含む。Fig. 2—8（PL. 2—2）も八角小杯である。八角小杯の高台部は小皿と同様に四カ所に弧状抉り込みの入るものが多い。

染付は少なく3個体が出土している。種類は碗（Fig. 2—9・10）である。Fig. 2—9（PL. 2—10）は口縁外側に雷文、内面には菱繋ぎ文が荒らく描かれている。Fig. 2—10（PL. 2—11）は外面に草文のような文様が描かれている。

黒磁（天目）は4個体出土している。種類は碗で、すべて小破片である。素地は黒色微粒を含む灰白色と、砂質のざっくりした白褐色とがある。

黒褐磁は5個体と推定される。種類は壷（Fig. 2—11・12・13）である。Fig. 2—11（PL. 2—12）は黒褐釉の壷で、素地は黒色と白色の粒を含み灰褐色である。釉は口縁内まで施釉され、横耳の間に「招財」の文字が押印されている。Fig. 2—12は黄褐釉の大壷で、素地は白色粒の多い灰褐色である。横耳の痕があるが、押印は不明である。Fig. 2—13（PL. 2—13）も黄褐釉の大壷で、白色粒の多い灰褐色の素地で、肩部に「利市」の文字の押印がある。これらはいわゆる呂宋壷である。

3　尻八館出土中国陶磁の諸問題

尻八館遺跡から出土した中国陶磁は青磁、白磁、黒磁、黒褐磁、染付であった。このうち青磁と白磁はほぼ同数を占め、出土した中国陶磁の9割が青磁と白磁であった。津軽地方で同時代の中国陶磁を出土する市浦村の檀林寺遺跡の発掘でも、青磁と白磁が多く出土し、天目茶碗もあったが、染付は見られなかった。こうした状態は明らかに16世紀と推定される遺跡から出土する中国陶磁の割合とは異なっている。例えば、津軽地方の浪岡城跡出土の中国陶磁の内わけは、青磁が39%、白磁が11%、染付が50%である。また堀越城跡出土の中国陶磁の場合は、青磁が17%、白磁が31%、染付が52%である。津軽地方の16世紀と推定される城跡出土の中国陶磁の半数は染付が占めているのであるが、尻八館遺跡からは、わずかに3個体分の破片が出

土したにすぎない。なお、津軽地方およびその周辺の出土陶磁器のありかたは、佐々木の「日本海の陶磁貿易」に述べたとおりである。

尻八館遺跡出土の中国陶磁の年代は遺跡の年代から求めることは難かしい。しかし、他の遺跡と比較すれば16世紀にまで下らないことは容易に想像される。その上限は13世紀までのぼると思われるが、中心は14・15世紀にあると推定できるようである。14世紀代を中心とするであろう出土陶磁器の主要な製品は、浮牡丹香炉、酒会壷、鎬の明瞭な（箆で浮彫にした）蓮弁文の碗や小鉢、それに皿などの青磁、口禿のある碗や皿の白磁であろう。さらに15世紀代を中心とするであろう主要な出土陶磁器は、蓮弁の幅が狭くなる碗や小鉢、雷文と蓮弁文や草花文が組み合わせられた碗や文様のない無文の碗などの青磁、それに高台に弧状の抉り込みのある小皿や小杯などの白磁ということになろう。これに青磁盤、天目碗や呂宋壷が加わって尻八館遺跡の中国陶磁が構成されていたと見られる。なお、出土した中国陶磁のより細分された正確な年代は、尻八館遺跡から積極的に求めることがかなり難かしいようにも思える。今後の課題としておきたい。

東北地方の北端に位置する尻八館遺跡からは、これまで辺境の地から発見されるとは考えられていなかった、極めて良質の陶磁器も出土しており、それはとくに13—14世紀の青磁にいちじるしいものがある。浮牡丹文様の 丸形香炉はその一つであり、三足をそなえた 堂々たる器形、箆彫りと貼付の方法を交えてあらわした流麗な牡丹唐草草文はすばらしく、さらに砧手といわれる粉青色の釉色はひときわ冴えている。このように良質の浮牡丹香炉は日本全体の遺跡を見まわしても出土例は決して多くない。この他にも酒会壷とよばれる、牡丹唐草文と鎬蓮弁文で飾られた胴張りの蓋付広口壷も14世紀の優れた製品であり、さらに砧手の鉢、碗、香炉の破片も少くない。このように秀でた14世紀を中心とする中国青磁を豊富に出土する尻八館遺跡は、東北地方全体からみても高い地位を与えてよい遺跡であろう。これらのことは尻八館遺跡の城主の経済力の豊かさと政治勢力の強さを物語るものであり、その権力的な交易によって、出土した優れた中国陶磁がこの地にもたらされたのであろう。発見された中国陶磁は東北地方の忘れさられた地の流通の問題や政治的権力の強さを再び明らかにしようとしている。

さらに、中国の天目茶碗や日本で茶壷の用に供された黒褐釉や黄褐釉のいわゆる呂宋壷や石製の茶臼も尻八館遺跡から発見されている。茶壷の肩には「利市」あるいは「招財」の文字が押印されたものもあり、まことに珍らしい。これらはいずれも14・15世紀の頃、京都や鎌倉など日本の先進地域で流行した喫茶に関係する用具である。津軽半島の一画にあった城郭のなかで葉茶を貯え、あるいはこれを碾いて粉茶とし、天目茶碗や青磁茶碗で茶を喫していた支配者の存在が充分に推定できる。当時、喫茶には 中国風の作法が 伴っていたことを 考えあわせると、青磁の香炉や酒会壷もそのために使われた用具であったとも思われる。出土した中国陶磁からは、東北の一隅に住む支配者の中に当時流行した中国的な文化的教養を身につけていたも

のがいたことが知られるのである。尻八館遺跡から出土した中国陶磁はこのように、生活史や文化史の一端も明らかにするのである。

4　その他の遺跡出土品

他の遺跡出土品について概観しよう。詳細は今後の継続調査で明らかにしていきたい。浪岡城出土品は浪岡町教育委員会に保管されている。浪岡城は1977年から発掘調査が行われ、現在も継続されている。出土する中国陶磁は青磁が最も多く、碗、皿、鉢、香炉などがある。白磁は小杯、皿、碗があり、染付の量も多く、皿と碗が主である。これらの中国陶磁は15—16世紀が中心である。

鞍越出土品は川内町の寺田徳穂氏によって大量に採集され、保管されている。中国陶磁は青磁、白磁、染付の他に黒磁も見られる。青磁は皿や碗が多く、白磁も同様であるが量は少ない。染付は大量にあり、碗と皿が大多数を占めている。黒磁には天目茶碗があり、破片数も多いようである。また、蠣崎城出土品も寺田氏が採集保管されているが、青磁香炉、染付、白磁が少量ある。これらは16世紀が中心である。

北海道では三つの遺跡から出土した中国陶磁を見た。勝山館出土品は上ノ国町教育委員会に保管されている。出土した中国陶磁は染付皿多数、青磁皿多数、白磁の皿と小杯、それに黒釉皿があった。16世紀の製品が多い。

洲崎館出土品は上ノ国郷土館に保管されている。白磁皿と青磁碗がある。15世紀である。さらに志海苔館出土品をみよう。函館博物館に保管されている中国陶磁は青磁碗３点で、15世紀の製品である。

今回の調査によって判明した青森・北海道の中国陶磁出土品の概要は以上のようである。

参考文献

『尻八館調査報告書』尻八館調査委員会、1981。

佐々木達夫「日本海の陶磁貿易」『日本海文化』８、金沢大学文学部、1981、１—36頁。

The Ceramic Wares of Fukien of the Sung and Yüan Periods

J. C. Y. Watt (屈志仁)
The Chinese University of Hong Kong

The production of high-fired ceramics has a long history in Fukien. It is one of the areas in China which began to produce the stoneware known as "hard geometric pottery" in the late second millenium B. C. However, from about the Han period, there was relatively little progress in the ceramic industry of Fukien. This is probably because of its relatively isolated geographic position. During the various surveys of kiln sites in Fukien conducted within the last thirty years, only one kiln dating from the Southern Dynasties (420-599) and two kilns of the T'ang period have been found[1]. However, hundreds of kilns dating from the Sung and Yuan periods have been located. The great increase in production of ceramics in Fukien during the Sung and Yuan periods is obviously related to the sea trade which flourished along South China coast at this time.

As a result of the archaeological information gained in the past decades, it is now possible to make a preliminary description and classification of the ceramic wares of Fukien which will be useful in the study of Chinese ceramics exported abroad during the Sung and Yuan, especially to Japan and South-east Asia. In this paper, four major groups are described and comparisons will be made, whenever possible, between finds from kiln-sites and export wares found outside of Fukien.

Before the discussion on the individual classes of wares, it should be noted that the ceramic kilns of Fukien are concentrated in two areas: the mountainous region in the north-western part of the province, and the coastal region.

Black Wares

The first group to be discussed is the black wares of which the most famous is the *temmoku* ware from the Shui-chi Kilns in Chien-yang. Much has already been written on this subject, and my Japanese colleagues will be able to give a much better account of this ware and the export of it to Japan than I can. It only remains to add here that this is one case of "export ware" which began a product for domestic use and later became an export item even after its popularity in China declined somewhat. The height of the vogue

of the "hare's fur" tea bowl in China was during the later part of the Northern Sung period[2] but the export of the tea bowl to Japan in any quantity seem to begin in the thirteenth century.

At least one other major kiln site producing *temmoku* ware has been found, and this is the Hsing-ts'un Kiln at Ch'ung-an not far from Chien-yang. According to the brief report on this site the scale of kiln site is equal to that of Chien yang[3]. A rougher kind of ware of the same type was also produced at the Pan-ling kilns at Fu-ch'ing[4].

The Mao-tien kilns at Kuang-tze also produced black glazed bowls but the body is buff or white[5]. Such bowls have been found in Hong Kong and also at Kota Cina, Sumatra[6]. However, black wares are generally not commonly found among export wares outside of China.

Black-glazed wares are also reported from the Chih-chu Shan and T'u-wei-an Kilns at Tz'ŭ-tsao situated 20 kms. south-west of Ch'üan-chou[7]. However, very little detailed description of this ware has been published.

Green-glazed Wares

The green-glazed wares can be divided into three groups. The first is the dark olive-green stonewares which are often decorated with the "dotted combing" decoration characteristic of the so-called *Jukō Seiji*. The chief kilns for the production of this ware are perhaps those near to T'ung-an on the south bank of the Ting-ch'i River, but other kilns in the coastal areas such as those at Nan-an, Hsia-men (Amoy), Lien-chiang, Min-hou, p'u-t'ien and Hsien-yu also produced similar wares[8]. Similar wares are also found at the kiln sites in the mountainous regions of the north-west such as P'u-ch'eng and Sung-ch'i, but the glaze is perhaps darker or more yellowish-green in colour. The larger yellowish-green glazed dishes of Sung-ch'i are often stamped with the character *chi* in the centre[9].

Many bowls of the T'ung-an type are found in Japan at such sites as the Kamakura coast and Fukuoka district. Meitoku Kamei has discussed a piece of this type at the 1977 Seattle Art Museum International Symposium on Chinese Ceramics[10]. In Indonesia this ware is also found but not in very large quantities. It has been thought so far that the T'ung-an type of green-ware began in the Southern Sung period. However, the discovery of this ware together with Yüeh-type wares and the Northern Sung Kwangtung wares at Butuan, Mindanao, in the Philippines raises the possibility of an earlier beginning to this ware than had been supposed previously. Li Hui-ping has proposed a possible Northern Sung date for the beginning of the *ch'ing-pai* wares produced at T'ung-an[11], but the impression of the present author, who has visited the

Ting-ch'i Kiln site at T'ung-an, is that the *ch'ing-pai* wares were contemporary with the green wares with the incised and dotted-combing decoration.

Another type of "green ware" is also produced in T'ung-an and other similar kilns in the coastal areas such as the Chuang-pian Kilns at P'u-tien[12], but the colour is much paler—sometimes bordering on a grey colour. The majority of the shapes of this ware are shallow dishes and bowls with impressed decoration in the centre such as a floral spray or double-fish. The double-fish dishes have often been cnmpared to those of the Lung-ch'üan Kilns, not only on account of the design but also the form of the dish, but in the case of the Fukien ware the design is stamped into the body—unlike the double-fish of Lung-ch'üan which is moulded and applied. The stamped floral spray decoration is more characteristic of Fukien and probably occurred earlier in Fukien than in Chekiang. Some of the kilns can be identified on account of their characteristic design of the floral spray. For example, one of the floral spray designs on the bowls from the P'u-k'ou Kiln at Lien-chiang is composed of a lotus leaf flanked on both sides by two lotus flowers in full bloom[13].

One of the more interesting shapes of the greyish colour glaze wares is that of a shallow wide-mouth jar with two small loop ears from the Chuang-pian Kilns at P'u-t'ien[14]. This kind of jar has been found in the Philippines[15], in Indonesia and the Hsi-sha Islands[16].

Ewers were also made in this light green or greyish-green ware. They have thick walls and long curved spouts. At the T'ung-an Kilns, some of these ewers are decorated with the character *chi* on the sides.

Another type of Fukien green ware is much closer to the colour of Lung-ch'üan celadon of Chekiang, but has a much softer body which is reddish in colour. The chief area of production of this ware is P'u-ch'eng near to the border with Chekiang[17]. A characteristic shape is the vase with two ring handles suspended from two semi-circular ears which are often zoomorphic in form. On the two sides of these vases are imprssed the Chinese characters *fu* and *shou* as part of the decoration. According to Feng Hsien-ming these vases can be as early as Sung as one such vase has been found in a tomb in Tung-hsiang County in Kiangsi Province that is dated the tenth year of Ch'un-yu, corresponding to+1250[18]. A celadon vase recovered from the sea at Misaki-machi, Sennan-gun, Osaka, and exhibited in the Tokyo National Museum in 1975 may be from the same kiln and of a similar date[19]. Another similar piece was in the celadon exhibition organised by the Southeast Asian Ceramics Society in Singapore[20].

Another type imitates the Lung-ch'üan celadon bowls with moulded lotus

petals on the outside. They were produced in both Ch'üan-chou[21] and Hsia-men[22], and because of the red coarse body (and the easily crazed glaze) they have been given the name of *t'u* Lung-ch'üan (earthenware Lung-ch'üan). These have been found in the sunken ship in Ch'üan-chou[23], in Indonesia and in Hong Kong[24].

Ch'ing-pai Wares

Several distinctly different categories of ware are grouped under the term *ch'ing-pai* which is gaining currency among archaeologists in China to describe various wares ranging from those with a "*ying-ch'ing*" (bluish white) colour to nearly white wares made in many areas of South China in the Sung and Yuan periods. Indeed, some of these wares are often classified as "white".

The first and most well-known of these categories is the soft body white ware, often with raised moulded designs. The most common shapes are dishes, boxes, vases and kendis; and the most common designs are "lotus petals" and the classic scroll. The greatest centre for the production of this ware is Te-hua, where one hundred and eighty kiln sites have been found so far. Among these, the kiln (s) at Wan-p'ing-lun are regarded as the oldest, with a possible beginning in the late Sung, but the kiln site which has received the greatest attention, and is in many ways the most representative, is Ch'ü-tou-kung. There is a little difference of opinion amongst Chinese scholars as to the absolute dates of the Ch'ü-tou-kung Kilns. The archaeologists at Fukien tend to date it within the Yuan period, while the experts from the Palace Museum at Peking would put the beginning of the Ch'ü-tou-kung Kilns in the late Southern Sung period[25]. A comprehensive description of the various wares produced at the kilns of Te-hua has also been published recently and is a very useful reference[26].

Boxes form one of the chief categories of Chinese export ceramics in the Sung and Yuan periods, and there are more than ten kiln sites in the Te-hua area where large numbers of boxes are found. Some of them, like the flat based dishes, have impressd marks on the bottom, but they are not marks of the workshops—unlike the boxes of Ching-te-chen which often bear the mark of the family workshop[27].

Kendis were made specially for export and it is interesting to note that they are quite often "composed" out of bowls and parts of vases.

Te-hua type wares were also produced at other ceramic centres in Fukien of which the K'uei-tou Kilns at An-ch'i are best known and described[28]. Others such as the Ling-ch'üan Kilns at P'u-t'ien also produced these wares but to a lesser extent in both quantity and variety. However, the quality of the pieces

from Te-hua itself is superior to those of other kilns. Altogether, the Te-hua type wares are amongst the most numerous and most widespread of Chinese export wares in the Yuan period.

A very different kind of Fukien *ch'ing-pai* is a high-fired ware with a white body and a glaze similar to the *ch'ing-pai* of Ching-te-chen, although the incised decorative patterns are characteristic of Fukien. It was produced in T'ung-an and Nan-an and to a lesser extent at the kilns at Lien-chiang. Other kilns in Fukien may have also produced fine *ch'ing-pai* ware but it seems that this type of ware was not exported in any quantity. One reason for this could be the relatively low production, another possible reason is that these wares were produced before the great expansion in the sea-trade from the Fukien coast in the Yuan period[29].

It is interesting to note that one type of high-fired *ch'ing-pai* ware (which is almost white) from Nan-an is often found in Indonesia and also in the Philippines. This is a tall box in the shape of a melon. This shape is not found among the boxes produced at other Fukien sites[30], but is similar to some boxes produced in Kwangtung Kilns, especially those at Ch'ao-an near Fukien.

A third kind of *ch'ing-pai* ware of Fukien is very similar to the light green or greyish green ware already discussed. It is characterised also by the stamped design in the centre of the dish. The classification into "green ware" or *ch'ing-pai* depends mostly on individual opinion.

Another type of *ch'ing-pai* ware seems to have been very much influenced by the *ch'ing-pai* of Ching-te chen and Nan-feng in Kiangsi province. Some dishes, which may be earlier in date, bear brief incised decoration in the centre and are fired on the base. Others, which may be later, consist mostly of shallow dishes fired on the mouth-rim.

It must be stressed that the classification of Fukien *ch'ing-pai* and white wares is sitll in a relatively confused stage and much work remains to be done in standardising descriptions and terms. This can only be achieved through the comprehensive study of all the available materials from all the known kiln sites. Nevertheless, with the evidence available we are already able to give a Fukien provenance to many types of export wares found in Japan and South-east Asia.

The Wares of Ch'üan-chou

These are the most interesting types of ceramic wares produced in Fukien during the Sung and Yuan periods. The kilns at Ch'üan-chou can be divided into two groups, those at Wan-yao-hsiang to the north-east of the city and those at Tz'ŭ-tsao to the south-west.

The kilns at Wan-yao-hsiang produced mainly *ch'ing-pai* and green wares[31]. The latter include types which are in the style of Lung-ch'üan celadon (the *t'u* Lung-ch'üan discussed above), but how close they are to the Lung-ch'üan type wares of P'u-ch'eng is still not clear.

The kiln site at Tz'ŭ-tsao is much more extensive and it is here that the only post-Han and pre-Sung kilns have been located in Fukien. Some general descriptions of the wares produced at the Sung and Yuan kilns here have been given in recent reports[32], and we are now more or less certain that the green and amber glazed earthenware kendis, ewers and jars (some with applipué dragons) found at fourteenth century sites in many areas of South-east Asia are all products of these kilns. This group of wares has been given rise to much speculation among scholars of Chinese export wares in the past and the publication of the surveys of the Tz'ŭ-tsao Kilns has helped to clear up a major problem in our studies.

Of particular interest among the wares of Tz'ŭ-tsao is the earthenware basins with painted decoration under a yellow glaze and fired on spurs around the rim. Such pieces have been discussed by Meitoku Kamei[33] before the publication of the surveys of the Tz'ŭ-tsao Kilns. And now Fung Hsien-ming is able to identify these as the products from the T'ung-tzu Shan Kilns at Tz'ŭ-tsao[34].

Another interesting discovery at T'ung-tzŭ Shan is the unglazed earthenware kendi. In recent years, unglazed earthenware kendis have been found in a large number of sites all over South-east Asia, notably at Butuan in Mindanao, Philippines, at Sisachanalai and Songkla in Thailand, at Trowulan, the ruins of the Majapahit kingdom in East Java, and at Kota Cina, Sumatra, in Indonesia. Various conjectures as to the origin of these wares have been put forward. Those found at Butuan have been supposed to be of Persian origin, those found at Trowulan and Songkla have been thought to be of local manufacture and some scholars have proposed that all the unglazed earthenware kendis were made in Songkla where some kilns have been found. With the discovery of the same class of ware at T'ung-tzŭ Shan, the problem becomes even more complicated. It would be most interesting and constructive to bring all these finds to one meeting where they can be compared and studied—preferably with the aid of scientific techniques such as trace element analysis.

Finally, mention must be made of the' 'black wares" reported from Tz'ŭ-tsao but as no photograph has been published it has not been possible to identify this ware among the export ceramics found in Japan and South-east Asia.

Notes (numbers underlined refer to Bibliography)

1. see **4**
2. see **1**
3. see **18**
4. see **26**
5. see **28**
6. see **9**
7. see **2** and **15**
8. see **34**
9. see **2**
10. see **6**
11. see **40**
12. see **34**
13. see **43**
14. see **34**
15. see **8**
16. see **7**
17. see **33**
18. see **4**, p. 9.
19. see **12**, no. 200
20. see **10**, plate 204
21. see **35**, p. 56
22. Personal communication from Prof. Chuang Wei-chi of the University of Xiamen
23. see **11**, fig. 17
24. see **14**, plate 2
25. see **21**, **22**, **23**
26. see **16**
27. see **3**
28. see **17**
29. see **40**
30. see **4**
31. see **35** and **15**
32. see **2** and **15**
33. see **6**, figs. 38–40
34. see **4** and **3**

Bibliograehy:

General

1. Chang Lin-sheng: "The Tea-drinking Contests of the Northern Sung and Sung Chien Ware", *The National Palace Museum Quarterly*, Vol. XIII, No. 1, pp. 79–90.

張臨生："建窯與北宋的鬥茶"，《故宮季刊》第十三卷第一期，79-90頁

2. The Investigation Team of the Ch'üan-chou Museum of the History of Overseas Communications, Fukien Province: "Report on the Investigation of the Ceramic History of Tz'ŭ-tsao in Chin.chiang County", *Hai-chiao-shih Yen-chiu*, 1980.2, pp.29-34.
   福建省泉州海外交通史博物館調查組："晋江県磁灶陶瓷史調査記"，《海交史研究》总二期，1980.2，29-34頁
3. Feng Hsien-ming: "The Problems of the Ancient Chinese Export Wares", *Hai-chiao-shih Yen-chiu*, 1980.2, pp.14-21.
   馮先銘："中國古代外銷瓷的問題"，《海交史研究》总二期，1980.2，14-21頁
4. Feng Hsieng-ming: "Achievements in Archaeological Research Work on Ceramics since the Founding of the People's Republic of China", *Palace Museum Journal*, 1980.1, pp.3-27
   馮先銘："三十年來我國陶瓷考古的収獲"，《故宮博物院院刊》1980.1，3-27頁
5. Hayashiya, S., Trübner, H. et al.: *Chinese Ceramics from Japanese Collections*, Asia Society Exhibition Catalogue, 1977.
6. Kamei, Meitoku: "Outline of the Chinese Ceramics Excavated in Japan from the Nara to the Heian Periods", *Kyūshū Rekishi Shiryōkan Kankyū Ronshū*, Vol.4, March, 1978.
7. Kwangtung Provincial Museum: *The Cultural Relics in Hsisha Islands*, 1975, Peking.
   廣東省博物館：《西沙文物》1975，北京
8. Locsin, L. & C.: *Oriental Ceramics Discovered in the Philippines*, 1967, Tokyo.
9. Mckinnon, E.P.Edwards: "Oriental Ceramics Excavated in North Sumatra", *TOCS*, Vol.41, 1975-77, pp.59-118.
10. Southeast Asian Ceramics Society: *Chinese Celadons and other Related Wares in Southeast Asia*, Exhibition catalogue, 1979.
11. The Study Group of the Sung Dynasty Wooden Sea Vessel: "Excavation of the Sung Dynasty Wooden Sea Vessel in Ch'üan-chou Bay, Fukien Province", *WW* 1975.10, pp.1-18.
    泉州湾宋代海船發掘報告編寫組："泉州湾宋代海船發掘簡報"，《文物》1975.10，1-18頁
12. Tokyo National Museum: *Chinese Ceramics Excavated in Japan*, Exhibition catalogue, 1975.
13. Tregear, Mary: "Chinese Ceramic Imports to Japan between the Ninth and Fourteenth Centuries"' *Burlington Magazine*, No.18, pp.816-824, 1976, London.
14. Watt, J.C.Y.: "A Brief Report on Sung-type Pottery Finds in Hong Kong", *Journal of the Hong Kong Branch of the Royal Asiatic Society*, Vol.II, pp.142ff, 1971, Hong Kong.
15. Yeh Wen-cheng: "Preliminary Research on Pottery and Porcelain Export Abroad in the Ancient Time from Jin Jiang and Quan Zhou", *Universitatis Amoiensis Acta Scientiarum Socialium*, 1979.1, pp.105-111.
    葉文程："晋江・泉州古外銷陶瓷初探"，《厦門大學學報哲學社會科學報》总一期，1979，105-111頁
16. Yeh Wen-cheng, Hsu Pen-chang: "The Popular Export Wares of Ancient Te-hua Kilns", *Hai-chiao-shih Yen-chiu*, 1980.2, pp.21-29.
    葉文程・徐本章："暢銷國際市場的古代德化外銷瓷器"，《海交史研究》总二期，1980，21-29頁

Fukien Kiln Site Reports

17. Cultural Centre of An-hsi County (Yeh Ching-lin): "A Report of the Investigation of Ancient Kiln Remains at An-hsi, Fukien Province", *WW* 1977.7, pp.58-67.
安溪県文化館（葉清林）："福建安溪古窰址調査"，《文物》1977.7，58-67頁
18. Hsu Ch'ing-chüan, Cheng Hou-sheng: "Sung Black Wares of Hsing-ts'un in Ch'ung-an", *WW* 1959.6, p.71.
許清泉・鄭厚生："崇安星村宋代黒瓷器"，《文物》1959.6，71頁
19. Sung Po-yin: "On the Kilns of Te-hua", *WW* 1955.4, pp.55-57.
宋伯胤："談徳化瓷"，《文物》1955.4，55-57頁
20. Ch'en Wan-li: "A Brief Report on the Investigation of the Ancient Kiln Sites in Southern Fukien Province", *WW* 1957.9, pp.56-59.
陳萬里："調査閩南古代窰址小記"，《文物》1957.9，56-59頁
21. The Te-hua Ancient Kiln Archaeological Team et al: "Excavation of the Ancient Ch'ü-tou Palace Kiln Remains at Te-hua County in Fukien Province", *WW* 1979.5, pp.51-61.
徳化古瓷窰考古發掘工作隊《屈斗宮窰址發掘簡報》編寫組："福建徳化屈斗宮窰址發掘簡報"，《文物》1979.5，51-61頁
22. Ts'eng Fan: "The Problems of the Ancient Ch'ü-tou Palace Kiln Sites at Te-hua", *WW* 1979.5, pp.62-65.
曾凡："關于徳化屈斗宮窰的幾個問題"，《文物》1979.5，62-65頁
23. Li Hui-ping: "Notes on the Kiln Sites of the Ch'ü-tou Palace at Te-hua", *WW* 1979.5, pp.66-70.
李輝柄："關于徳化屈斗宮窰的我見"，《文物》1979.5，66-70頁
24. Hsu Pen-chang et al: "Notes on the Export Porcelain of Ancient Te-hua Kilns", *KG* 1979.2, pp.149-154.
徐本章・蘇光耀・葉文程："略談徳化窰的古外銷瓷器"，《考古》1979.2，149-154頁
25. CPAM, The Fukien Province: "A Brief Report on the Ancient Kiln Sites of Tung-men Reservoir in Fu-ch'ing County", *WW* 1958.2, pp.34-35.
福建省文物管理委員會："福清県東門水庫古窰址調査記"，《文物》1958.2，34-35頁
26. Hsu Ch'ing-chüan: "Notes on the Two Kiln-sites at Fu-ch'ing and Tung-chang", *WW* 1959.6, pp.67-69.
許清泉："福清東張兩處宋代窰址"，《文物》1959.6，67-69頁
27. Wang T'ieh-fan: "The Earliest Fukien Kiln Uncovered in Fu-chou", *WW* 1962.9, p.61.
王鐵藩："福州發現本省最早的窰址"，《文物》1962.9，61頁
28. Ts' eng Fan: "Notes on Mao-tien Kilns of the Suug Period in Kuang-tze", *WW* 1958.2, pp.36-37.
曾凡："光澤茅店宋代瓷窰址"，《文物》1958.2，36-37頁
29. Shao Liang-yung, Liu Ngo-i: "Tang Kiln Site Uncovered in Chiang-lo, Fukien Province", *WW* 1959.9, pp.83-84.
邵良榮・劉莪又："福建将樂県發現唐代窰址"，《文物》1959.9，83-84頁
30. Sung Po-yin: "Report on the Investigation of Chien-yao Kilns", *WW* 1955.3, pp.50-65.
宋伯胤："「建窰」調査記"，《文物》1955.3，51-65頁

31. Museum of Anthropology, Amoy Universiuy (Yen Wen-cheng): "Excavation of the Sung Dynasty Chien-yao Kilns at Shui-chi, Chien-yang, Fukien", *KG* 1964.4, pp.191-193.
廈門大學人類學博物館（葉文程）："福建建陽水吉宋建窯發掘簡報"，《考古》1964.4，191-193頁
32. Ch'iu Chia-ping, Yen Hui-fang: "Notes on the Sung Kiln Sites in Min-ch'ing County", *WW* 1959.6, pp.69-70.
丘家炳・嚴惠芳："閩清宋代窯址"，《文物》1959.6，69-70頁
33. Lin Teng-hsiang et al: "Suug Kiln Sites in Pu-ch'eng", *WW* 1956.9, pp.65-66.
林登翔・嚴惠芳・丘家炳："浦城宋代窯址"，《文物》1959.6，65-66頁
34. Li Hui-ping: "Notes on Remains of Kiln at Pu-t'ien County in Fukien Province", *WW* 1979.12, pp.37-42.
李輝柄："莆田窯址初探"，《文物》1979.12，37-42頁
35. Ch'en Wan-li: "A Brief Report on the Investigation of the Ancient Kiln Sites in Southern Fukien Province", *WW* 1957.9, pp.56-59.
陳萬里："調查閩南古代窯址小記"，《文物》1957·9，56-59頁
36. Hsiao Ming-chün, Yang Ts'ang: Notes on the Sung Kiln Sites in Sung-ch'i County", *WW* 1959.6, pp.64-65.
蕭名俊・楊蒼："松溪県宋代窯址"，《文物》1959.6，64-65頁
37. Ch'eng Wan-li: "A Brief Report on the Investigation of the Ancient Kiln Sites in Southern Fukien Province", *WW* 1957.9, p.58.
陳萬里："調查閩南古代窯址小記"，《文物》1957.9，58頁
38. CPAM, The Fukien Province (Lin Ch'ao): "Report on the Investigation of the Ancient Kiln Sites at T'ung-ch'i Reservoir, T'ung-an County", *WW* 1958.2, pp.32-33.
福建省文物管理委員会（林釗）：同安県汀溪水庫古瓷窯調查記"，《文物》1958.2，32-33頁
39. Huang Han-chien: "Notes on the T'ung-an Kiln Sites of the Sung Period", *WW* 1959.6, pp.62-64.
黄漢杰："同安宋代窯址"，《文物》1959.6，62-94頁
40. Li Hui-ping: "Reconnaissance at the Sites of the Porcelain Kiln in T'ung-an County Fukien Province", *WW* 1974.11, pp.80-84.
李輝柄："福建省同安窯調查記略"，《文物》1974.11，80-84頁
41. Huang Ping-yüan: "Report on the Trial Diggings of the Ancient Kiln Sites at Shih-pi Reservoir, Nan-an, Fukien Province", *WW* 1957.12, pp.53-55.
黄炳元："福建南安石壁水庫古窯址試掘情況"，《文物》1957.12，53-55頁
42. The Ch'üan-chou Museum of the History of Overseas Communications, Fukien Province: "The Neolithic Sites and Sung Kiln Sites Discovered at Ssŭ-th, Nan-an, Fukien Province", *WW* 1973.1, p.63.
泉州海外交通史博物館："福建南安四都發現新石器時代遺址和宋瓷窰窯址"，《文物》1973.1，63頁
43. Sung Po-yīn: "Notes on the two Ancient Kiln Sites in Lien-chiang County", *WW* 1958.2, pp.27-31.
宋伯胤··"連江県的兩個古瓷窯"，《文物》1958.2，27-31頁

Abbreviations:

KG Kaogu (考古), Beijing
TOCS Transactions of the Oriental Ceramic Society, London
WW Wenwu (文物), Beijing

宋・元時代の福建の陶磁

香港中文大学
J. C. Y. watt（屈 志 仁）
田 中 恵 子訳

福建の高火度焼成製陶の歴史は長い。ここは紀元前千数百年頃に〝印文硬質土器〟として知られる炻器を生産し始めた中国の地域の一つである。しかしながら漢時代頃から福建の製陶業はあまり大きな進展をみなかった。これは恐らくこの地域が地理的に他から隔てられていることによるものであろう。この三十年間に行われた福建窯跡のさまざまな調査でも南朝の窯が一基と二基の唐時代の窯しか発見されていない[1]。しかしながら宋・元時代の窯は何百と捜し出されている。宋・元時代の福建における陶磁器生産の増大は、この頃中国南部沿岸で盛んであった海上貿易に明らかに関係がある。

過去数十年間に得られた考古学的報告の結果として、宋・元時代に海外に、特に日本と東南アジアに輸出された中国陶磁の研究をする際に役立つであろう福建の陶磁器の準備的な解説と分類が今や出来るようになった。本稿では四つの主なグループについて述べ、可能な場合は窯跡から発見されたものと福建以外の場所で発見された輸出陶磁とを比較して見よう。

陶磁器の各グループについて論じる前に、福建の陶磁器の窯は二つの地域に集中している事に注目しなければならない。即ち省北西部の山地と、沿岸地方である。

黒 磁

まず最初に論ずべきグループは黒磁で、その最も有名なものは建陽の水吉窯の天目である。これについては既に多く書かれ、天目とその日本への輸出について日本の研究家達は私より遙かに適切な説明を与える事が出来るであろう。ここでつけ加えるのはただ、これがまず国内用の製品として始まり、後にその人気が中国でやや衰えた後で輸出品目となった〝輸出陶磁器〟の一例ということである。中国において〝兎毫〟盞が一番流行したのは北宋時代の後期であったが[2]、日本への輸出は十三世紀に始まるようである。

天目を焼成した主要な窯跡が少くとも他にもう一つ発見されているが、これは建陽から遠くない崇安の星村窯である。この遺跡の簡単な報告によれば窯跡の大きさは建陽のものに等しい[3]。同種の下手の物が福清の半嶺窯でも焼かれている[4]。

光沢の茅店窯でも黒釉の鉢を焼いているが胎は淡黄色か白色である[5]。これは香港、そしてスマトラのコタチナでも発見されている。しかしながら、黒磁は中国からの輸出陶磁器としては一般的なものではない。

黒釉磁はまた泉州の南西20kmの磁灶の蜘蛛山窯と土尾庵窯からも報告されている[7]。しかしながらこれに関してあまりくわしい報告は公表されていない。

青　磁

青磁は三つのグループに分けられる。第一はいわゆる珠光青磁の特徴である櫛目文が施されている事が多い暗緑色炻器である。これを生産した主な窯は恐らく汀渓川南岸の同安に近い窯であろうが南安、厦門、連江、閩侯、莆田、仙遊にある窯のような沿岸地方の他の窯でも類似の製品を作っている[8]。類似の製品は又、浦城、松渓のような北西の山地にある窯跡でも発見されているが、釉は恐らくもう少し色が濃いか、或はもう少し黄色みを帯びた緑である。松渓の大きめの黄色みを帯びた青磁の皿はしばしば見込みに吉の字が印刻されている[9]。

多数の同安タイプの鉢が日本の鎌倉海岸、福岡地方などで発見される。亀井明徳氏は、1977年シアトル美術館中国陶磁国際シンポジウムでこのタイプの一片について論ぜられた[10]。インドネシアでもこの手のものは発見されるが量は多くない。これまでは同安タイプの青磁は南宋時代に始まると考えられて来た。しかしながら、これが越州タイプ及び北宋の広東製品と共にフィリピンのミンダナオ島のブトゥアンから発見されて、今まで考えられて来たのよりも始まりが早い可能性が高まった。李輝柄氏は同安で生産きれた青白磁の始まりは北宋時代と考えられると言うが[11]、同安の汀渓窯跡を訪れた事のある筆者は青白磁は、彫り文様と櫛目文のある青磁と同じ時期、という印象を持つ。

第二のグループの青磁も同安や、莆田の荘辺窯のような沿岸地域の類似の他の窯で作られているが[12]、色はずっと薄く、灰色に近いのもある。この器形の多くは浅い皿や鉢で中央に花文や双魚文が刻印されている。この双魚文の皿は、その意匠だけでなくその器形ゆえに竜泉窯の双魚文の皿としばしば比較されて来たが、福建製品のは双魚文が、型で抜いて貼付けた竜泉窯のとは異なり、胎に印刻されている。印刻された花文はより福建特有で浙江より先に福建ではじまったらしい。その花文の特徴ある意匠のために確認できる窯もある。例えば連江の浦口窯産の鉢にある花文の一つは、開いた蓮の花を両側に配した蓮の葉から成る[13]。

灰色がかった釉の器で、さらに興味ある形の一つに莆田の荘辺窯産の丈の低い双耳広口壷がある[14]。この種の壷はフィリピン[15]、インドネシア、西沙群島[16]で発見されている。

この薄緑または灰色がかった釉の水注も作られた。胎は厚く、長く反った注口がついている。同安窯ではこの水注で側面に吉の字がついているものもある。

第三のグループの福建青磁は浙江の竜泉青磁の色にずっと近いが、赤っぽい土は遙かに柔らかい。この手の主な生産地は浙江との境界に近い浦城である[17]。特徴ある形として不遊環双耳瓶があり、獣形が多い半円形の耳から二つの環が下がっている。側面には装飾の一部として福と壽という字が印刻されている。馮先銘氏によれば、同種の瓶が江西省の淳祐十年（A. D. 1250）

の墓で発見されているので南宋後期まで遡り得るという[18]。大阪府泉南郡岬町の海で発見され、1975年に東京国立博物館で展覧された青磁瓶は同時代の同じ窯のものかもしれない[19]。もう一つ類似のものがシンガポール東南アジア陶磁学会主催の青磁展に出陳された[20]。

また、竜泉青磁の鉢を真似て外側に蓮弁文を型押しした種類がある。これは泉州[21]と厦門[22]で作られ、赤い粗い土（と貫入の入り易い釉）から土竜泉と呼ばれて来た。泉州の沈没船[23]、インドネシア、香港[24]で発見されている。

青白磁

幾つかの明らかに異なる種類の陶磁器が青白磁という用語の下に一つにまとめられる。この用語は現在、中国の考古学者の間で、宋・元時代に南シナの多くの地域で作られた影青（青みがかった白）から白に近い種々の陶磁器の特徴を述べるのに使われている。実際、これ等の陶磁器の内、或る物は〝白磁〃として分類されることが多い。

この種類の中でまず第一にそして最も有名なものは土胎の柔らかい白磁で、印花文様がある事が多い。最も一般的な意匠は〝蓮弁〃と巻草文である。この陶磁器の生産の最大の中心は徳化であり、これまでに百八十の窯跡が発見された。この内、碗坪崙の窯が恐らく南宋後期に始まる一番古い窯と見なされているが、大いに注目を集め種々の点で最も代表的な窯跡は屈斗宮である。屈斗宮窯の確たる年代に関して中国の学者の間に多少の意見の相違がある。福建の考古学者は元時代と考え、一方北京故宮博物院の専門家はこの窯の始まりを南宋後期と考えている[25]。徳化窯で焼かれた種々の陶磁器を包括した解説書も最近出版され、大変有用な参考書である[26]。

宋・元時代の中国輸出陶磁の主な種類の一つに盒があり、徳化地方の十以上の窯跡で多数の盒が発見される。平底の皿のように、底に刻印のあるものもあるが、工房の印がある事が多い景徳鎮の盒と違い、それは工房の印ではない[27]。

水注（ケンディ）は特に輸出向けに作られ、面白いことに鉢と瓶の一部を使って作られている事が多いのが注目される。

徳化様式陶磁は福建の他の窯業中心地でも焼かれ、その中でも安溪の魁斗窯は最も良く知られ、報告がなされている[28]。量、種類共ずっと小規模ながら莆田の灵川のような他の窯でもこれ等は焼かれた。しかしながら徳化それ自身の製品の品質は他の窯のものに優っていた。要するに、徳化様式の陶磁は元時代に最も数量が多く広く行き渡った中国輸出陶磁の一つなのである。

非常に異なった種類の福建青白磁で、刻花装飾文は福建の特徴をもつが、白い土で景徳鎮の青白磁に似た釉の高火度焼成陶磁がある。これは同安や南安で作られ、それより少規模ではあったが連江の窯でも焼かれた。福建の他の窯でも良質の青白磁を生産したであろうが、輸出さ

れたとは思えない。その理由の一つは生産量が比較的少ない事、もう一つ考えられるのはこれ等の陶磁器が福建の海岸からの海上貿易が元時代に大きく拡大する前に生産されたという事である[29]。

面白いことに南安製の高火度焼成された 青白磁 (白に近い) がしばしばインドネシアで、また、フィリピンでも発見される事は注目される。これは瓜型の丈の高い合子である。この形は福建の他の地域で作られた盒の中には見られず[30]、広東窯の盒、特に福建に近い潮安のものに似ている。

福建の青白磁の第三の種類は既に論じた薄緑または灰緑釉の陶磁器に大変良く似ている。皿の中央に印花文があるのもその特徴である。青磁に入るかそれとも青白磁かという分類では人によって意見が異なる。

別のタイプの青白磁で、江西省の 景徳鎮、南豊の青白磁に大きく影響を 受けたように見えるのがある。時期が早いと思われる皿は中央に簡単な刻花文があり上向けて焼かれている。後期のものと思われるものは、主として伏せ焼の浅い皿である。

ここで強調しなければならないのは、福建の青白磁と白磁の分類は未だにやや混乱の状態にあるということであり、表現や用語の統一のためにするべき多くの仕事が残されている。これは現在知られている全ての窯跡からの入手可能な全ての資料を総合的に研究する事によってのみ達成出来る。しかし利用出来る事実から、我々は既に日本及び東南アジアで発見された輸出陶磁の多くは福建から出たものと言う事ができるのである。

泉州陶磁

これは宋・元時代に福建で焼かれた陶磁器で最も興味ある種類である。泉州の窯は市の北東にある碗窯郷と南西にある磁灶の二つの群に分ける事が出来る。碗窯郷の窯では主として青白磁と青磁を生産した[31]。磁灶の製品には竜泉青磁様式 (先に論じた土竜泉) の種類も含まれるが、浦城の竜泉様式の陶磁にどの位近いかはまだ明らかでない。

磁灶の窯跡は遙かに規模が大きく、福建では漢と宋の間の窯が発見されているのはここだけである。ここの宋・元の窯の製品の概説が最近の報告書にのっており、東南アジア各地の十四世紀の遺跡で発見される緑、黄褐釉陶のケンディ、水注、壷 (貼付竜文あるものあり) が全てこの窯の製品である事に今や我々は大体確信をもっている。この種類の陶磁器は従来、中国輸出陶磁学者の間に多くの推測を生んだが、磁灶窯調査記の出版は我々の研究の主な問題の解決に役に立っている。

磁灶の陶磁で特に興味深いのは黄釉下彩文様と縁に目跡がある陶胎の水盤である。この製品については、亀井明徳氏が磁灶窯調査記の出版以前に論じている[33]。そして現在、馮先銘氏はこれを磁灶の童子山窯の製品に違いないと確認している[34]。

童子山でのもう一つの興味ある発見は無釉の陶器のケンディである。近年無釉の陶器のケンディが東南アジア一帯の多くの遺跡、特にフィリピン・ミンダナオのブトゥアン、タイのシサチャナライとソンクラ、東ジャワのマジャパイト王国の廃墟であるトロゥラン、インドネシア・スマトラのコタチナで発見された。この製品の出所に関してさまざまの推測が行われてきた。ブトゥアンで発見されたものはペルシァ製と考えられてきたし、トロゥランとソンクラで発見されたものはその土地で製作されたと考えられ、また無釉の陶器のケンディは全て、幾つか窯が発見されているソンクラで作られた、という学者もいた。童子山での同種の製品の発見で、問題は一層複雑になっている。これらの発見されたものを全て一カ所に持ち寄り、そこでなるべくならば微量元素分析のような科学技術を使って、比較し研究出来れば非常に興味深く、かつ研究を発展させるであろう。

最後に磁灶から報告のある黒磁について触れねばならないが、写真も公表されていないので、日本や東南アジアで発見される輸出陶磁の中にこれを確認する事がまだ出来ないでいる。

FOURTEENTH CENTURY CHINESE CERAMICS FOUND IN INDONESIA

Abu Ridho
(Museum National Indonesia)

In this occasion I would like to talk on the 14th century Chinese ceramics found in Indonesia. This subject was given to me by the commitee of the seminar. Therfore I have to limit my subject to the Chinese ceramics only, though there are also Vietnamese, Thailanese and Khmer ceramics of the same period found in Indonesia.

I would like to stress the purpose of this talk to the immediate importance on opening a wider possibilities on the research of ceramic finds in Indonesia which according to my opinion are still very promising. It must be noted here that there are many cases where science, especially archaeology, suffers a loss by uncontrolled diggings, held by the people in South Sulawesi and elsewhere.

The 14th century Chinese ceramics consist mostly of Yuan and early Ming wares, like bowls, plates, small plates, vases, and others. Based on the decoration and glaze, the 14th century Chinese creamics could be devided into several groups, like:

1. The underglazed blue and white decoration, which is applied to plates, bowls, vases, bottles, etc.
2. Underglazed red, what we considered as high quality decoration and technique. As far as we know it was applied at vases and covered boxes.
3. Celadon.
4. Iron black decoration, which can be dvided into two kinds, i.e. black colour applied on the whole surface of the body and an underglazed black decoration on white back-ground.
5. Ching-pai glaze.

These objects were found widely spread in Indonesia. There are places according to my opinion where 14th century Chinese wares are still to be found, but are unknown to us at this moment. Further research in this field will reveal 14th century sites. What are currently known to us are places like:

1. Trowulan, in East Jawa where 14th century Chinese Ceramics were found in abundance.
2. South Sulawesi.
3. Warloka (Western Flores). 1979年に発見

4. Kota Cina (North Sumatra).
5. Ciampea (Bogor, West Java).
6. Patenggeng (West Java).
7. Muara Jambi (South Sumatra).
8. East Kalimantan. KUTAI 5C以来の王国の所在地

The fact that the ceramics were found in abundance, proves that there was an increasing contact between Indonesia and China. It is noticeable that there was progress in trade between the two countries. This might affect the political situation, too. During the 14th century in Indonesia, the most powerful kingdom was Majapahit, the capital of which was situated in East Jawa (the present Trowulan). This kingdom, according to the old manuscript Negarakertagama, was supposed to rule over the whole Indonesia islands. This does not mean that there were no other kingdoms outside Jawa. In fact several kingdoms were also in existence, like Goa in South Sulawesi, Pajajaran in West Jawa, Sriwijaya in Sumatra, and other kingdoms. But these were all the vassals of the Majapahit.

It is noticeable that the contact between Indonesia and China, perhaps started by the coming of the military expedition from Kublai Khan, Mongol emperor who reigned in China in the late 13th century, to East Jawa. The purpose of the expedition was to conquer the Eastern Javanese Kingdom of that time, Singasari with Kertanegara as its king. But the kingdom was already falling because of intrigues in the royal family, so that the Mongolian expedition had no dificulties in defeating the kingdom. With some trickery, there was a nobleman who saw the chance to defeat the Mongolian troops and proclaim himself as the first king of Majapahit. The Mongolian troop was said to have consisted of a fleet of 1000 ships boarding about 20,000 troops.

In the following years the volume of trade increased until it reached its summit in the 17th century. This is proved by archaeological excavations in several places in Jawa, where undisturbed sites have been found. The fact that the 16th century sites are found clearly shows the progress of the trade.

The wares were used for daily life and as ceremonial objects, as is the case in South Sulawesi. During the evcavation held in 1970 it was noticed that the bowls and plates were put on certain parts of the corpse. They were told by professional diggers that a bowl, for instance, was put on the genitals of the corpse, while a plate was placed between the body and arm. These ceramics were mixed with local potteries. It is important to notice that the wares found in the same cemetery date from the same period. The blue and white porcelain from the 14th century was found together with the blue and white Vietnam wares from the same period, and the Thai wares (Sawankhalok) as

well. The Swatow blue and whites were found with other wares from the same period. As far as I know there was no instance of wares from the 14th century being found together with wares from later periods.

It is unfortunate that there were not many excavations done by archaeologists in this area so that the exact data on this is lacking.

In the Museum of Trowulan (East Jawa) there is a fragment of a bowl which was a surface find in that area. The area is famous as the location of the former Majapahit capital. Judging from the attributes of the fragment it is clear that this bowl is of the Yuan period. The attributes are similar to those of Yuan blue and white. The foot rim is low, unglazed and thick with a sharp edge. The body material gained a colour of brownish white by way of oxidation. These Yuan sherds were found in sufficient amount in Ciampea (West Jawa), Muara Jambi (Sumatra) and South Sulawesi. The most surprising matter on this sherd is that it bears enamel decoration. The colours are red and green. Although this sherd was found long time ago (before the second world war) and even on the surface, but its importance can not be neglected.

CONCLUSION

It is clear that the study of foreign ceramic finds in Indonesia has to be seriously done. Up to the present, research on ceramic finds have been done sporadically. South Sulawesi, which has many promising sites, is the place on which the research on ceramic finds has to be concentrated. I have a feeling that if we do serious work in this area, it will produce good results, amongst which will be a contribution on our understanding of the dating of blue and white porcelain. It is more likely that in this area the so called early blue and white porcelain will be found together with Sung celadon. As far as we know, the oldest date for the blue and white porcelain is 至正11年 (1351), derived from the dated blue and white vase which is now in the David Collection. I would like to suggest that the blue and white might be earlier.

A remarkable find on the Yuan porcelain found in the Trowulan area has a very important effect on the dating of enamel colors. If the stylistic judgement of the sherd is correct, we have here a Yuan enamel colors. This will also put the dating of the enamel color back as far as Yuan period.

インドネシアで発見される中国陶磁

インドネシア国立博物館
Abu Ridho
田　中　恵　子訳

インドネシアで発見される14世紀の中国陶磁についてお話したい。この表題は日本貿易陶磁研究会から与えられたもので、インドネシアでは同時期のヴェトナム、タイ、クメール、ペルシアの陶磁器が発見されているが今回は中国陶磁に限らねばならない。

インドネシアで発見される陶磁器の研究の可能性を広げることが早急に必要であることを強調したいというのが本講演の目的であり、その可能性は大いにあると私は考えている。ここで特に言及せねばならぬことは，南スラウェシその他の地域の人々が行った無秩序な発掘によって、学問、特に考古学が大きな損失をこうむった例が多いことである。

14世紀の中国陶磁は主として元、明初の鉢、皿、小皿、瓶、その他である。装飾と釉調に基いて14世紀中国陶磁は次のように分けられる。

1．染付の皿、鉢、瓶、等
2．釉裏紅の瓶と合子
3．青磁
4．黒釉 ｛ 器全体に黒釉をかけたもの / 白地に釉下の鉄絵があるもの
5．青白磁

これらは広くインドネシア中で発見される。私としては、14世紀の中国陶磁が発見される可能性がありながら今のところ知られていない場所があると思う。さらにこの分野での研究が進めば14世紀の遺跡が明らかになるであろう。現在知られているのは次のような所である。

1．トロウラン——東ジャワ　14世紀中国陶磁が大量に発見された
2．南スラウェシ
3．ワルロカ（西フローレス）　1979年に発見
4．コタチナ（北スマトラ）
5．チアンペア（ボゴール、西ジャワ）
6．パテンゲン（西ジャワ）
7．ムアラジャンビ（南スマトラ）
8．東カリマンタン　KUTAI　5Ｃ以来の王国の所在地

陶磁器が大量に発見されるという事は、インドネシア・中国間の接触の増加の証明である。二国間の貿易の発展が注目される。これは政情にも影響を与えたであろう。14世紀のインドネシアで一番勢力のあった王国はマジャパイトでその都は東ジャワ（現在のトロウラン）にあった。この王国は古い写本、ネガラカータガマによれば、インドネシア諸島全体を統治したことになっている。これはジャワ以外に王国がなかったという意味ではない。事実、南スラウェシのゴア、西ジャワのパジャジャラン、スマトラのスリウィジャヤやその他の王国もいくつかあったのである。しかしそれは全てマジャパイトに臣下の礼をとった。

インドネシア・中国間の接触が恐らく、13世紀に中国に君臨したモンゴルの皇帝フビライハンの遠征軍が東ジャワに来た事にはじまる点は注目してよい。この遠征の目的はケルタネガラを王にいただくその当時の東部ジャワ王国シンガサリを征服する事であった。しかしその王国は王族内の陰謀により既にほろびかけていたので、モンゴルの遠征軍はその王国を何の苦もなく倒した。そこに一人の貴族が現われ策略によってモンゴル軍を打ち破る機をとらえ、自らマジャパイトの最初の王と宣言した。モンゴル軍は二万の兵をのせた千隻の艦隊であったと言われる。

それ以降貿易の量は増え、17世紀にその頂点に達した。これはジャワでの数ケ所の考古学的発掘によりまだ荒らされていない遺跡が発見されて明らかになった。16世紀の遺跡が発見された事は貿易の進展をはっきりと示している。

陶磁器は日常生活に、また南スラウエシの例のように祭祀用具として使われた。1970年の発掘の際、碗や皿が死体の一定の部分に置かれている事が注目された。盗掘人によれば、例えば碗は死体の性器の上に置かれ、皿は胴体と腕との間におかれているという。これ等の陶磁器に現地産の陶器がまじっていた。同一の墓地から出た陶磁器は同一の時代のものである点に注目する事が大切である。14世紀の染付は同時代のヴェトナムの染付、そしてまたタイ陶磁（スワンカロク）と共に発見された。スワトウ染付は同じ時代の他種の陶磁器と共に発見された。私の知る限り、14世紀の陶磁器がそれより時代の下る陶磁器と一緒に発見されたという例はない。

残念ながらこの地域では考古学者による発掘があまりなされておらず正確なデーターに欠ける。

トロウラン博物館にはこの地域で表面採集された碗の破片がある。この地域はかつてのマジャパイトの都の地として有名である。この破片の特徴から判断してこの碗が元時代の物である事は明らかである。それは元の染付の特徴と似ている。高台は低く無釉で厚みがあり畳付きは薄くなっている。胎は酸化により茶色っぽい白色である。これ等の元の破片は、チアンペア(西ジャワ)、ムアラジャンビ（スマトラ)、南スラウェシでかなりの量発見された。この破片で最も驚くべき事は色絵の装飾があることである。色は赤と緑である。この破片はだいぶ前（第二次世界大戦の前）に発見され、表面採集ではあったが、その重要性は無視出来ない。

結　論

インドネシアにおける外来陶磁器の研究は真剣になされねばならぬ事は明らかである。現在まで、発見された陶磁器の研究はばらばらになされてきた。有望な遺跡がたくさんある南スラウェシは陶磁片の 研究が集中的になされねばならぬ 地域である。この地域を 真剣に研究すれば、とりわけ染付の年代決定に大きく貢献する良い結果を生む事と思う。さらにこの地域ではいわゆる初期染付が宋の青磁と共に発見される見込みがある。我々が知る限り染付の一番古い年代は、現在 デヴィッド・コレクションにある 年号の入った 染付の瓶から得られた 至正11年(1351) である。染付はもう少し時代が上るかもしれない。トルウラン地域での元時代磁器の注目すべき発見は色絵の年代決定に大きな影響を持つ。もし様式的な判断が正しいならばここに元色絵があることになる。これはまた色絵の年代を元時代まで上げる事になるだろう。

彙　報

日本貿易陶磁研究会成立の経緯

最近10年間において、日本各地の遺跡から、中国陶磁など、いわゆる輸入陶磁器が多量に出土している。これはあらためて言うまでもない考古学的によく知られた事実となってきた。1975年に、東京国立博物館が主催した「日本出土の中国陶磁展」は、全国の出土状況を、この時点で概観する展覧会であり、約800遺跡がリストアップされた。この展観をひとつの契機として、輸入陶磁器の研究は進展し、75年以前では、専論は非常に少なかったが、これ以降、今日まで、各遺跡の発掘報告書の該当部分の内容の充実を含めて、専論が出され、若い研究者が輩出しつつある。出土遺跡の数も著しく増大し、これに伴い当然のことながら情報量が増え、研究者個人の整理能力を越えてきた。

1979年4月、島根県立博物館が主催した「15・16世紀を中心とした出土陶磁シンポジウム」は、時宜にかなった研究会であった。このシンポジウムでは、出土日本陶磁と中国陶磁についての議論が2日間にわたって行われ、全国からおよそ100名の研究者が集まった。この集会の終了後、松江市内の喫茶店で、若い研究者が集まり、放談をかわしたが、この席で、輸入陶磁研究の状況を話しあい、今回のようなシンポジウムを毎年1回位開催できないであろうか、研究や情報交換の場を作ろうではないか、等々の意見が出された。その時点では、これらの意見を具体化する方法まで議論は進まなかったが、多くの研究者の共通する意向が集約され、しだいに研究会結成の気運が高まってきた。

いっぽう、これよりさきの1978年9月に香港中文大学において、「東亜及東南亜貿易陶瓷研討会」と題する国際シンポジウムが開かれ、わが国から、故友寄英一郎、三上次男、長谷部楽爾、亀井明徳らが出席した。ヨーロッパや東南アジア諸国からも多くの研究者が出席し、盛大なシンポジウムとなった。ここでは、中国、ベトナム、タイで生産された陶磁器がアジア地域をはじめとして、西方へ輸出されている状況が確認され、同じく貿易陶磁といっても日本出土品との相違が多いことが痛感された。同時に、多くの日本人の研究者が海外情報にうといことも反省させられ、海外研究者との交流の必要性をあらためて考えさせられた。

このように、日本国内における情報交換の必要性と、しかもあまり混乱しない間にその場を設定する必要性が認識され、また海外研究者との学術交流をしたいという欲求を結合して研究会結成をすすめた。これには当然のことながら財政的な裏付けが必要である。

ちょうどこうした気運の時、トヨタ財団の学術研究費の公募があり、79年9月に、有志11人を募り、発起人になっていただき、急遽「貿易陶磁研究会」を発足させ、代表世話人を三上次男氏に依頼し、「前近代のアジアにおける陶磁貿易の実態の国際的調査研究」のテーマで申請した。幸い79年10月にトヨタ財団の研究助成の決定がなされ、正式に会とし発足した。発起人の氏名は次のとおりである。

三上　次男（出光美術館・代表）
青柳　洋治（上智大学文学部）
岩本　義雄（平安博物館）
小野　正敏（朝倉氏遺跡調査研究所）
亀井　明徳（九州歴史資料館）
佐々木達夫（金沢大学文学部）
鈴木　重治（同志社大学校地学術調査委員会）
知念　　勇（沖縄県立博物館）
長谷部楽爾（東京国立博物館）
森田　　勉（九州歴史資料館）

79年12月に、東京において初会合を開き、当面する課題と調査の方針などについて討議し、初年度は14～15世紀の貿易陶磁の編年を中心として研究を進めることとした。この時期は、その前後の時期に比べて、編年研究が遅れているために選定した。すでに調査が行われた遺跡のなかから、該当するものを選び、再検討することにした。79年度の対象遺跡は以下のとおりで、これらについては、本書で報告した。

① 沖縄県勝連城、御物城など城跡出土品
② 熊本県城南町坂野など熊本県内出土品
③ 山梨県新巻本村出土品
④ 島根県三太良遺跡など島根県内出土品

⑤　神奈川県鎌倉市内遺跡の出土品

⑥　青森県尻八館跡など青森県内および道南の城跡出土品

つぎに、80年9月に、第1回貿易陶磁研究集会を京都同志社大学を会場として行い、全国各地遺跡の研究発表と、インドネシアとホンコンの研究者を招請して講演と質疑を行った。（次項参照）

第1回　貿易陶磁研究集会
'80 京都研究集会

京都同志社大学を会場として、4日間にわたり第1回の研究集会を開催した。当初の計画では自由討論が可能な30名程度の小人数の会を考えており、案内状の発送も極力おさえたが、結局70名の参加者となった。海外交流を推進する目的のため、アブリド氏（インドネシア国立博物館）と J. C. Y ワット氏（香港中文大学）の両氏に研究発表をしていただいた。また研究集会の終了後、両氏は朝倉氏館跡（福井）、草戸千軒町遺跡（広島）、博多市街地遺跡・大宰府史跡（福岡）などを見学していただき、各地研究者と意見の交換を行った。

研究集会の概要は次のとおりである。

第1日　9月5日（金）

13：00　開会

三上次男代表の挨拶

木村俊夫同志社大学文学部長　挨拶

京都出土陶磁（京都府教委、京都国博、平安博物館、京都大学、同志社大学などの発掘資料）の出陳品について、各担当者より説明

八賀晋（京都国博）「東福寺 陽明院の 圓鑑・固山両禅師墓出土陶磁」研究発表

ついで、京都市埋蔵文化財研究所の展示資料の見学。平安博物館により調査中の市内遺跡見学。

第2日　9月6日（土）　9：30～17：00

京都出土品について研究発表

1．永田信一（京都市埋文研）「京都の 輸入陶磁 ——中世を中心に」

2．泉拓良（京大埋文センター）「12～14世紀の 土器・陶磁器の器種構成」

3．寺島孝一（平安博物館）「平安博物館 保管の舶載陶磁——西寺跡および左京八条一町出土資料を中心として」

4．鈴木重治（同志社大学）「同志社キャンパス出土の中国産陶磁器をめぐって」

5．岡内三真（京都大学）「畿内出土の 輸入陶磁器——平安京と平城京を中心にして」

6．橋本久和（高槻市 埋文センター）「高槻出土の輸入陶磁」

18：30～　懇親会　於：鮒鶴

第3日　9月7日（日）　9：30～17：00

14・15世紀の日本出土陶磁器について（79年度貿易陶磁研究会調査報告）

1．沖縄県勝連城、御物城出土資料（鈴木重治）

2．熊本県城南町坂野出土の青磁（亀井明徳）

3．島根県富田三太良遺跡など出土資料（村上勇）

4．山梨県新巻本村遺跡出土資料（小野正敏）

5．青森県尻八館跡出土資料（岩本・佐々木）

第4日　9月8日（月）　9：30～15：30

海外招請研究者による発表他

1．アブ・リド「インドネシアで発見される中国陶磁——14世紀を中心にして」

2．J. C. Y. ワット「宋・元時代の福建の陶磁」

3．鈴木重治「景徳鎮黄泥頭窯跡について」

閉会

『貿易陶磁研究』の刊行

本書のような形で、今後定期的に雑誌の刊行を継続していきたいと考えております。現在の私どもの力では、年一回の刊行が確保できればよいと思います。第2号は、1982年夏に刊行予定で、寄稿をお願いいたします。貿易陶磁に関する論文、資料紹介、研究ノートなど、陶磁研究の発展に寄与するものであり、寄稿者の資格は一切制限ありません。原稿および図、写真等の枚数の制限はありません。寄稿された原稿の採否は編集委員会で決定し、稿料の支払い、掲載料の徴収は行いません。その他、執筆の細部については事務局にお問合せ下さい。

なお今号は、トヨタ財団助成研究報告書の別刷であります。（亀井明徳記）